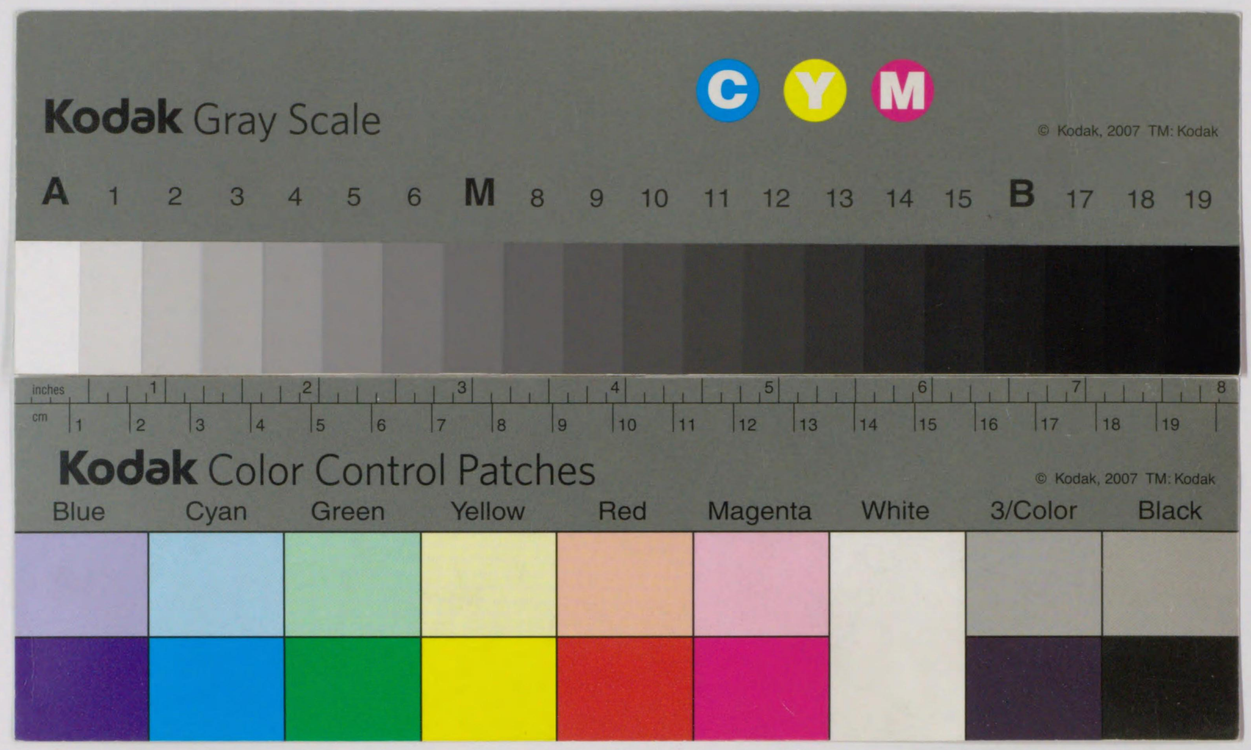

553-94
1200501509379
国立国会図書館

国定教科書に於ける
海外実情記事
衆議院調査会

3e H 9

法人 東亞經濟調査局

立憲民政黨
政務調査館

10 6 10

3セH94
叢A
124

東亞小册第六

國定教科書に於ける

海外關係記事

財團法人
東亞經濟調査局

立憲民政黨政務調査館
10 6 10
叢A
124
6

553
94.1

東亞小册第六

國定教科書に於ける海外關係記事

財團法人 東亞經濟調査局

立憲民政黨政務調査館

國會圖書館
45.4.20
圖書館藏書

824361

はしがき

之を人口食糧問題解決の點から見ても、又海外發展の雄志を鼓吹する點から見ても、又世界的常識を涵養する點から見ても、更に又日本の國際的地位を明確に意識させる點から見ても、日本の少年に向つて海外に關する知識を與へる事は、國民教育上最も緊要なる一項に屬する事は、更めて我等の言を俟つまでもない。

曾てジェスイット傳道師が『我に少年を與へよ、然らば世界をローマ教化せん』と言ひたる如く、雄大にして進取的なる國民を造らんと欲するならば、之を少年時に於て鍛錬淘冶せねばならぬ。然るに我が國の國定教科書は、國語、修身、國史の各科に於て、海外に關する記事が極めて貧弱である。我國の植民地に關する記事に於ても、關東州及滿蒙に關する記事に於ても、外國事情に關する記事に於ても、その貧弱なること、殆ど我等の意想外である。本小册は國定教科書中に現はれたる其等の記事を集め、その全體に對する割合の如何に尠少なるかを示し、識者の反省を乞はんが爲めに刊行するものである。

昭和五年五月

財團法人 東亞經濟調査局

凡例

一、本書には專ら小學校に於て用ゐらるゝ國定教科書の中、尋常小學讀本三年級以上、尋常小學國語讀本三年級以上、尋常小學修身書五、六年級、尋常小學國史五、六年級、高等小學讀本一、二年級、高等小學國史一、二年級用等を臺本とした。

二、地理教科書は日本内地に關するものを除けば全部が海外關係を一册に纏めて取扱へるものなるが故に何人も簡單に之を一讀し得るを以て態々玆に取扱ふ必要なしと考へ、たゞ分量の比例のみを示すに止めた。（本書八三頁參照）

三、便宜上、内容を四種に分類したが第一種「植民地に關する記事」といふのは樺太、臺灣、朝鮮並に南洋委任統治領に關するもの、第二種「滿蒙、關東州に關する記事」も之等の各地方に論及せるもの、第三種「國際關係に關する記事」は苟くも多少でも日本と外國との間の交涉に觸れた個所を全部拔萃せるもの、而して第四種「世界及外國事情に關する記事」は日本と直接には無關係でも一般に世界事情並に外國事情に關する叙述を取扱つた記事を拾ひ集めたものである。

四、本書編纂の主眼とするところは主として第一種と第二種とを簡單に讀者に示すにある。

五、各所の前書の所に於て「その頁數」とあるは原書に於ける頁數の分量を表し、「その歩合」とあるはその部分の頁數と全卷頁數との比例を示す。以て讀者の判斷に便せんとするに外ならぬ。

目次

尋常小學讀本

卷五、六……（一）
卷七、八……（二）
卷九、十……（八）
卷十一、十二……（一八）

尋常小學國語讀本

卷五、六……（二三）
卷七、八……（三五）
卷九、十……（四一）
卷十一、十二……（四九）

尋常小學修身書

卷五……（六一）
卷六……（六五）

尋常小學國史書

卷上……（六七）
卷下……（七〇）

尋常小學地理書

卷二……（八二）

高等小學讀本

卷一、二……（八四）
卷三、四……（九五）

高等小學國史書

卷上……（一〇五）
卷下……（一一一）

立憲民政黨 政務調査館

尋常小學讀本

卷五 卷六 三年級用

一、植民地に關する記事なし。

二、滿洲關東州蒙古に關する記事なし。

三、國際關係に關する記事……（一）頁

卷六　第十八　豐臣秀吉（二）……その一部

その頁數　二・一

二卷中に占むるその歩合　〇・〇〇九強

四、世界及び外國事情に關する記事……（一）

卷六　第十四　ゴム……その一部

その頁數　二・〇

その歩合　〇・〇〇九弱

右各項の內容は下の如し。

但し卷五中には採錄すべき記事なし。

〔卷六〕

第十八　豐臣秀吉（二）—その一部（二・一頁）（挿繪一）

今度は朝鮮を通つて明國を討たうと思つたが、朝鮮王は明國にみかたしたので秀吉は兵を送つてまづ朝鮮を攻めた。明國は朝鮮をたすけて、二年間の長い軍がつゞいたが、その中に、日本兵の强いのにおそれて、明國からわぼくを申しこんで來た。その使の持つて來た文の中に、秀吉を日本國王にするといふ事が書いてあつた。秀吉は大そうおこつて、

「日本の國に天皇陛下のいらつしやる事を知らないか。無禮な事を言ふな。」

と言つて、その使を追ひかへして、また軍を始めた。しかしその軍の終らない中に、秀吉は病氣にかゝつてなくなつた。

第十四　ゴム——ソノ一部(二頁)(挿繪一)

……

甲「ゴムハドウシテツクルト思ヒマスカ。」

乙「ヨクハ知リマセンガ、木カラ取ルノダトイフコトヲ聞キマシタ」

甲「サウデス。ゴムノ木ノ汁カラツクルノデス。ゴムノ木ハ暑イ國ニ生エル木デソノ木ノミキニキズヲ附ケテオクト、乳ノヤウニ白クテネバネバシタ汁ガ流レ出マス。ソレヲ小サナ入物ニ受ケテ、バケツニ集メルノデス。ソレニクスリヲ入レ固メテカワカシマス。ソレヲ仕上ゲルト、リツパナゴムニナルノデス。ゴムノサカンニ取レル所デハ、ゴムノ木ノ林ガ日本ノ杉林ノヤウニツヾイテヰマス。

巻六 三 巻正
用 学 尋

巻七 巻八 四年級用

一、植民地に關する記事なし。

二、滿蒙關東州に關する記事なし。

三、國際關係に關する記事。……(三)

巻七　第三十四　廣瀬中佐
第三十五　廣瀬中佐の歌
巻八　第三十一　橘中佐(一)(二)
第三十二　橘中佐(二)
その頁數合計　一三・九
その歩合　〇・〇五三強

四、世界及び外國事情に關する記事。……(五)

巻八　第二十四　裏い國々の人
第二十七　虎狩
第三十三　地球
第三十四　海と陸
その頁數合計　一八・三
その歩合　〇・〇七〇強

右各項の内容は次の如し。

〔巻七〕

第三十四　廣瀬中佐（四頁）（挿繪一）

大砲ノヒゞキハ天地モクツガヘルカト思フバカリナリ。

廣瀬中佐ノ乘レル福井丸ハ、他ノ三隻ノ船トトモニ、今旅順ノ港口ニ進ミ入リタリ。爆發ノ音タチマチ船底ニヒゞク。中佐ハシヅカニ、

「杉野ハ今、點火ヲ終ヘタルゾ。總員ボートへ。」

ボートハヤガテ福井丸ノカタハラニ下サレテ、一同乘リウツレリ。

見渡セバ杉野ナシ。中佐ハ心配氣ニ、

「ヨシ、尋ネ來ン。」

ト、タゞ一人クマナク船内ヲ尋ネタレドモ杉野ノ姿ナシ。

「殘念ナリ。今一度。」

ト、中佐ハマタモ船内ヲカケメグレリ。

「杉野、杉野。」

中佐ノスルドキ聲ハ、敵ノウチ出ス砲聲ノ中ニ聞ユ。サレド杉野ハ見當ラズ。

「今一度。」ト、中佐ハ三度尋ネ廻レリ。

「杉野、杉野。」

船ハ次第ニ沈ミ行キテ、水ハスデニ甲板ヲヒタセリ。

「今ハゼヒナシ。」

ト、中佐ハボートニ乘リウツレリ。

四隻ノ船ハ皆爆沈シ、乘組員ハボートニウツリテ、思ヒ〳〵ニコギ去ラントス。敵ノ砲臺ヨリハ彈丸ヲアビセカクルコトイヨ〳〵盛ナリ。中ニモ福井丸ノボートニハ敵ノ彈丸雨ノ如クニ降注ゲリ。ボートハ水ニ落ツル彈丸ノシブキニ包マレタリ。中佐ハボートニ坐シテ、ナホモ杉野ヲウシナヒタルヲナゲキヰタリ。一發ノ彈丸ハタチマチ中佐ノ身ヲハラヘリ。中佐ハ一片ノ肉ヲボートニ殘シテ海中ニハウムラレタリ。

第三十五　廣瀬中佐の歌（一・七頁）

（一）

とゞろくつゝおと　飛來る彈丸。
荒波洗ふ　デツキの上に、
やみを貫く　中佐のさけび。
「杉野はいづこ、　杉野は居ずや。」

（二）

船内くまなく　尋ねる三度、
呼べど答へず　さがせど見えず。
船は次第に　波間に沈み、

敵彈いよ〳〵　　あたりに繁し。

（三）

今はとボートに　　うつれる中佐、
飛來るたまに　　たちまちうせて、
旅順港外　　うらみぞ深き、
軍神廣瀨と　　其の名殘れど。

〔巻八〕

第三十一　橘中佐（一）（四頁）（插繪一）

明治三十七八年ノ戰役ニ、君ノ爲、國ノ爲、名譽ノ戰死ヲトゲシ軍人多カリシ中ニ、海軍ノ廣瀨中佐、陸軍ノ橘中佐ノ二人ハ、軍神トマデアガメラレタリ。

橘中佐ハ今上陛下ノ皇太子ニテアラセラレシ時、東宮武官トシテ、オソバ近ク仕ヘシ人ナリ。三十七年四月出征ノ命ヲ受ケ、第二軍ニ從ヒテ戰地ニ向ヒシガ、八月ノ末、部下ノ大隊ヲ率キテ、遼陽ノ戰ニ參加セリ。

敵ハ山ニヨリテ陣地ヲ固メ、盛ニ彈丸ヲ打出ス。我ガ兵之ヲ物トモセズ、敵陣目ガケテ突擊スルニ、敵ハ劍ノ林ヲ以テ我ヲムカフ。中佐眞先ニ立チテ、敵中ニヲドリ入リ、タチマチ三人ヲ斬倒ス。敵ノ彈丸雨アラレノ如クニ飛來ル。中佐スデニ右ノ手ニ傷ヲ受ケタレドモ、左ノ手ニ軍刀ヲ振ルヒテ、部下ノ兵士ヲハゲマシ〳〵、ツヒニ日ノ丸ノ國旗ヲ山上ニ立ツ。時ハ八月三十一日、朝日ノイマダ上ラザル頃ナリキ。

敵ハ之ヲ見テ、三方ヨリ盛ニ大砲ヲ打チカク。イカニ心ハ堅クトモ身ハ鐵石ニアラザレバ、砲丸ニ倒ル、兵士數知レズ。敵ハスカサズ、サラニ新手ヲ加ヘテ攻來ル。中佐ハ大音ニ、

「一度國旗ヲ立テタル此ノ高地、全滅ストモ敵ノ手ニ渡スナ。一步モ退クナ。」

トサケビテ、敵ヲ擊退スルコト數度ニ及ブ。此ノ時、中佐第二彈ヲ右ノ手ニ、第三彈ヲ腹ニ受ケキタレドモ、少シモヒルメル色ナク、ナホ奮戰ヲ續ケタリ。タチマチ砲彈ノ一破片中佐ノコシニアタリ、中佐ハドウト其ノ場ニ倒レタリ。

第三十一　橘中佐（二）（四・二頁）

カタハラニアリシ內田軍曹ハ急ギ中佐ヲザンガウノ內ニ助ケ入レテカイハウス。戰ハマスマス烈シ。中佐ハ目ヲ見張リテ軍刀ヲツエニ起上ラントス。軍曹ハ中佐ヲセオヒ、彈丸ノ下ヲクグリテケハシキガケヲカケ下ル。

ホツト一息ツク折カラ、飛來ル一彈又モ中佐ノ胸ヲ貫キ、軍曹ノ胸ヲモ打チヌク。二人ハ一度ニ打倒サレテ氣ヲ失ヘリ。

吹ク朝風ニ中佐モ軍曹モ生氣附キタリ。軍曹ハカタハラニアリシ負傷兵ト共ニ中佐ヲイタハル折カラ、敵ノ突擊ノ聲盛ニ聞ユ。陣地ハフタヽビ敵ニ取返サルヽニアラズヤ。中佐ハ

「殘念ナリ。多數ノ部下ヲ失ヒテ占領シタル陣地ヲ取返サルヽカ。」

ト言ヒナガラ、形ヲ正シテ、

「今日ハ我ガ皇太子殿下ノ生マレ給ヒシ日ナリ。此ノメデタキ日ニ討死スルハ軍人ノ面目ナリ。」

ト言ヒツヽ息ヲエタリ。

コレヨリ先、中佐ハ馬丁ニ、

「若シ夜明頃突擊ノ聲聞エテ砲聲・銃聲ナホ續キナバ、コレ我ガ軍ノ苦戰ナリ。我必ズ戰死セン。」

ト言ヒシガ、其ノ言不幸ニモ適中シタリキ。

橘中佐ハ平生志堅ク勇氣ニミチタル軍人ニシテ、部下ヲアハレム心モ深カリキ。此ノ平生ノ行アリテ此ノ壯烈ナル死ヲトゲ、中佐ガ多數ノ戰死者中、特ニ軍神トアガメラルヽモウベナリトイフベシ。

四

〔巻八〕

第二十四　寒い國々の人（五頁）（繪二）

世界のごく寒い國々の人は、我々とは餘程違つた珍しい生活をしてゐる。さういふ人々の食物はおもに獸や魚の肉で、穀物や野菜などはほとんど用ひない。着物は毛皮で造る。帽子も靴も大ていは獸や魚の皮で造るのである。頭のてつぺんから足のさきまで毛皮づくめの人が、雪の中にゐるのを見ると、まるで獸かと思はれる。

家は所によつて造方が一樣でない。獸の皮のテントを張つて家にする所もあれば、また地面に穴を掘つて、其の上にテントを屋根にする所もある。中には、夏はテントを張り、冬は氷の家を造る所もある。氷の家は氷を角石の樣に切り、之を積重ねて茶わんを伏せた樣な形に造る。總べて寒い國の家は寒さを防ぐ爲に窓を小さくし、入口もせまくしてある。

燈は言ふまでもなく食物をにたり燒いたりするにも、獸や魚の油をもやす。食器も大ていは獸や魚の骨でこしらへる。

獸を射たり魚を釣つたりするのが每日の仕事でそれに使ふ弓矢や釣ざを●釣針から舶や船具までも獸や魚の皮●骨などで造るのである。

人が乘つたり、荷物を運んだりするのには、車や馬車の代りに、そりといふものを用ひる。そりは犬やとなかいといふ獸に引かせる。

となかいは鹿の類で、鹿よりも大きい。足の裏にもこはい毛が生えてゐて、雪や氷の上を走るのに都合がよい。大きな角を振立て〳〵そりを引いて廣い雪の野を走る樣は見事なものである。となかいの肉は寒い國の人にとつては何よりの御ちそうで、滋養分もすこぶる多い。乳も牛乳よりすぐれてゐて、老人や子供も喜んで飲む。毛皮は着物になり、角や骨はいろ〳〵の道具になる。くびの所に生えてゐる長い毛は物を縫ふ糸に使ひ、ふんは乾かしてたき物にする。寒い國の人は、となかいが無ければ、生きてゐられないくらゐである。

第二十七　虎　狩（六・二頁）（挿繪二）

南の方の熱い國には、日本人がゴムの木を仕立ててゐる所が方々にある。其のゴム園の一つに虎が出て來て、度々家畜などをさらつて行くので、人々は、皆困つてゐた。或日の夜明方に、ぶたや犬がしきりに鳴きさわぐので、みんなが起きて見ると大きな虎がぶたをくはへて、すぐそばの林へ逃げこむところであつた。

此のまゝにして置いては危險で仕方が無いから、ゴム園の人々が相談して、すぐ虎狩を始めることにした。虎の逃げこんだ林は、大木の茂つた大きな山に續いてゐる。若し虎が其の山の中へはいつてしまふと、手の付け樣がない。そこで第一に山と林の境を通つて、足跡の有り無しをしらべることになつた、虎がどこにかくれて居るかわからないのに、生茂つた木や草の中を進むのは、きはめて危險な仕事であるが、人々は勇氣を奮つてとう〳〵境目を横ぎつた。虎の足跡が見えないので、まだ確に林の中に居ることがわかつた。一同は勇氣百倍して、いよ〳〵攻撃に着手することになつた。

虎は身をかくす物のない所をきらふものだから、林の外へ出る心配はない。そこで全員一列に境目の所に並んで、手に手に武器をかまへ、指揮官の命令にしたがつて一歩々々虎のゐる方へおし寄せて行く。敵の領分が次第々々にせまくなる。やがて向ふの草木がざわざわと動いて、太いうなり聲が聞える。一同は息を張りつめて、指揮官のさしづを待つ。

「聲をねらへ。」「打て。」

木だまにひゞく銃聲、天地もふるふばかりに虎のさけび。人丈よりも高い草むらが大波の樣に動いて、鏡の如き目が其の間からきらりと光る。虎はすきをねらつて、今にも飛びかゝらうとしてゐるらしい。指揮官の命令で、一同は急いでそばの木に上つた。

草の中にかすかに見える目を目あてに、木の上から指揮官が一發打つた。うまく顏に命中した。虎は一聲高くうなつて、をどり上る。すかさず右の胸にまた一發。續いて人々が一せいにたまを浴びせかける。虎は苦しまぎれに草の中をくるひ廻る。

しばらくして一同は木から下りて、虎に近附いた。虎は顏と胸と後足に重傷を受けて、もう立上る力も無いが、それでも人が近寄つたら飛附かうとしてゐる。指揮官がさらに一發左の胸を打つたので、さすがの大虎も二三度はね上つた後に、大地にどつと倒れた。喜びの聲は林の內外にひゞき渡つた。

第三十三　地　球（三頁）

我々の住んで居る地球は、周圍が一萬里もある大きな球で、まはりは空氣に包まれてゐる。表面には高低があつて、低い所には水がたまつてゐる。其の高い所が陸で、水のたまつてゐる所が海である。海の廣さは陸の廣さの二倍半ばかりある。

陸の中には又高い所と低い所があつて、それが形によつて山・谷・平地などと呼ばれてゐる。水のたまつてゐる所や流れてゐる所もある。たまつてゐるのは湖や沼で、流れてゐるのは川である。海にも深い所があり、淺い所がある。人間や動物や植物が、陸の上、水の中、それ〴〵自分に都合のよい所に棲み、都合のよい所に生えて居る。

地球を南北の二つに分けて、南の半分を南半球、北の半分を北半球といふ。又南半球の南の端は南極、北半球の北の端は北極といふのである。北半球と南半球とは季節が全く反對で、北半球の春は南半球の秋、南半球の冬は北半球の夏である。又兩半球の境目の邊は、大てい年中寒だ暑くて雪も降らず氷も張らないが、兩極に近い所は、いつもひどい寒さで、美しい花などはほとんど見ることが出來ない。我が日本はごく寒い所とごく暑い所の中間にあるので、氣候が餘り片寄り過ぎず、四季折々のながめが多い。

第三十四　海と陸（四・一頁）（挿繪一）

地球上の陸地を分ちて、アジヤ洲・ヨーロッパ洲・アフリカ洲・南アメリカ洲・北アメリカ洲及び大洋洲とし、海を分ちて、太平洋・大西洋・印度洋とす。我が大日本帝國はアジヤ洲の東部にあり。

地球は圓きが故に、いづこより出發して東へ東へと進むとも、西へ西へと進むとも再び元の所に歸り來るべし。我が國の港を出でて東へ向ひて航すれば、およそ二週間にして、太平洋を越えて北アメリカ洲の合衆國に着す。こゝに上陸して、四五日の間汽車に乘續くれば、大西洋の海岸に達す。こゝより再び汽船に乘りて、大西洋を東へ進まば、六七日にしてヨーロッパ洲の港に入るべし。イギリス・フランス・イタリヤ・ドイツ等の國々は、皆ヨーロッパ洲にあり。ロシヤ國はヨーロッパとアジヤとの二大洲にまたがれり。

ヨーロッパ洲の西岸に上陸し汽車に乘りて東へ向はば、フランス・ドイツ等を過ぎてロシヤに入り、シベリヤを横切りて、滿洲より我が國に歸るを得べし。此の間に費すところ十數日に過ぎず。ヨーロッパ洲より汽船にて日本に歸るには、ヨーロッパ洲とアフリカ洲との間なる地中海を過ぎ、印度洋に出で、印度の南を東へ向ひて進むべし。それより航路を東北へ轉じ支那を左にして進むときは、出發より六七週間にして我が國の港に入るなり。

巻九 巻十 五年級用

一、植民地に關する記事……（九）

巻九　第十　樺太だより（兄より弟へ）

第十一　間宮林藏

巻十　第十五　阿里山ノ森林

◎樺太に關する記事　頁數合計　一五・三

二巻中に占むるその歩合　〇・〇五二弱

◎臺灣に關する記事　頁數　六・一

その歩合　〇・〇二一〇強

二、滿蒙關東州に關する記事なし……（二）

三、國際關係に關する記事

巻十　第十七　水師營の會見

その頁數　三・七

その歩合　〇・〇一二強

四、世界及び外國事情に關する記事……（三）

巻九　第七　高い建物

第十三　西洋の子供

第二十二　熱イ國々ノ人

巻十　第十　張良と韓信

第三十　ブラジルから

その頁數合計　二七・九

その歩合　〇・〇九四強

右各項の内容は次の如し

なほ各標題下の括弧内の頁數は各標題の記事の占むる頁數を表す。

〔巻九〕

第十　樺太だより（兄より弟へ）（八頁）（挿繪三）

第一信

其の後、うちでは皆さんお變りのないことと思つてゐます。豫定の通り小樽から樺太通ひの汽船に乘つて、昨日無事に此の大泊に着きました。至つて元氣です。日よりがよかつたので二百二十七海里、十八時間の航海も、誠に靜かなものでした。大泊の沖合から陸上をながめると、山を中にして、市街が二つに分れて見えます。右の方には商家や工場らしい建物が多く見え、左の方には役所風の建物の多い中に、露西亞風の家も所々にまじつて見えます。此の邊の海は、二月頃には沖合五百間ぐらゐの所まで人馬の往來が出來る程、厚く氷が張ることがあるさうです。

當地は樺太の入口で、廣い道路がはるかに北へのびて、露領樺太まで續いてゐるし、鐵道もこゝから豐原をへて、榮濱まで通じてゐます。町は商賣が盛で、中々にぎやかです。寒い所だけに、此の邊の家は防寒の用意が中々行屆いてゐます。わたしの泊つてゐる旅館も、窓のガラス戸が總べて二重です。もう二三日こゝに居て、近所を見物するつもりです。

第二信

一昨日の午後大泊を出帆して、昨日の夕方當眞岡港に着きました。もつと早く着くはずでしたが、西能登呂岬の手前で急に濃霧に包まれ、止むを得ず途中で一夜を明かしたために、大分おくれたのです。翌朝、西能登呂岬を廻ると間もなく、船長が海岸を指さして「あそこが白主といつて、昔日本の役所のあつた所です。有名な間宮林藏等が樺太探檢に來た時も、先づあそこに上つたのです。」と教へてくれました。

眞岡は樺太には珍しい不凍港で、市街はかなりにぎやかです。一體樺太はどこでも漁業が盛ですが、殊に此の西海岸では、鮭や蟹がたくさんとれます。鮭が產卵のために海岸近く寄つて來る時のさわぎは、すさまじいもので、それといふ間に、船を出す、網をひく、まるで軍のやうだといひます。

第三信

眞岡から十九里、山の中ばかり通つて、此の豐原に着きました。其の途中で、とど松・えぞ松などの森林が幾里ともなく續いてゐるのや、五六尺もあるふきの生ひ茂つてゐるのを見た時にはしみ〴〵樺太らしいと感じました。

豐原はさすがに樺太廳の所在地だけあつて、家並の揃つた町です。町を歩くと、大きな犬がよく目につきますので、土地の人に尋ねてみたら、冬これにそりを引かせるのだといふ事でした。此の邊は殊

に地味がよいさうで、かなり廣く開墾されてゐます。
樺太は天産の多い土地で、漁業の外にも、農業・林業・鑛業、いづれも追々盛になつて行くさうです。石炭の多い事はかねて聞いて知つてゐましたが、森林がこんなに有らうとは思ひませんでした。樺太の全面積の九割が森林といふのですから、大そうなものです。これからきり出したとど松やえぞ松などで、紙の原料のパルプを造つてゐる大きな工場が、方々にあります。
まだ珍しい事がたくさんありますが、四五日の中には歸途につきますから、それはお目にかかつてお話しませう。

第十一　間宮林藏（七・三頁）（挿繪一）

樺太が大陸の地續であるか、又は離れ島であるかは、世界の人の久しく疑問としてゐた事であつた。ところが實地をしらべて此の疑問をといた人が、我が日本人の中から出た。それは間宮林藏である。今から百二十年ばかり前、文化五年の四月に、林藏は幕府の命によつて、松田傳十郎と共に、樺太の海岸を探檢した。樺太が離れ島で、大陸の地續でないといふことは、此の探檢によつて大ていわかつたけれども、なほよく之を確めようと、同年七月に、林藏一人また樺太へ向つた。
先づ樺太の南端の白主に渡り、土人をやとつて從者とし、小舟に乘つて、いよ〳〵探檢の途に上つた。それから一年ばかりの間、風波をしのぎ、飢寒と戰ひ、非常な困難をかして、樺太の北端に近いナニヲーまでたどりついた。それから北は波が荒くて船を進める事が出來ず、山を越えて東海岸に出ようとすれば、從者共がきかない。そこでノテトといふ所まで引返し、其の地の酋長コーニの家にとゞまつて、望をとげる時機を待つてゐた。
此の間、網をすいたり、船をこいだり、魚をとる手つだひをしたりなどして、土人に親しんで、いろ〳〵の話を聞いてゐる中に、對岸の大陸に渡つて其の樣子を探る方が、目的を達するのに便利であると心づいた。そこで林藏は、今度コーニが交易のために大陸へ渡る時同行したいと賴んだ。コーニは
「顏や樣子の違つてゐるお前が向ふへ行つたら、どんなひどい目にあふかも知れない。」
と言つて、しきりに止めたが、林藏は無理に賴んで、同行することにした。
いよ〳〵出發の日が近づくと、林藏はこれまでの一切の記錄を取りまとめ、從者に渡して、
「若しわたしがあちらで死んだと聞いたら、お前は之を白主へ持つて行つて、日本の役所に差出せ。」
と言附けた。
さて文化六年六月の末に、コーニ・林藏等八人は、小舟に乘つて、今の間宮海峽を横ぎり、デカストリー灣の北に上陸し、それから山を越え、川を下り、湖を渡つて、黑龍江の岸のキチーに出た。其の間、山にかゝると舟を引いて越え、川や湖に出ると舟を浮べて進んだ。大方野宿で、野宿するには、木の枝を切つて地面に立て、其の上を木の皮でおほひ、八人が其の中に一固まりになつて、一夜を明すのである。
キチーに出て、土人の家に泊つた。ところが土人等は林藏を珍しがつて、別の家へ連れて行き、大勢で取圍んで、だいたり、ふところを探つたり、手足をなでてみたりした。林藏は餘りのことに驚いたが、言葉も通じないので、仕方がなく、たゞするまゝにしておいた。やがて酒さかなを出してすゝめたが、林藏は其の心をはかりかねて、手を附けないでゐると、土人等は怒つて、林藏の頭を打ち、むりに酒を飮ませようとした。其の時、折よく同行の樺太人が來合せて、土人をなだめ、やうやく林藏を助け出した。
翌日此の地を立つて、五日の間河をさかのぼり、目的地のデレンに着いた。デレンは各地方の人々が交易のために集つて來る所である。こゝではあやしまれ、なぶりものにされる事が一そうひどかつたが、林藏はこんな中でも、土地の事情を研究することを忘らなかつた。
コーニ等の交易は七日で終つた。歸りは黑龍江を川口まで下り、それからノテトで林藏はコーニ等に別れて、九月の半ばに白主に歸つた。林藏の二度の探檢によつて、樺太が大陸の一部分でない事が明白になつたばかりでなく、此の地方の事情も始めて我が國に知られた。林藏の此の功績は、間宮海峽の名によつて、いつまでも傳へられてゐる。

〔卷十〕

第十五　阿里山ノ森林（六頁）（挿繪二）

明治神宮ノアノ見上ゲルヤウナ大鳥居ハ、阿里山森林ノ檜ヲ使ツタモノデアル。今デハ阿里山トイヘバ、檜ノ產地トシテ知ラナイ者ハナイガ、明治三十二年ニ一警官ガ發見スルマデハ、カウイフ所ガ臺灣ノ山中ニアラウトハ、誰モ思ハナカツタ。
阿里山ノ森林ハ、嘉義トイフ町ノ東方十八里ノ所ニ在ツテ、廣サハ東西二里、南北五里ニワタツテヰル。位置カライヘバ、半バハ熱帶ニ屬シテヰルガ、海拔二千八百尺カラ八千七百尺ニモ及ンデヰルカラ、高イトコロハ氣候ガ溫和デ、內地ニアルヤウナ植物ガ多イ。五六千尺グラヰノ所ニハ、重ニ椎・樫等ガ茂ツテヲリ、七千尺ヲ越エルト、有名ナ檜ノ森林トナル。八千尺以上ニナルト、トガヤ姬小松ナドガマジツテクル。
阿里山ハ地味ガ植物ノ生育ニ適シテヰルカラ、コレ等ノ樹木ハ、幹ヲ接シ、枝ヲマジヘテ、晝モ暗イ程盛ニ生ヒ茂ツテヰル。中ニモ檜ニ至ツテハ、他ニ類ノナイ程長大ナモノガ多ク、直徑十數尺、高サ

百四五十尺ニ及ブモノモ少クナイ。殊ニ神木トイハレテキルノハ、直徑二十一尺、周圍六十四尺、樹齡三千年ニ及ンデキル。

阿里山ノ伐木事業ハ、臺灣總督府ノ手デ經營サレテキル。毎日々々多數ノソマガ伐木ニ從事シテキルガ、何シロ高山ノ事デハアリ、シカモ木ガ大キイカラ、伐倒シテモ、ソレヲ集メテ運ビ出スノハ、ナカナカ困難ナ仕事デアル。ソコデ所々ニ新式ノ集材機械ヲスエ附ケテ、山ノ上ヤ谷ノ底カラ材木ヲ運ンデ來テハ、汽車ニ積込ムノデアル。

此ノ汽車ハモツパラ材木ヲ運ビ出スタメニ、嘉義ト阿里山內ノ作業地トノ間ヲ運轉シテキル。平地カラ八千尺以上ノ山地ニ上下スルノデアルカラ、鐵道開通ノ當初ハ非常ニ故障ガ多クテ、トテモ役ニタチサウニモナカツタ。其ノ後苦心研究ノ結果、汽車ノ大改良モ出來、從業員ノ技術モ進ミ、今日デハ安全ニ運轉スルコトガ出來ルヤウニナツタ。

作業地ヲ出タ汽車ハ、險シイ山腹ヲ縫ヒ、深イ谷ヲ渡リ、曲リクネツテ進ム。其ノ間乘務員ノ苦心ハタイシタモノデ、チヨツト油斷スレバ、汽車ハ忽チ轉覆シテシマフ。

山カラ下ツテ來タ汽車ハ、東洋第一ト稱セラレル嘉義製材工場ニ入ル。此ノ工場ニハ、大ジカケノ製材機械ガスエ附ケテアツテ、大小樣々ノノコギリガ勢ヨク動イテキル。貨車カラ下サレタ材木ハ、先ヅ大キナ貯木池ニ貯ヘラレルガ、必要ニ應ジテ池カラ引上ゲラレテ、自動的ニ工場ヘハイツテ行ク。サウシテ場內ヲ通ル中ニ、幾ツカノノコギリニカヽツテ、見ル〳〵角材ヤ板ナドニヒキ割ラレル。

カウシテ出來上ツタモノハ、本島內ハイフマデモナク、廣ク內地・朝鮮等ニ送リ出サレルノデアル。

三

第十七　水師營の會見（三・七頁）

旅順開城約成りて、
敵の將軍ステッセル
乃木大將と會見の
處はいづこ水師營。」

庭に一本棗の木、
彈丸あとも著く、
くづれ殘れる民屋に、
今ぞ相見る二將軍。」

乃木大將はおごそかに、
御惠深き大君の
大みことのり傳ふれば、
彼かしこみて謝しまつる。」

昨日の敵は今日の友、
語ることばもうちとけて、
我は稱へつ、彼の防備。

彼は稱へつ、我が武勇。」
形正して言出でぬ、
『此の方面の戰闘に
二子を失ひ給ひつる
閣下の心いかにぞ。』と。」
『二人の我が子それ〴〵に、
死所を得たるを喜べり。
これぞ武門の面目。』と、
大將答力あり。」
兩將晝食共にして、
なほも盡きせぬ物語。
『我に愛する良馬あり。
今日の記念に獻ずべし。』」
『厚意謝するに餘りあり。
軍のおきてに從ひて、
他日我が手に受領せば、
長くいたはり養はん。』」
『さらば』と、握手ねんごろに、
別れて行くや右左。
つゝ音絕えし砲臺に
ひらめき立てり、日の御旗。」

〔卷九〕

四

第七　高い建物（五・二頁）（挿繪三）

世界一の高い建物は、フランスのパリーにあるエツフエル塔である。これは明治二十二年、パリに大博覽會が開かれた時に、フランスのエツフエルといふ人が建てたもので、高さが實に三百メートル、全部鐵材で出來てゐる。頂上に近い所に十六メートル四方のグラス張の部屋があつて、こゝに氣象觀測室、無線電信室などがある、部屋の周圍は物見臺になつてゐて、晴れた日には、遠く百三十キロメートルのかなたまで、一目に見渡される。

先年歐洲大戰爭の時に、フランス人はこゝに强力な無線電信機・大探照燈・高射砲などを設け付けて、敵の航空機の攻撃を防いだ。此の塔もまた護國の勇者といつてよからう。

倒れさうで倒れないといふので、世界の名物になつた高い建物は、イタリヤのピザといふ町にある斜塔である。大理石で出來た美しい八階の塔で、高さがおよそ五十五メートル、頂上ではかると、五メートル程も南へかたむいてゐる。八階目には幾つかの鐘がつるしてあつて、下からひもを引けば鳴るやうになつてゐる。どういふわけで此の塔がなゝめになつてゐるかといふ事はよくわからないが、多分地ばんが悪い爲に、工事中にかたむいたのであらうといふ事であ

る。なる程よく見ると、四階目から上の方は此のかたむきの度を少しでもへらして行かうとした苦心の跡が見える。此の塔が出來てから今日までおよそ五百七十年、相變らずかうして立つてゐたのかと思ふと、何となくこつけいな感じがする。

家で一番高いのは、アメリカのニューヨークにあるウルワースビルデイングである。地上から二百四十メートル餘も高くそびえ、それが五十五階になつてゐる。部屋の數は、地下室を加へて千餘り、大ていは大會社・大商店の事務室として使はれてゐる。又料理屋や理髪店もあれば、りつぱな大水泳場もある。昇降器は三十臺以上もあつて、何階へでもまたゝく間に行かれる。地下室ではいろ〳〵の機械が物すごく活動して、此の建物中の昇降器を動かしたり、電燈をつけたり、部屋部屋を暖めたりしてゐる。此の一棟に事務をとつてゐる者が十餘萬人、日々配達せられる郵便物が十五六萬通もある。つまり地上に平たく廣がるべき都市が、一けんの高い家にをさめられたやうなものである。

第十三　西洋の子供（四・三頁）

昨日の午後、岡野さんといふ方がうちへおいでになつた。おとうさんと長い間お話をなさつた後で、うちの者と一しよに夕飯をおあがりになつた。

其の時、英吉利や佛蘭西や亞米利加などの、いろいろ珍しいお話があつた。其の中に向ふの子供の事があつておもしろかつたから、こゝに書いて置く。

「西洋の子供は、大人の言ふ事をよくきゝます。例へば往來で、かべに樂書をしたり、又は人のじやまになる遊をしたりしてゐる時、どこかの女中が通りかゝつて『そんな事をするものではありません』と言聞かせると、子供はすなほにすぐそれを止めます。惡口などを言ふやうな事はありません。」

お客樣が此のお話をなさつた時、みんなが僕の顏を見たので、少しきまりが惡かつた。

「國によると、りんごの木などを通路の並木にしてゐる所がありまして、さういふ所では、大てい其の實を賣つて、公共の費用にあてるのです。秋になると、きれいな赤い實が、手の屆く所にもたくさんなつてゐますが、それを取る子供はめつたにありません。公の物だといふ事をよく知つてゐるのです。或時、私が其のりんごの並木の下を歩いてゐると、學校歸りの子供が、何かしきりに話し合ひながら、私の二三間先を歩いて行きます。やがて見事なりんごが木の下に落ちてゐるのを見附けて、一人がそれを拾ひ上げました。どうするかと思つて見てゐると、木の根本の、人のふまないやうな所に置いて行きました。私はつく〴〵感心してしまひました。」

僕もすつかり感心して、えらいなあと思つた。

「人なつこくて、活潑で、誰の爲にもまめに用をするのも、あちらの子供の美點の一つでせう。人が路にまよつて困つてゐるのを見ると、親切に案内してやります。女の子でももぢ〳〵などはして居ないで、誰の前でもはき〳〵と口をきいて、はにかむとか、惡びれるとかいふ事はありません。」

此の間學校の歸りに、知らない人に路を聞かれて、役場の前まで案内して上げた事を思ひ出して、僕は心持がよかつた。

後でおとうさんにうかゞつたら、岡野さんは長く西洋へ行つてゐて、一月ばかり前に歸つて來られたのださうだ。

第二十二　熱イ國ノ人々（五頁）（挿繪二）

廣イ地球ノ上ニハ、ゴク寒イ國モ少クナイガ、又ゴク熱イ國モタクサンニアル。サウイフ熱イ國々デハ、人々ノ生活ノ樣子モ我々トハ餘程違ツテヰル、着物ハ大テイ簡單デ、幅ノ廣イ布ヲ肩カラナヽメニマトウテヰル所モアレバ、フロシキノヤウナ布ノ眞中ニ穴ヲアケ、其處ニ首ヲ通シテ着テヰル所モアル。又腰蓑ノヤウナモノヤ、獸ノ皮ナドヲ腰ニマイテヰルダケノ所モアル。

食物ハ我々ト同樣ニ、穀類ヤ野菜ヤ肉類ヲ食ツテヰル所ガ多イガ、中ニハ田畑モ作ラズ、家畜モカハズ、野生ノクダ物ヲ常食ニシテヰル所モアル。

家デ珍シイノハ、水中ニ數十本ノクヒヲ打ツテ、其ノ上ニ建テタモノ、マルデ鳥ノ巢ノ樣ニ、高イ木ノ上ニ造ツタモノナドデアル。

熱イ國々ニハイロイロノ植物ガ勢ヨク生ヒ茂ツテ、濃イ綠ノ陰ヲ作ツテヰル所ガ多イ。ソンナ所ニハ、猛獸・毒蛇ナドガタクサンニ棲ンデヰル。シタガツテソレヲ狩ル事ガヨク行ハレル。中デモ勇マシイノハ、象ニ乘ツテ虎ヲ狩ル方法デアル。ヨクナラシタ象ヲヤブヤクサムラヘ乘入レテ虎ヲ追出シ、唯一擊ニ鐵砲デ擊殺スノデアル。

若シタマガ急所ヲハヅレルト、手傷ヲ負ウタ猛獸ガ象ノ背中ニヲドリ上ツテ、人ヲ食殺スコトモアル。又オモシロイノハ鰐ヲ釣ル方法デアル。大キナ釣針ニエヲツケテ、地上一二尺ノ高サニツルシテ置ク。鰐ガ飛附イテ食フト、釣針ニカカル。逃ゲラレナイデモガイテヰルトコロヲ、長イヤリデ突殺スノデアル。

熱イ所ノ中デモ、沙漠ニナツテヰル地方ハ、全ク外ト樣子ガ違フ。コンナ所デハ、年中ホトンド雨ガ降ラナイカラ、大テイ草ヤ木ハ無クテ、見渡ス限リ砂ノ原、岩ノ岡デアル。タマ所々ニオアシストイツテ、清水ガワキ、草ヤ木ガ青々ト茂ツテヰル所ガアル。

此ノ沙漠ノ中ヲ、絕エズ旅行シテヰル人々ガアル。ソレハ沙漠ヲヘダテタ國ト國トノ間ヲ往來シテ、物品ヲ交易スル商人デ、賊ノ難ヲ防グ爲ニ、數十人又ハ數百人隊ヲ組ンデヰルカラ、隊商ト呼バレテヰル。隊商ニ無クテナラヌモノハ駱駝デ、駱駝ハヨク渴ニタヘルカラ、水ノトボシイ所ヲ連レテ歩クノニ誠ニ都合ガヨイノデアル。隊商ハ之ニ食料ヤ、水ヤ、交易ノ物品ヤ、テントナドヲシヨハセテ、

オアシスカラオアシスヘト長イ旅ヲ續ケテ行ク。駱駝ガ「沙漠ノ船」ト呼バレテヰルノモムリハナイ。

〔巻十〕

第十　張良と韓信（四・二頁）（挿繪二）

張良、或時橋上にて白髪の一老人に會ふ。老人靴を橋下に落し、良に向ひて

「拾ひ來れ。」

と言ふ。良は其の無禮を怒りしも、老人なればと思ひ返し、靴を拾ひ來りてさゝぐ。老人足にて之を受け、打笑ひて行過ぎしが、やがて立ちもどり、

「汝は教ふるに足る者なり。今日より五日目の朝、此處に來りて我を待て。」

と言ひすてて去れり。

五日目の朝、良早く行けば、老人すでに來りて待てり。叱していはく、

「長者と約しながら、後るゝは何事ぞ。今日より五日目の朝早く來れ。」

と。

約束の日、曉に起きて行くに、又老人に後れたり。老人大いに怒り、

「五日目の朝また來れ。」

と言ふ。

此の度こそはと、夜半より起きて橋上に行けば、しばらくありて老人來り、一卷の書を取出して良に與へ、

「之を學ばば、帝王の師となることを得ん。」

とて、いづこともなく立去りたり。開き見れば、世にも得難き兵書なり。良大いに喜びて、朝夕之を讀み、遂に兵法に精通せり。

韓信長劍を帶びて市中を行く。無賴の少年等口々にのゝしりて止まず。其の中の一人いはく、

「汝、身體長大にして、好んで劍を帶ぶ。もし勇氣あらば、我を殺せ。然らずんば、我がまたをくゞれ。」

と。信しばらく其の顏をうちまもりゐたりしが、やがて腹ばひてまたをくゞる。見る者あざけり笑はざるはなし。

後、張良・韓信共に漢の高祖に任へ、良は內にはかりごとを運らし信は外に兵を用ひて、何れも大功を立て、名を後世にかゞやかせり。

第三十　ブラジルから（九・二頁）（挿繪三）

一

此の間は手紙を有難う。おかあさんからの便によると、二人ともよく勉強してゐるさうで、おとうさんも安心しました。勉強も大事だが、

體も氣をおつけなさい。

今居るリオ、デ、ジャネーロ市は、ブラジル國の首府で、非常に景色がよく、港としても有名です。町のりつぱさも、ヨーロッパの大都會に比べて、少しも劣りません。

此のブラジル國は、廣さが日本の十三倍もあつて、大部分熱帶に屬してゐますが、中央の高地や、海岸地方の大部分は割合に涼しく、殊に溫帶地に屬する南部諸州では、四季の變化なども、日本のやうにはつきりしてゐるさうです。たゞをかしいのは、日本の秋が春で、日本の冬が夏といふやうに、あべこべなことです。

二

此の手紙と一しよに、繪葉書をたくさん小包で送りますから、みんなで御覽なさい。其の中に、有名なアマゾン河や、イグアツスーの大瀧の壯觀をうつしたものもあります。アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれてゐます。河幅は驚く程の廣さで、河口のところでは、三百二十キロメートルもあるさうですから、ざつと東京・豐橋間ぐらゐの距離です。それからイグアツスーの瀧は、此の國と隣のアルゼンチン國との境にあつて、高さが五十五メートル、幅が三千六百メートルもあるといふことですから、ナイヤガラの瀧などは、とても比べものになりません。

三

二週間ばかり前から、西の方のサンパウロ市に來てゐます。此の邊は南米中一番日本人のたくさん居る所で、何處へ行つても日本人に會ふので、非常にうれしく思ひます。殊に日本人の小學校があつて、お前達ぐらゐの子供が其處で勉強してゐるのを見ると、何だか南米に居るやうな氣はしません。此の邊は世界に名高いブラジルコーヒーの重な生產地で、甘蔗・棉花・米などもよく出來るさうです。昨日コーヒー園見物に出かけました。大勢の人が、熟した實を手でこき落し、それを集めて溝に投入れると、まじつてゐる石や砂は沈んで、實だけ流れて行きます。其の實を下の方ですくひ上げ、廣いほし場で乾かします。それを機械にかけて皮をのぞき、袋に入れて外國へ輸出するのださうです。

コーヒー園には、日本人がたくさん働いてゐますが、中には十三四の子供も居ます。そんな小さい子供が、外國人の間に立ちまじつてかひがひしく働いてゐるのを見ると、いかにも健氣に思はれます。

四

森林地開墾の樣子を見て歩いてゐたので、しばらく便をしませんでした。

ブラジルは何處へ行つても果もない原野と森林です。原野は多く牧場で、牛や馬が放し飼にされてゐます。森林には、天に屆くやうな大木がすき間もなく繁茂して、其の根本には、蔓草や灌木が思ふまゝにはびこつてゐます。かういふ所でも、日本人が盛に開墾に從事してゐますが、其の有樣は、如何にも男らしい勇ましいものです。

まづ柄の長さ一間もあるなたで、灌木や蔓草を伐拂ひ、次に斧を振るつて大木を伐りにかゝる。三抱も四抱もあるのが、地響を打つて倒れる壯快さは、何とも言ひやうがありません。かうして伐倒した後、乾くまではふつて置いて、四方から火をつけると、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃える。其の壯觀は實にすさまじいものです。燃えあとは取りかたづけて畠とし、コーヒー・わたの木などを植附けます。

もうブラジルの視察も大體終つたから、間もなく歸國します。

巻十一 巻十二 六年級用

一、植民地に關する記事……（一九）
巻十一　第二課　義人吳鳳（臺灣）
第三十課　鴨綠江の大鐵橋（朝鮮）
巻十二　第二課　我が南洋（南洋委任統治領）
第十一課　京城の伯母より（朝鮮）
◎臺灣に關する記事頁數　六・九
二卷中に占むるその歩合　〇・〇二三
◎朝鮮に關する記事頁數合計　一〇・二
その歩合　〇・〇三四
◎南洋委任統治領に關する記事頁數　六・一
その歩合　〇・〇二
二、滿蒙關東州に關する記事……（一三）
巻十二　第二十二課　南滿洲鐵道
その頁數　七・一
その歩合　〇・〇二三強
三、國際關係に關する記事……（一四）
巻十一　第十二課　日本海の海戰
第十三課　赤十字社
巻十二　第十三課　元寇の防壘
その頁數合計　一五・三
その歩合　〇・〇五一
四、世界及外國事情に關する記事……（一七）
巻十一　第十八課　諸葛孔明
第二十三課　上海
巻十二　第八課　ヨーロッパの三大都
第十八課　孔子
第三十課　太平洋
その頁數合計　二三・一
その歩合　〇・〇七七

右各項の内容は次の如し。

〔巻十一〕

一

第二課　義人吳鳳（六・九頁）（挿繪二）

臺灣の蕃人には、祭の時に人の首を取つて供へる風があるが、阿里山の蕃人だけには、此の惡い風が早くから無くなつた。これは全く吳鳳といふ人の遺德によるのである。

吳鳳は今から二百年程前の人で、阿里山蕃の通事であつた。通事は支那人が蕃人と商業上の取引をする場合に通譯をする役人で、租稅の取立を始め、いろ〳〵政治上の事にも關係してゐた。

一體蕃人は愚直であるが、一度怒ると、血を流すやうな亂暴を働くのが常である。吳鳳が任についたのは、蕃人が大暴動を起して、前任の通事を始め、多數の支那人を殺した翌年であつた。かういふ後を引受けた吳鳳の苦心は、一通りではなかつた。吳鳳は先づ、どうかして首取の惡風をやめさせたいものだと思つた。そこで蕃人を呼んで、人を殺すのは大變惡いことであると、ねんごろに諭した。

しかし祭が近づくと、蕃人は、首を供へなくては祭が出來ないからぜひ取らしてもらひたいと申し出た。吳鳳はなだめすかして、さて「去年の暴動に取つた首があるだらう。幾つあるのか。」

「四十餘りございます。」

「それでは其の首をしまつて置いて、毎年一つづつ供へるやうにするがよい。皆無くなつたら、又何とか考へよう。しかし其の時、わたしに相談しないでかつてに人を殺したら、承知しないぞ。よいか。」

蕃人はしぶ〳〵承知して、不平を言ひながら引きさがつた。

吳鳳は非常に情深い上に公平で、至誠を以て事に當つたから、人望は年と共に高まり、蕃人から親のやうにしたはれることになつた。かくて阿里山蕃には、しばらく首取の事も止んで、平和が續いたが、外の蕃人部落では、毎年祭を行ふ度に、相變らず人の首を取つてゐた。血にうゑた阿里山の蕃人は、それを見たり、聞いたりするにつけ、荒々しい心がむら〳〵とわいて來るが、吳鳳の言ひつけを思ひ出してはじつと辛抱してゐた、四十餘年は何時の間にか過ぎて、もう供へる首が一つも無くなつた。待ちに待つた蕃人は、いよ〳〵時の來たのを喜んで、吳鳳に首を取ることを許してもらひたいと願ひ出た。吳鳳はいろ〳〵と說き諭して、明年を待たせることにした。次の年も、ぜひにといふのをなだめて、やつとのばさせることが出來た。が、蕃人はそろ〳〵吳鳳を疑つて、自分達をだますのだとおこり出した。

四年目が來た。蕃人はもうどうしても待たうと言はない。吳鳳は「これまでながい間手を盡くしても、まだ彼等を敎化することが出來ないのは、自分の德が足らないためだ。いよ〳〵最後の手段をとるべき時が來た。」と、固い決心の色をあらはして、

「よろしい、それ程ほしいのなら、一つとらしてやらう。明日の晝頃、赤い帽子をかぶり、赤い着物を着て、此處を通る者の首を取れ。」

と言つた。

翌日、數十の蕃人共が、手に〳〵武器を持つて、役所の近くに集つてゐると、果して吳鳳が言つた通りの服裝をして、近づいて來る者がある。待構へてゐた蕃人共は、直に其の人を殺して、首を取つた。見ると、案外にもそれは吳鳳の首であつた。さすがの蕃人共もそれには驚いて、後悔の餘り聲をあげて泣いた。

蕃人は吳鳳生前の德をしたひ、此の大恩人を殺した罪を恐れて、安んずる日がなかつた。そこで一同相談の結果、其の靈を神にまつつて、此の後は決して人の首を取らぬとちかつた。さうして今日に至るまで、其のちかひを破らぬといふことである。

第三十課　鴨綠江の大鐵橋（四・七頁）（插繪一）

我が日本は四方海に圍まれ、僅かに朝鮮の北部を以て、支那及びシベリヤに接してゐる。我が國第一の長流鴨綠江は、實に此の境界の大部分を限つてゐる大河で、遠く源を長白山に發し、西南に流れること二百里、黃海に注いでゐる。故に我が國と大陸諸國との連絡は

此の大江によつて斷切られてゐるが、人力による一大連鎖が、此の自然の隔てを破つて、更にしつかりと結び附けてゐる。それは朝鮮の新義州と支那の安東との間にかけてある一大鐵橋で、毎日釜山・奉天間を連絡する汽車が其の上を走つてゐるばかりでなく、人や人力車も絕えず往來してゐる。

鴨綠江は此の附近では、河幅六百五十メートル、水深十メートル近くもあつて、船の往來がすこぶる繁く、中には一千トンぐらゐの船も上つてくるから、此の鐵橋が普通の構造では、其の航行を妨げる不便がある。そこで特別の仕掛をほどこしてある。

大鐵橋は、總延長約九百四十メートルもある。さうして橋の或一箇所が必要に應じ、其の中央に設けられた橋脚を中心にして、水平に廻轉する裝置になつてゐるから、橋を開くと、高いマストのある船でも、自在に通過することが出來る。此の開閉橋は、一日四回、時間を定めて開閉するのであるが、閉ぢるのも開くのも、僅かに二三人の力で手輕に行はれる。西岸の一大連鎖が、此の橋の開閉によつて、或は斷切られ、或はつながれるのは如何にもおもしろいことである。

大鐵橋の開閉が我々に興味を與へると共に、僅かに此の橋一つを隔てて相對してゐる新義州と安東とが、種々の點に於て相異なつてゐるのも誠におもしろい。

左岸の新義州は近頃開かれた新市街で、生氣に滿ちてゐるが、まだ寂寥の域を脫しない。これに對して、右岸の安東は早くから開けた大都會で、商業上の取引が盛である。又其の住民を見ると、左岸では、白衣の朝鮮人が悠々として樹下に煙草を吹いてゐるのに、右岸では、青衣の支那人が高粱の中で營々として働いてゐる。其の他言語・風俗の相違はいふまでもなく、河の兩岸を比べてみると、種々の點に於て著しい差があつて、さすがに國境といふ感がしみ〴〵と起る。殊に此の大鐵橋を越し、稅關の檢査を受けて支那の領內に入ると、標準時の關係で、時計の針を一時間おくらせなければならぬのも、ます〳〵此の感を深くする。

〔卷十二〕

第二課　我が南洋（六頁）（插繪三）

大正八年に開かれたパリー講和會議の結果として、我が國は、かつてドイツ領であつた南洋諸島の中、マリヤナ・パラオ・カロリン・マーシャルの四群島の統治を委任されることとなつた。

南洋といふと、誰でも先づ極めて暑い不愉快な處と思ふであらうが、此の四群島邊の氣候は、同じ南洋の中でも溫和な方である。もちろん一年間の氣溫を平均すると、內地よりはずつと高いが、いはゆる海洋性の氣候であつて、四季や晝夜による差が少く、氣溫の最も低い時でも、六十八九度を下ることなく、又最も高い時でも九十四五度を越すことがないから、案外しのぎ易い。其の上、ほとんど每日

勢のよい雨が降つて暑さを洗ひ去るので、一層心持がよい。

植物は、十分な熱と光と水分とによつて、思ふ存分に成長する。其の中で最も目につくものは、コヽ椰子とパンの木である。コヽ椰子は、大きなものになると高さ十四五間もあつて、幹の上方に大きな羽狀の葉が集つて附いてゐる。其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐもある實が鈴なりになつてゐる。此の實の中には固い殻があつて、其の内部に白い肉のやうなものがある。これを乾固めたものはコプラといつて、椰子油の原料となる。椰子油はシヤボンやらふそくの材料として用ひられる。まだ十分に熟さない時は、中の肉が透明に近い液で、これがなか〳〵うまいものである。パンの木も到る處に美しい林を作り、一年の中ほとんど七八箇月の間は、常に實を結んでゐる。實の大きさは、子供の頭ぐらゐもあつて、土人の食料として最も大切なものである。彼等は其の肉を蒸燒にしたり、又は餅についたりして食ふ。味は大體さつまいもに似てゐる。

土人の風俗は處によつて多少違ふが、一般に文化の程度の低いことは、家を見ても着物を見ても直に感ぜられる。卽ち家は大てい椰子の葉でふいた掘立小屋、着物といつても極めて簡單なもので、男も女もたゞ布や腰裳などをつけてゐるに過ぎない。しかし近來は文明人に接する結果として、だん〳〵洋式の家屋も出來れば、洋服を着るものも多くなつた。今日では我が國で設けた學校などもあるから、子供は日本語を上手に話し、禮儀などもよく心得てゐる。

彼等土人の最も得意とすることは、舟を操ることである。舟といつてももとより丸木舟に過ぎぬが、それでも大きいのになると、數十人ものる事が出來る。一方の舟ばたから長い腕木が出てをり、其の端に船體と並行してうきが結びつけてあるから、簡單なものではあるが、決してくつがへらない。

海の美しいことは此の邊の特色の一つであらう。水はあくまですみとほつて、波の靜かな處では、船から下の方をのぞくと、海底の有樣が手に取るやうに見える。青・綠・紅・紫、目の覺めるやうに美しい魚の群が、さんごの林や海草の間に遊んでゐる有樣は、全くおとぎばなしに聞く龍宮の景色を見るやうである。

第十一課　京城の伯母より（五・五頁）

此の間はお便有難うございました。皆樣お變りも無いさうで、何よりに存じます。私方でも一同丈夫で暮して居りますから御安心下さい。

秋になりましてから、好い日よりが續きます。此處は一體に雨が少ないやうですが、此の頃はほとんど雨といふものを見ません。空は毎日すき通るやうに青くすみきつてゐます。町を取卷く山々がくつきりと鮮かな姿を見せ、其の山の背を縫つて、城壁の殘りがうねつてゐるのが見えます。學校・會社・銀行などの赤い煉瓦や白い壁に入りまじつて、南大門・東大門などの古めかしい門がそびえてゐる町

の景色を見渡しますと、ちやうど油繪のやうで、誠に落ちついた感じが致します。日曜などには、章一を連れてよく散步に出かけますが、郊外も廣々として氣持がようございます。暖い日を背中に受けて、小馬にまたがつた朝鮮の老人が四尺にも餘るきせるをくはへて通るのを見ると、ほんたうにのんびりした氣持になります。內地にゐた時には、朝鮮はどんな處だらうと思つたのでしたが、來て見ると案外に開けてゐるのに驚きます。京城の人口は三十五萬もありませう。重な道路には電車が通つてをりますし、電話・電燈・瓦斯の設備も備つてをりますので、住んでゐて不自由な思をすることなどは決してありません。

朝鮮人の着物はちよつと變つて居ります。男はゆるやかなもゝひきのやうなパチといふものをはき、胴にはチヨツキ其のまゝのチヨコリを着け、ツルマキといふ上着を着ます。女は短いチヨコリを着け下にはかまに似たチマといふものをはきます。着物は夏も冬も多くは白いのを用ひます。

白い着物が到る處に乾してありますが、實際朝鮮の女は感心によく洗たくをします。どんな小さな流にも、着物をとん〳〵たゝきながら洗つてゐる女を見受けます。

冬になるとずゐぶん寒くなりますが、朝鮮の家は寒さを防ぐに都合のよいやうに出來てゐます。部屋は狹くて天井が低く、床下がオンドルになつてゐますから、其の中に居れば暖で、如何にも心持がよ

うございます。

冬の寒さが强いだけで、其の他の時はそれ程氣候は惡くありません。冬でも三寒四溫といつて、寒い日が三四日續くと、今度は暖い日が四五日ありますので誠にたすかります。

來年の春、伯父さんがそちらへ行かれるはずですから、其の歸りに一しよに遊びにおいでなさい。きつとおもしろいおみやげ話の種がたくさん見つかることと思ひます。

十一月二十七日　　伯母より

信太郎樣

二

第二十二課　南滿洲鐵道（七頁）（插繪三）

南滿洲鐵道ハ我ガ南滿洲鐵道株式會社ノ經營ニカヽリ、大連ヲ起點トス。大連ハ滿洲第一ノ商港ニシテ、市街・建築物及ビ波止場等規模スコブル壯大ナリ。輸出品ハ大豆・豆粕・豆油ヲ主トシ、其ノ中豆粕・豆油ハ多ク此ノ地ニテ製造スルモノナリ。

大連ヨリ、製鹽ヲ以テ聞ユル普蘭店、製鐵所ノ所在地鞍山等ヲ經テ北ヘ進ムコト約二百マイル、滿洲屈指ノ都市遼陽アリ、其ノ西南ナル首山ハ、明治三十七八年戰役激戰地ノ一ナリ。

奉天ハ遼陽ノ北四十マイルノ處ニアリ。滿洲ニ於ケル政治・交通ノ

中心地ニシテ、官公署多ク、名所舊蹟ニ富ム。日・英・米ノ總領事館及ビ我ガ滿洲醫科大學・赤十字社病院等亦此處ニアリ。奉天停車場ノ建物ハ沿線中最モ壯大ニシテ、附近ノ新市街ニハ我ガ國人ノ在留スルモノ多シ。又支那ノ京奉線ハ奉天ヨリ北京ニ通ズ。奉天ノ南方沙河ノ名モ、永ク世人ノ忘レザル所ナルベシ。

奉天ヨリ長春ニ至ル間ニ鐵嶺・開原・四平街等アリ。何レモ物貨ノ集散地トシテ著ル。長春ハ南滿洲鐵道ノ終ルトコロ、奉天ヨリ百八十九マイル、大連ヲ去ルコト實ニ四百三十七マイルナリ。東支鐵道トノ連絡點ニシテ、交通上ノミナラズ商業上ニ於テ重要ナル位置ヲ占メ、農産物・木材等ノ一大集散地タリ。

南滿洲鐵道ノ支線ニハ旅順線・營口線・煙臺線・撫順線・安奉線アリ。旅順線ハ大連ニ近キ周水子ヨリ分レテ旅順ニ達ス。旅順ハ關東廳・高等法院・旅順工科大學等ノ在ル處ニシテ、港ハ開港場タリ。此ノ地ハ明治二十七八年及び三十七八年兩役ノ戰蹟トシテ名高ク、其ノ後方ノ山々ハ、一トシテ我ガ同胞ノ血ヲソヽギシ地ナラザルハナシ。

營口線ハ大石橋ヨリ分レテ、遼河ノ河口ニ近キ營口ニ至リ、小蒸氣船ニヨリテ京奉線ノ支線ト連絡ス。營口ハ一ニ牛莊ト稱シ、遼河水運ノ起點ニシテ、商港トシテ著レ、大豆・豆粕・豆油ノ輸出盛ナリ。

撫順ハ明治三十七八年戰役後新ニ興リタル市街ニシテ、其ノ炭坑ハ滿洲第一ト稱セラレ、炭層厚ク、炭量亦豐富ナリ。鐵道ハ奉天ノ南方渾河驛ヨリ分レテ此ノ地ニ至ル。

安奉線ハ、奉天ヨリ鴨綠江ノ下流ニアル安東ニ達シテ、朝鮮ノ京義線ニ連結ス。其ノ沿線ニ、炭坑及ビ製鐵事業ヲ以テ名高キ本溪湖アリ。安東ハ新義州ト共ニ、鴨綠江流域ノ森林ヨリ伐出ス木材ノ集散地ニシテ、大連・營口ト相並ンデ、南滿洲三大門戶ト稱セラル。

南滿洲鐵道ハ南滿ニ於ケル交通・運輸ノ大動脈ニシテ、其ノ開通以來、遼河ノ水運次第ニ衰ヘ、河岸ノ商港昔日ノ如ク盛ナラズ。之ニ反シテ、鐵道沿線ノ附屬地ニハ、處々ニ新市街アラハレ、商工業活氣ヲ呈シ、年ト共ニ盛ナリ。尙北滿洲ニ於ケル農業ノ開發ヲ促シタル點モ、忘ルベカラザルトコロトス。

此ノ鐵道ハ、世界ノ交通上ヨリ見ルモ、極メテ重要ナル位置ヲ占ム。卽チ大連港ニヨリテ、我ガ內地・朝鮮・支那ノ諸港ト汽船ノ連絡アリ。奉天ヨリ安奉線ヲ經ルトキハ朝鮮ニ、京奉線ニヨレバ支那本部ニ至ルベク、四平街ヨリ四洮線ニ乘レバ蒙古ニ入ルベシ。長春ヨリ、東、吉林ヘ行クニハ吉長線、北、ハルビンヘ行クニハ東支線ノ便アリ。ハルビンヨリ東スレバウラヂヲストックニ、西スレバシベリヤヲ經テ遠クヨーロッパニ達スベシ。

三

〔卷十一〕

第十二課　日本海の海戰（七・二頁）（挿繪一）

露國が連敗の勢を回復せんため、本國に於ける海軍のほとんど全勢力を擧げて編成せる太平洋第二・第三艦隊は、朝鮮海峽を經てウラヂヲストックに向はんとす。我が海軍は初より敵を近海に迎へ擊つの計を定め、豫め全力を朝鮮海峽に集中して之を待つ。

明治三十八年五月二十七日午前四時四十分、我が哨艦信濃丸より、無線電信にて「敵艦見ゆ」との報告あり。東鄕司令長官は直ちに全軍に出動を命じ、先づ小巡洋艦をして敵艦隊を沖島附近に誘ひ寄せしむ。

午後一時五十五分、我が旗艦三笠は戰鬪旗をかゝぐると共に、信號旗を以て令を各艦に下せり。いはく、

「皇國の興廢此の一戰にあり。各員一層奮勵努力せよ。」

と。我が軍の士氣大いに振るふ。三笠に坐乘せる東鄕司令長官は、六隻の主戰艦隊を率ゐて、上村艦隊と共に先頭なる敵の主力に當り、片岡・出羽・瓜生・東鄕（正路）の諸隊は敵の後尾をつく。

敵の先頭部隊は直ちに砲火を開始せしが、我は之に應ぜず、距離六千メートルに近づきて始めて應戰し、烈しく敵を砲擊せしかば、敵の艦列忽ち亂れ、早くも戰列を離るゝものあり。

風叫び海怒りて、波は山の如くなれども、沈着にして熟練なる我が砲員の打出す砲彈は、よく敵艦に命中して、續々火災を起し、炎煙海をおほふ。午後二時四十五分の頃ほひ、勝敗の數は旣に定まれり。敵はかなはじと、俄に路を變へて逃れ去らんとす。我は急に其の前路をさへぎりて攻擊せしかば、敵の諸艦皆多大の損害を受け、續いて我が驅逐隊より二回の水雷攻擊を受けて、敵の兩旗艦は遂に沈沒し、其の他の諸艦も相ついで沈沒せり。夜に入りて、我が驅逐隊・水雷艇隊は砲火をくゞつて敵艦に迫り、無二無三に攻擊せしかば、敵艦隊は四分五裂の有樣となれり。

明くれば二十八日、天よく晴れて、海上波靜かなり。我が艦隊は東鄕司令長官の命により、鬱陵島附近に集りて敵を待ちしが、忽ち東方に當りて、はるかに數條の黑煙を見る。よりて主戰艦隊及び巡洋艦隊は直ちに東方に向つて敵の進路をふさぎ、片岡・瓜生・東鄕の諸隊は其の退路を絕ちて、午前十時十五分、全く敵を包圍せり。敵將ネボガトフ少將、今は逃れぬところと覺悟したりけん。俄に戰艦ニコライ一世以下の四隻を擧げて、其の部下と共に降服せり。

敵の司令長官ロジェストウェンスキー中將は、昨日の戰鬪に傷を負ひ、幕僚と共に一驅逐艦に移りしが、我が漣・陽炎二隻の驅逐艦に追擊せられ、遂に捕へらるゝに至れり。

此の兩日の戰に、敵艦の大部分は、我が艦隊のために、或は擊沈せられ、或は捕獲せられて、三十八隻の中、逃れ得たるもの巡洋艦以下數隻のみ。敵の死傷及び捕虜は、司令長官以下一萬六千餘人。我が軍の死傷甚だ少く、沈沒したるもの僅かに水雷艇三隻に止れり。東鄕司令長官の發せし戰況報告の末尾にいはく、

「我ガ聯合艦隊ガヨク勝ヲ制シテ前記ノ如キ奇蹟ヲ收メ得タルモノ

ハ、一ニ天皇陛下ノ御稜威ノ致ス所ニシテ、固ヨリ人爲ノヨクスベキニアラズ。殊ニ我ガ軍ノ損失・死傷ノ僅少ナリシハ、歴代神靈ノ加護ニ依ルモノト信仰スルノ外ナク、嚮ニ敵ニ對シ勇進敢戰シタル麾下將卒モ、皆此ノ成果ヲ見タルニ及ンデ、唯唯感激ノ極言フ所ヲ知ラザルモノノ如シ。」

と。勝報上聞に達するや、司令長官に賜へる勅語の中に、

「朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ、祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ愕ブ。」

と仰せられたり。將卒之を聞きて、感泣せざるはなかりき。

第十三課　赤十字社（五・六頁）

文明諸國の間には、赤十字條約と稱するものがあつて、戰爭の場合には、敵味方の別なく傷病者を救護することになつてゐる。赤十字社とは、戰時に軍隊衞生部を助けて、此の條約の目的を達するために設けられたものである。

今から七十年ばかり前に、イギリス・フランスの二國がトルコを助けて、ロシヤとクリミヤ半島で戰つた時に、英・佛軍に多數の傷病者が出來た。其の時、イギリスのナイチンゲール孃が奮つて戰地におもむき、軍隊衞生部を助けて傷病者の看護に從事したのは、有名な話である。當時孃の動作を目擊したものは、

「病院のベツドに横たはつて、息も絶え〳〵になつてゐる兵士も、孃が來てなぐさめると、みんな泣いて喜んだ。夜間醫師の退いた後にも、孃は手燭を持つて一一傷病者を見舞つて、親切になぐさめた。」

といつたといふ事である。赤十字事業は、孃の此の勇敢な行爲にきざしてゐる。

其の後、フランスがイタリヤを助けて、オーストリヤとイタリヤのソルフェリノで戰つた時のことである。かねてナイチンゲールの行爲に深く感動してゐたスイスのデュナンといふ人が、親しく戰地に立入り、傷病者の痛ましい有樣を見て、同情の餘り、「ソルフェリノ記念」と題する書を著して、傷病兵救護の必要を唱へた。此の書物は世人に著しい刺戟を與へ、それがもとになつて、各國の委員がスイスのジュネーブに集つて、戰時に於ける傷病者の救護手段を議することとなつた。これが今の赤十字事業の起源で、會議に委員を出した諸國は、其の翌年赤十字條約を結び、各赤十字社を設けるに至つた。

我が國では、西南戰爭の時、佐野常民等が博愛社といふものを組織して、傷病者の救護に力めたが、此の戰がすんだ後も、之を常設のものとして、一朝有事の場合に備へることにした。其の後、我が國も赤十字條約に加はることになつたので、博愛社は政府の許可を受け、日本赤十字社と稱して、專ら報國恤兵の事をつかさどり、傍ら天災地變の際に、罹災者の救護を行ふことになつた。其の後、日本赤十字社の活動は目ざましいもので、明治二十七八年戰役以來度々の戰爭に、多數の救護班又は病院船を出して、敵味方の別なく、一視同仁に傷病者を救護したことは、世界各國のひとしく歎稱するところである。なほ最近歐洲大戰にも、イギリス・ロシヤ・フランスの三國へ救護班を送つて、傷病者の救護に盡くしたのは、人のよく知るところである。

我が赤十字社は、平時に於ても、或は病院を設けて廣く世人の治療を行ひ、或は火事・地震・つなみ等の場合に、罹災者の救護に力めるなど、其の功績は少くない。殊に最近では、結核の豫防・撲滅に力を用ひ、なほ體の弱い兒童のために、夏季休業中海岸に保養所を設けたり、貧困者のために、無料施藥所を設けたりして、世の爲人の爲に盡くしてゐる。

赤十字社の記章は、白地に赤い十字形を染めぬいたものである。此の記章は、スイス國で始めて赤十字條約が結ばれたことを記念するために、同國の國旗にちなんで定めたものである。此の記章の附いた旗のひらめくところには、敵もなければ味方もない、國境もなければ人種の差別もない。

〔巻十二〕

第十三課　元寇の防壘（二・七頁）（挿繪一）

文永の役後、我が軍は博多灣附近一帶の海岸に防壘を築いて、元軍の再寇に備へたが、果して弘安四年五月下旬元軍の一隊は、九百の戰艦に乘じて堂々と博多灣頭に押寄せて來た。此の時、我が軍が此の防壘によつて敵を防ぎ、七月の末神風の吹荒むまで奮戰二箇月、終に一兵をも九州の地に上陸せしめなかつた勇武は、實に感ずるの外はない。しかも日本武士の偉大な勳功の後には、實に此の防壘の多大な効果がひそんでゐるのである。

當時築造された防壘は、其の後破壞されたところもあるが、幸に大部分は白砂の中に埋沒して、當時のまゝに殘つてゐる。それが近頃に至つて發掘されたので、昔の面影をまのあたり見る事が出來る。それによると、防壘は石を積重ねて造つたもので、厚さ一丈内外、高さ六七尺、海に面した方は傾斜を急にして、容易によぢ登ることができないやうにしてある。戰の時は此の壘上に登つて、寄せ來る敵を下げ矢に射て防戰したものらしい。

今此の防壘の上に立つて六百年の昔を回顧すると、國難當時の悲壯な心持があり〳〵と胸に浮かぶ。あゝ防壘、防壘は實に我が祖先の武勇を助けて國難に當つた、名譽ある一大史蹟といふべきである。

四

〔巻十二〕

第十八課　諸葛孔明（八・二頁）（挿繪一）

支那の昔、後漢の末、帝威日々に衰へて、英雄競ひ起り、天下大いに亂れ、人民甚だ苦しめり。此の時、漢帝の一族に劉備といふ者あり、全國を一統して萬民を救はんとする志あつく、しきりに賢能の士を求む。

或人すゝめていはく、「方今天下の人物、諸葛孔明に如く者なし。」と。劉備大いに喜び、直ちに往きて其の家を訪ふ。孔明は當時亂世を避けて南陽といふ所にかくれ、耕作を事として農夫の生活を樂しめり。劉備到りて面接をこふに、孔明家に在らず。空しく歸りて、數日の後、折からの大風雪をかして再び往きしに、主人はまたも在らずして、其の行方さへ尋ぬるに由なし。劉備止むことを得ず、書簡をのこしとゞめて歸り去れり。

三度にしてやうやく會ふことを得、天下萬民の爲に一臂の力をかさんことを求むるに、孔明辭してきかず。ねんごろに請へどもなほ固辭して應ぜず。劉備ひたすら國を憂へて賢者を求むる至情を述べ、強請して止まざりしかば、孔明終に其の赤誠に感じて、一生を劉備にさゝげんことをちかへり。孔明此の時劉備の爲に計畫していはく「今天下の英雄多しといへども、其の最も大なるは曹操と孫權となり。曹操は北方に據りて百萬の軍を統べ、天子の名を以て四方に號令す。輕々しく之と爭ふべからず。孫權は江東の地を占むること既に三代、基固くして民服す。之に勝つは至難の事たり。唯西方一帶の地のみ良主なく、形勢未だ定まらず。君若し此處を取りて立脚の地となし、東、孫權と連合して、北、曹操を討たば、大業成るべく、帝室興るべし。」

と。劉備大いに喜び、直ちに孔明をともなひ歸りて軍師とし、魚の水を得たるが如しと喜べり。孔明これより心力を傾注して劉備を助くること、始終一の如く、劉備が蜀漢の國を興して、魏の曹操、吳の孫權と天下を三分して相對立したるは、實に孔明の力なり。劉備死するに臨みて、後事を孔明に託し、一切を擧げて意のまゝに行はしめしに、孔明ます〳〵力を盡くして幼主をたすけ、政務・軍務を一身に統べ、日夜奮勵してうむことを知らざりき。

孔明は智謀に富み、しば〳〵はかりごとを用ひてよく強敵を破れり。孫權が赤壁の戰に大いに曹操を破りしも、孔明の助によること多かりしなり。

かつて蜀の南方亂れし時、孔明はかりごとを以て賊將孟獲を捕へ、陣營を示して、「此の軍備を何と見る。」と問ふ。孟獲答へていはく「かくの如しと知らば、何ぞ敗れん。」と。孔明笑ひて之を放ち、再び戰はしめて再び之を捕ふ。かくすること七回に及びしかば、孟獲感激し、「公は天授なり。敵すべからず。」と言ひて、また反することなかりき。

孔明又嚴正公平にして、甚だ規律を重んじたり。或時、將軍馬謖、令に背きて大敗す。孔明はかねて馬謖を愛し、且其の舊功を重んじたりしかど、法をまげて罪ある者を許すことをなさず、涙をふるつて馬謖を斬り、又自ら敗軍の責を引きて軍師の職を辭せり。劉備の遺子は不肖にして、帝王の器にあらざりしかば、孔明之を憂へて、常に輔導に力めたり。されば帝側を辭して遠く出征するに當りては、憂慮殊に深く、出師の表を上ること二回に及べり。其の表にいはく、

「先帝、臣が謹愼を知り給ひて、崩ずるに臨みて、臣に後事を託し給へり。臣、命を受けて以來、日夜、依託のかひなくして、先帝の明を傷つけ奉らんことを恐る。」

と。又いはく、

「臣、身を苦しめ心を盡くして、死して後止まんとす。成敗に至りては、臣のよく知る所にあらず。」

と。言々悉く赤心より出づ。後人感歎して「出師の表を見て泣かざるものは人にあらず。」といへり。孔明魏の將司馬仲達と對陣中、病を得て遂に陣中に死す。蜀軍其の棺を護りて、國に歸らんとす。仲達聞きて之を追ふ。蜀軍少しもさがわず、旗を反し、鼓を鳴らして迎へ戰はんとするものの如し。仲達其のはかりごとあらんことを恐れて、あへて追はず。時の人、「死せる諸葛、生ける仲達を走らす。」といへり。

孔明は大局を見るに明らかに、用兵に巧なると共に、又政治に長じよく民を愛せしかば、民皆心より服して、彼の死後もながく其の善政を語り傳へたりといふ。

第二十三課　上　海（三・七頁）（挿繪一）

長崎ヲ出タ汽船ハ、海上ヲ走ルコト、約四百海里デ、揚子江ノ河口ニ達スル。ソレカラ五十海里バカリサカノボツテ、黃浦江トイフ支流ニ入リ、更ニ十海里餘リサカノボルト、其ノ西岸ニアル上海ニ着ク。

上海ハ支那第一ノ貿易場デ、百萬近クノ人口ヲ有スル大都會デアル。此處ニハ外國人ノ居留スル者ガ非常ニ多ク、コレ等ハ租界トイフ特別ノ區域内ニ住ンデヰル。租界トイフノハ居留地ノ一種デ、居留民ガ支那政府ノ手ヲ離レテ、自治制ヲシイテヰル處デアル。

租界ニハ、皮膚ノ色ノ違ヒ、言語・風俗ノ違ツタ幾多ノ人種ガ入マジツテヰルノデ、其ノ有樣ハ、一見世界人種ノ展覽會ノヤウデル。市街ノ樣子モ支那風デハナイ。アスファルトヤ石ヲ敷イタ道ガ縱橫ニ通ジ、電車・馬車・自動車等ガ絕間ナク往來シテヰル。街路ヲサシハサンデ大商店ガ軒ヲツラネ、河岸ニハ領事館・稅關ヲ始メ銀行・會社等ノリツパナ建物ガソビエテヰル。其ノ外、各種ノ學校ヤ博物館・圖書館等ノ修養機關、公園・競馬場・劇場等ノ娛樂機關ガ、到ル處ニ散在シテヰル。租界ノ外ニ出ルト、大テイハ支那風ノ町デ、町幅モ狹ク、餘リキレイデナイ。唯商業ノ取引ノ盛ナ部分ハ、相當ニ活氣ヲ帶ビテヲリ、西洋風ノ建物モアツテ、趣ガヤヽ變ツテヰル。

上海ガ黃浦江ニ臨ム部分ハ、延長八マイル、六十餘ノ波止場ガアル。

此ノ地ハ交通上重要ナ位置ヲ占メテヰテ、外國トノ貿易バカリデナク、支那ノ各地トノ取引ニモ極メテ便利デアルカラ、港内ニハ常ニ數百隻ノ船ガ集ツテヰテ、スコブル壯觀デアル。貿易上最モ重要ナ關係ヲモツテヰルノハ、日・英・米三國デ、我ガ居留民ノ數ハ外國人中第一位ヲ占メテヰル。

上海ハ專ラ商業ノ都市トシテ知ラレテヰルガ、近時工業モ次第ニ盛ニナツテ、紡績・造船・製粉・製紙、其ノ他ノ諸工場ガ勢ヨク黑煙ヲ立テテヰル。

〔巻十二〕

第八課　ヨーロッパの三大都（四・五頁）（挿繪三）

ヨーロッパには、都市の大なるもの到る處にあり。其の中にて最も有名なるは、イギリスのロンドン、フランスのパリー、ドイツのベルリンとす。

ロンドンは人口七百三十萬、ヨーロッパ第一の大都會にして、テームス川の邊にあり。古き都市なれば、町割正しからず。街上には車馬の往來繁く、行人織るが如くなれども、行くも止るも巡査の合圖に從ひて規律正しく行動するが故に、少しも混雜を生ずることなし。乘合自動車の多きと地下鐵道の完備せるとは、ロンドンの一特色なるべし。

市中には、國會議事堂・大英博物館・ウエストミンスター寺院等、世界に名を知られたる建築物多し。イギリスは國會の最も早く開けたる國とて、其の壯麗なる議事堂は、第一に旅客の目を引く。大英博物館は、陳列品の多種多樣にして數量の多きこと、世界中其の右に出づるものなし。ウエストミンスター寺院は、帝王を始め、偉人・傑士の墓のある處にして、英國人は此の寺院に葬らるゝを無上の名譽とせり。

パリーは人口二百九十萬、セーヌ川其の中央を貫き、市街の華麗を以て聞ゆ。シャンゼリゼーの大通の如きは世界最美の街路にして、兩側には高屋相並び、街路樹枝を交へて、雅麗比なし。建築物にはルーブル博物館・凱旋門・エッフェル塔を始め、世に聞えたるもの少からず。ルーブル博物館は名畫・古彫刻最も多く、美術博物館として世界無比の名あり。凱旋門はナポレオン一世の武威を語るものにして、壯大なること世界第一と稱せらる。

ベルリンはスプレー川にまたがり、人口三百八十萬、市街の清潔を以て著る。市區井然として、家屋の高さ略〻相等し。街路は掃除よく行屆きて、衞生・消防を始め、近世の學術を應用せる百般の設備皆具れり。此の點より見れば、眞に近世都市の好模範たり。建築物には特に世界にほこるべきものなけれども、何れも堅固にして重々しく、よく質實なるドイツ人の氣風を表せるものといふべし。

第十八課　孔子（三・七頁）（挿繪一）

支那幾千年の人物中、大聖として長く後人に敬はれ、德化の尙今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。孔子は今より凡そ二千五百年前當時の魯卽ち今の山東省の地に生まれたり。少時より學問を勵み、長じて後吏となり、魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、奸臣のために妨げられ、久しく其の職に居ること能はずして魯を去りぬ。當時支那は數國に分れて互に相爭ひ、戰亂止むことなかりしかば、孔子大いに之を憂ひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國を廻りて、用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりしかば、老後は專ら力を敎育と著述とに用ひたり。門人三千人、其の最も勝れたるもの、顏淵・曾參・有若等七十二人なりき。

論語は、曾參と有若との門人等が、孔子及び其の高弟の言行を集錄したるものにして、最もよく此の大聖の面目をうかゞふを得べし。今此の書によりて其の一端を述べん。

孔子は正義の念強き人なりき。其の言に曰く、「富貴は人の希ふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らず。」と。

孔子常に中正不偏を貴び、「中庸は德の至れるものなり。」といひ、「過ぎたるは及ばざるが如し。」ともいへり。又極めて學問に熱心にして其の好學の念の切なる、「朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。」といふに至れり。

孔子は他人を正す前に先づ己を正し、近きより遠きに及ぼすを以て其の主義としたり。「己を修めて人を安んず。」とは、彼が簡明に此の意を表せる語なり。

かつて自ら曰く、「發憤しては食を忘れ、樂しんでは憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らず。」と。其の身を忘れ、齡を忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、能く此の語に現れたりといふべし。

第三十課　太平洋（三頁）

海洋の王、太平洋。

其の美しき水は、東、南北アメリカの岸を洗ひ、西、アジヤ・濠洲のいそをひたし、南は直ちに南極大陸に及び、北はベーリング海峽を以て北極海に續く。南北一萬マイル、東西一萬一千マイル、面積の大は地球の三分の一を占めて、全陸地より更に廣し。

海洋の王、太平洋。

其の中に注ぐ川幾百。其の上に浮かぶ島幾千。彼のフィリピン海溝は、最も深きところ實に三萬二千尺、世界の最高峯エベレストを沈むるも、三千尺の水面下にかくるべしと。

海洋の王、太平洋。

尋常小學國語讀本

巻五
巻六
三年級用

其の水上を行通ふ船日に幾千艘ぞ。其の水底を走る電線東西十幾條ぞ。十六世紀の初頭、マゼラン此の海を横斷してより、無盡の寶庫は世界に開かれ、各國こゝに關係を有せざるなく、人々こゝに目を注がざるなし。

海洋の王、太平洋。

其の西の果近く、三千年の永き歴史に飾られて、靜かに横たはれるは我が大日本帝國なり。我等は榮ある其の國民と生まれて、雄々しく猛く生ひ立ちぬ。いで此の大洋に似たる廣き心と大なる望とを持ちて、海原遠く乘出し、天與の寶を此の手に探らん。

尋常小學國語讀本

卷五 卷六 三年級用

一、植民地に關する記事……（三三）
卷六　第二　日本の高山……その一部
臺灣に關する記事頁數　一・一
その歩合　〇・〇〇五
二、滿洲關東州蒙古に關する記事なし
三、國際關係に關する記事……（二四）
卷六　第二十一　神風
その頁數　六・一
その歩合　〇・〇二八強
四、世界及び外國事情に關する記事……（三三）
卷六　第二　日本の高山……その一部
その頁數　〇・五
その歩合　〇・〇〇二強

右各項の內容は次の如し

但し卷五中には採錄すべき記事なし。

（卷六）

〔卷六〕

一

第二　日本の高山

（臺灣に關するもの一・一頁）
（世界に關するもの〇・五頁）

（挿繪一）

「それでは日本一の高山は。」

「臺灣の新高山さ、これは一万三千尺からある。臺灣ではめつたに雪が降らないさうだが、それでも此の山には、時々雪を見ることがあるといふことだ。」

「一番は新高山、二番は富士山、三番は。」

「いや、二番も三番も臺灣にある。富士山は六番目だ。」

……中　畧……

「外國には、新高山より、もつと高い山がありますか。」

「印度のヒマラヤ山は世界一で、たしか三万尺近いとおぼえてゐる。しかし三郎、高い山がかならず名高い山だとはかぎらない。」

……下　畧……

〔巻六〕

第二十一　神風（六・一頁）（挿繪一）

博多の沖は見渡すかぎり、元からおしよせた船でおほはれた。十何萬といふ大軍である。

四國・九州の武士は博多の濱にあつまつた。元の兵は一人も上陸させぬといふ意氣ごみで、濱べに石垣をきづいて守つた。

我が武士は敵の攻めよせるのを待ちきれず、こつちからおしよせた。

敵は高いやぐらのある大船、こつちはつり舟のやうな小舟であつた。けれども我が武士は、船の大小などは少しも氣にしなかつた。草野の次郎の如きは夜敵の船におしよせて、首二十一取つて、敵の船に火をつけて引上げた。敵は此のいきほひにおそれて、鐵のくさりで船をつなぎ合はせた。まるで大きな島が出來たやうなものである。

此の時河野の通有は、たつた小舟二そうで向つた。敵ははげしく射立てた。味方はばたばたとたふれた。通有も左のかたを射られたが、少しも屈せず、刀をふるつて進んだ。いよ〳〵おしよせたが、敵の船は高くて上ることが出來ない。通有はほばしらをたふして、之をはしごにして、敵の船へをどりこんだ。味方は後から〳〵とつゞいた。さん〳〵に切りまくつて、其の船の大將を生けどりにして引上げた。

其の後も攻めよせる者がたえないので、敵は一先づ沖の方へしりぞいたが、又おしよせて來るのは明らかである。實に我が國にとつては、これまでにない大難であつた。

おそれ多くも龜山上皇は、御身をもつて國難に代らうと、おいのりになつた。武士といふ武士は必死のかくごでふせいだ。百しやうも一生けんめいで、ひやうらうをはこんだ。全く上下の者が心を一にして、國難にあたつたのである。

此のまごころが神のおぼしめしにかなつたのであらう、一夜大暴風雨がおこつて、海はわきかへつた。敵の船はこつぱみぢんにくだけて、敵兵は海のそこに沈んでしまつた。生きてかへつた者は數へる程しかなかつたといふ。

それからこゝに六百餘年、まだ一度も外國から攻められたことはない。

巻七
巻八　四年級用

一、植民地に關する記事……（三六）
　巻八　第六　呉鳳（臺灣）
　　第十　朝鮮人蔘（朝鮮）
　◎臺灣に關する記事頁數　四・四
　　二卷中に占むる歩合　〇・〇一九強
　◎朝鮮に關する記事頁數　二・八
　　その歩合　〇・〇一二強
二、滿洲關東州蒙古に關する記事……（三七）
　巻七　第十二　大連だより（關東州）
　　その頁數　五・七
　　その歩合　〇・〇二五弱
三、國際關係に關する記事……（三八）
　巻七　第三　横濱……その一部
　巻八　第二十四　廣瀬中佐
　　その頁數合計　二・八
　　その歩合　〇・〇一二強
四、世界及び外國事情に關する記事……（三八）
　巻七　第一　世界
　巻八　第五　楊子江
　　第十八　アメリカだより
　その頁數合計　一六・七
　その歩合　〇・〇七三弱

右各項の内容は次の如し。

〔巻八〕

一

第六　吳鳳（四・四頁）（挿繪一）

臺灣の蕃人にはお祭に人の首を取つて供へる風がありますが、阿里山の蕃人にだけは此の悪い風が早くから止みました。これは吳鳳といふ人のおかげだと申します。

吳鳳は今から二百年程前の人で、阿里山の役人でした。たいそう蕃人をかはいがりましたので、蕃人からは親のやうにしたはれました。吳鳳は役人になつた時から、どうかして首取の悪風を止めさせたいものだと思ひました。ちやうど蕃人が、其の前の年に取つた首が四十餘ありましたので、それをしまつて置かせて、其の後のお祭には、毎年其の首を一つづつ供へさせました。四十餘年はいつの間にか過ぎて、もう供へる首がなくなりました。そこで蕃人どもが吳鳳へ、首を取ることを許してくれといつて出ました。吳鳳はお祭の爲に人を殺すのはよくないといふことを說聞かせて、もう一年、もう一年とのばさせてゐましたが、四年目になると、

「もう、どうしても待つてゐられません。」

といつて來ました。吳鳳は

「それ程首がほしいなら明日の晝頃、赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着て、此所を通る者の首を取れ。」

といひました。

翌日蕃人どもが、役所の近くに集つてゐますと、果して赤い帽子をかぶつて、赤い着物を着た人が來ました。待ちかまへてゐた蕃人どもは、すぐに其の人を殺して、首を取りました。見ると、それは吳鳳の首でございました。蕃人どもは聲を上げて泣きました。

さて蕃人どもは、吳鳳を神にまつつて、其の前で、此の後は決して人の首を取らぬとちかひました。さうして今も其の通りにしてゐるのだといひます。

第十　朝鮮人蔘（二一・八頁）（挿繪一）

山野に生ずる草木の中には、藥用にするものが多くありますが、其の中貴重なものの一つは朝鮮人蔘です。これはもと野生のものでしたが、今から千何百年も前から栽培することになつたのだとつたへてゐます。さうして其の栽培については次のやうな話もあります。

昔朝鮮に一人の婦人があつて、子どもをおさづけ下さるやうに、朝晩神樣にいのつてゐました。すると或夜ゆめの中に、明日何山の何所へ行けば望のものをさづけてやるといふ神樣のお告がありました。婦人は大いに喜んで夜の明けるのを待つて、すぐに其の山へ上

りました。さうして教へられた場所へ行つて見ますと望の赤子は居ませんでしたが、見なれない草に、眞赤な美しい實が一つなつてゐました。婦人はこれは珍しい、神樣がおさづけ下さつたのはこれに違ひないと思つて、其の實を取つて來て庭先の畠の中にまきました。間もなくそれから芽が出ましたので、婦人は之を我が子の樣に育てました。これが人蔘で、この婦人は長生をしましたが、一生の間仕合はせのよい事がつづいたと申します。

二

〔巻七〕

第十二　大連だより（五・七頁）（挿繪一）

大連へ來てから、もうかれこれ七八十日、町のもやうも大分わかつて來ました。

町に大山通・乃木町・奥町・兒玉町などと日露戰爭の時の大將方の名を取つてつけてあるのは面白いでせう。通は廣くて平で、歩道と車道の間に並木が植ゑてありますが、此の頃は其の葉の美しいさかりです。

目ぬきの所には三階建・四階建の石造や煉瓦造の家が軒をならべて立つてゐるので日本の町よりはかへつて西洋の都會に似てゐるといひます。人口はおよそ十八萬五千、其の中日本人は七萬人餘り、支那人は十一萬人餘りですが、どちらも年々ふえるさうです。

船で來れば、神戸から三晝夜、門司からは二晝夜で當地へ着きますが、來て先づ誰でもおどろくのは、波止場の大きなことです。第一第二第三と三つならんでゐて、たくさんな大船を一どきに横づけにすることが出來ます。船から陸あげした荷物は、すぐ其所から汽車にのせてハルビンへでも北京へでも送ることが出來ます。

大連の貿易高は横濱や神戸よりは少し下で、大てい大阪ぐらゐだといひます。輸出品は豆粕が第一で輸入品は綿布が一番多いといふことです。

まだ來て二三箇月で、よくはわかりませんが、氣候も思つたよりよくて、快晴の日が多いやうです。

旅順へは汽車で一時間で行けます。十日ばかり前に、私ども中學の二年生が修學旅行に行つて、白玉山上の表忠塔をあふぎ、又我が忠勇の士が血を流して取つた二百三高地にも上つて歸りました。

後便に又いろ〳〵申し上げませう。

六月十五日　　良　助

愛　作　君

三

〔巻七〕

第三　横濱（一頁）……一部分（挿繪一）

……

輸出品の主なる物は、生絲と羽二重とにして、多くアメリカ合衆國・イギリス・フランス等に送る。又輸入品は綿もつとも多く、鐵類これに次ぐ。しかして、綿は印度・アメリカ合衆國より來る物多し。

〔巻八〕

第二十四　廣瀬中佐（一・八頁）（挿繪一）

とゞろく砲音、飛來る彈丸。
荒波洗ふデツキの上に、
やみをつらぬく中佐の叫。
「杉野はいづこ、杉野は居すや。」
船内くまなくたづぬる三度、
呼べど答へず、さがせど見えず、
船は次第に波間に沈み、
敵彈いよ〳〵あたりにしげし。
今はとボートにうつれる中佐、
飛來る彈丸に忽ちうせて、
旅順港外うらみぞ深き、
軍神廣瀬と其の名殘れど。

四

〔巻七〕

第一　世界（三・五頁）（挿繪二）

われらが住む世界は、其の形まるくして、球の如し。ゆゑに之を地球といふ。
地球の表面には、海と陸とありて、海の廣さはおよそ陸の二倍半なり。
海を分けて太平洋・大西洋・印度洋とし、陸を分けて、アジヤ洲・ヨーロッパ洲・アフリカ洲・南アメリカ洲・北アメリカ洲及び大洋洲とす。
我が大日本帝國はアジヤ洲の東部にあり。
地球の上には大小合はせて六十餘國あり。其の中我が大日本帝國と、イギリス・フランス・イタリヤ及びアメリカ合衆國を世界の五大強國といふ。

〔巻八〕

第五　楊子江（三・〇頁）（挿繪一）

楊子江ハ支那第一ノ大河ニシテ、其ノ長サ一千三百里、我ガ國ノ最南端ヨリ最北端ニ至ル長サヨリモ長シ。我ガ國第一ノ長流鴨綠江ノ如キハ實ニ其ノ支流ニモ及バザルナリ。汽船ハ河口ヨリオヨソ六百里、小舟ハオヨソ九百里サカノボルコトヲ得。
此ノ河ノ上流地方ヨリ木材ヲキリ出シ、之ヲイカダニ組ミテ河ヲ下スコトアリ。イカダノ大ナルモノハ長サ六七十間、幅三四十間、コレニ土ヲ置キテ野菜ヲ作リ、又小屋ヲ建テテ豚・鷄等ヲカヒ、一家コトゴトクコレニ乘リテ流ニシタガヒテ下ル。其ノ家ヲ出デテヨリイカダヲトキテ木材ヲ賣ルニ至ルマデ、一年ノ長キニワタルコト珍シカラズトイフ。
楊子江ハ水量ツネニ豐ニシテ、洋々ト流ルレドモ、夏季ハコトニ增水シテ濁流江ニミナギリ、河口ヨリ海上百里ノ間、海水コレガタメニ赤シトイフ。楊子江ノ大ナルコトコレニテモ知ルベシ。楊子江ノ流域ハ地味スコブルコエ米・茶・綿等ノ產物多シ。又沿岸ニハ上海・漢口等アリテ、我ガ國トノ貿易甚ダ盛ナリ。

第十八　アメリカだより（一〇・二頁）（挿繪三）

一　サンフランシスコから

ハワイから出した繪葉書は見ましたらうね。おとうさんは一昨日の正午無事にサンフランシスコへ着きました。横濱を出てからちやうど十五日目です。
サンフランシスコには、日本人がたくさんゐて、いろ〳〵な商賣をしてゐます。おとうさんが着いた日は、ちやうど五月のお節句の日で、日本人の家には、鯉のぼりが立つてゐました。
此所には、明治三十九年に大地震があつて、町は大方こはれたのですが、十五六年の間にすつかりとりかへして、今では前よりもりつぱになつてゐます。アメリカ人の元氣なことは、これだけ聞いてもわかりませう。サンフランシスコはカリフォルニヤ州にあるのですが、此の州は合衆國の中でも、氣候がよくて、其の上地味が肥えてゐますから、いろ〳〵な農產物に富んでゐます。ことに野菜や果物が有名です。日本人は八萬人餘も居て、子どもは、アメリカ人の立てた學校へ行つて、英語で勉強しますが、歸つて來ると又日本人の立てた學校へ行つて、日本語で學問をしてゐます。つまりお前たちよりもよけいに勉強してゐるわけです。お前たちもせいを〳〵勉強なさい。

五月七日　　父から

太郎どの

二　シカゴから

サンフランシスコから三日二晩汽車に乘通して、今日此のシカゴに着きました。此所は工業地で、煙突の煙で空は眞黑だが、大きな公園が幾つもあるから、健康には害がなささうです。此の繪葉書は此所へ來る途中、汽車の窓から見た牧場の實景です。

九月五日

三　ニューヨークから

長く滯在してゐたシカゴ市を立つて、今日いよ〳〵米國第一の大都會ニューヨーク市に着きました。

シカゴとニューヨークの間は九百八十哩もありますが、おとうさんは最大急行の列車に乘つてたつた十八時間で着きました。日本にはまだこんな早い汽車はありません。ニューヨークは人口からいへばロンドンに次ぐ大都會で七百萬以上もあるといひます。高い建物のあることは世界第一で十階・二十階の家はいくらもあります。中で最も高いのは五十五階もあります。

地上の鐵道には勿論、高架鐵道にも、地下鐵道にも、電車や汽車が終日終夜、休なしに運轉してゐます。アメリカ人は大きいこと、廣いこと、高いこと、早いこと、何でも世界一になるやうに心掛けてゐるといひますが、何しろ大した勢です。

此所は有名な商業地ですが、りつぱな學校もありますし、博物館や圖書館などもたくさんあります。

シカゴを立つ日に、お前たちの年始狀が着きました。二人とも字が上手になつたのに驚きました。うちには何事もないさうで安心しました。其のうちに繪葉書や寫眞帖を送りますから、ゆつくりごらん。おかあさんによろしく。

一月十八日　　父から

太郎どの

さち子どの

卷九　卷十　五年級用

一、植民地に關する記事……（四二）

卷九　第二　トラック島便り（南洋委任統治領）

卷十　第十三　京城の友から（朝鮮）

◎朝鮮に關する記事頁數　六・六

二卷中に占むるその歩合　〇・〇二六弱

◎南洋委任統治領に關する記事頁數　六・七

その歩合　〇・〇二六強

二、滿蒙關東州に關する記事なし

三、國際關係に關する記事……（四四）

卷九　第九　兩將軍の握手

第十　水師營の會見

卷十　第十五　輸出入

その頁數合計　一〇・七

その歩合　〇・〇四二弱

四、世界及び外國事情に關する記事……（四六）

卷九　第七　ナイヤガラの瀧

卷十　第七　パナマ運河

第十八　文天祥

その頁數合計　一三・八

その歩合　〇・〇五四弱

右各項の内容は次の如し。

各標題下の括弧内の頁數はその占むる頁數を示す。以下之に準ず。

一

〔巻九〕

第二　トラック島便り（六・七頁）（挿繪三）

三月二十五日お出しのお手紙を昨日受取りました。おとうさんはじめ皆様お元氣で何よりです。叔父さんも相かはらず丈夫で島々を廻つてゐるから、安心して下さい。

此のトラック島へ來てからもう三月になるので、土地の樣子も一通りはわかりました。冬でも春でもこちらではちやうど內地の夏のやうです。暑さも年中此のくらゐのものださうで、かねて思つてゐたとは違ひ、なか〳〵住みよいところのやうです。それに此の邊一帶の島々は我が國の支配に屬してゐるので、內地から移つて來た人も多く、少しもさびしくはありません。

內地から來て先づ目につくのは植物で、其の中でも殊に珍しいのはココ椰子の木やパンの木などです。ココ椰子は、十四五間（大正十年版には七八間とあり）もあります。鳥の羽に似た大きな葉が、幹の上の方に集つてついてをり、其の葉の根本には、大人の頭ぐらゐの實がすゞなりになつてゐます。實の中にはかたい殼があつて、其の內がはに白い肉のやうなものがあります。これから椰子油を取り、石鹼・蠟燭なども造るのださうです。まだ十分にじゆくしてゐない實は、中にきれいな水があります。これがなか〳〵うまいもので、私たちもよく取つて飮みます。又パンの木も所々に美しい林をつくつてゐます。其の實は土人の一番大事な食料で、燒いて食べたり、餅にして食べたりします。味はまことにあつさりしたものです。

珍しい植物は此の外にもまだたくさんあります。これ等の植物が思ふまゝに茂つてゐる樣子は實に見事です。殊に毎日のやうに降るにはか雨が、非常な勢で木を洗ひ草を洗つて通り過ぎた後の、あざやかな綠の世界は、何ともたとへやうのない、氣持のよいものです。水の乏しい此の島々では、其の雨水がまた大切な飮料水となるのです。

海の中もなか〳〵きれいです。水のすんでゐる事はかくべつで、波の靜かな所でふなばたからのぞいて見ると、美しい海底のありさまが手に取るやうによく見えます。青・綠・紅・紫、目のさめるやうに美しい魚の群が、珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。何だかおとぎばなしの世界にでもまよひこんだやうです。

土人はまだよく開けてゐませんが、性質はおとなしく、我々にもよくなつき、殊に近年我が國で學校をそこ〳〵に立てたので、子供等はなか〳〵上手に日本語を話します。此の間も十ぐらゐの少女が「君が代」をうたつてゐました。

いづれ又近い中に便りをしませう。おとうさんやおかあさんによろしく。

四月十日　　叔父から

松太郎殿

〔巻十〕

第十三　京城の友から（六・六頁）（挿繪二）

しばらく御無沙汰致しました。皆樣御かはりはありませんか。こちらも一同無事です。何時か御約束した通り、今日は當地の樣子を少しばかり申し上げます。

汽車で京城へ來る人は通常京城（大正十一年版には——『南大門』とあり）驛で下りるのです。此の停車場を出て大通を東北に進むと、二町ばかりで大きな門の前へ出ます。此の門が南大門です。京城の市街は、もと石でたゝんだ高い城壁で圍まれ、その處々にかういふ門があつて、出入口になつてゐたのださうです。今でも城壁は大部分昔の面影を留めてゐますし、門も主なものは殘つてゐます。南大門通から本町通・黃金町通（『黃金町通』の文字は大正十一年版にはなし）・鐘路通にかけての一帶が、京城での一番にぎやかな處です。驛（大正十一年版にては『南大門』の東（舊版にては東南）の方に南山といふ山があつて、其の一部が（『其の一部が』の文字は舊版にはなし）公園になつてゐます。此處には天照大神と明治天皇と（『と明治天皇と』の文字は舊版になし）をおまつりした朝鮮神宮（舊版にては『京城神社』）があります。（舊版には（があり、又其の近くに朝鮮總督府があります。』とあり。）

僕はもう南山へ何度も上りましたが、此處からは京城市街がまるで繪のやうに見えます。市街の周圍を取圍んだ山々は地はだが白く、それに松がまばらに生えてゐます。南山と向ひ合つて北岳といふ山がありますが、其のすそには、（舊版には『松がまばらに生えてゐる。北の方の山のすそには』とあり。）松林を後にして右に昌德宮、左に景福宮の壯大な構があります。此の附近には一帶に朝鮮家屋があり、景福宮の構內には新築の朝鮮總督府が見えます。其の手前には德壽宮、なほ手前には公會堂・朝鮮ホテル・朝鮮銀行・郵便局などのりつぱな洋館がそびえてゐます。少しはなれて、右の方の小高い岡の上に天主教會堂がそびえて見えます。（『景福宮の壯大な構がある。其の手前は一帶に朝鮮家屋で、其の又手前には朝鮮ホテル・朝鮮銀行・京城郵便局・天主教會堂などのりつぱな洋館がそびえてゐる。』——舊版）すみきつた空氣の中に煉瓦の赤色や、松の綠色などが鮮かに浮出して見えるのは實にきれいです。

京城の西南部に龍山といふ處があります。龍山はもと漢江にのぞんだ小さな町であつたが、京城の發展するに連れて次第に廣がり、兩方が町續きになつて、今では龍山も京城の中に編入されたのださうです。此處には軍司令部や龍山停車場などがあります。

こちらへ來てもう三月餘りになりますが、よくも續くと思ふくらゐ

の天氣續きで、雨といふものはごくたまにしか降りません。殊に秋晴の美しさはかくべつで、遠足好きの君なら、毎日何處へか出かけたくてたまらないだらうと思ひました。

此の頃は大分寒くなつて、朝は攝氏零度以下何度（舊版にては『十何度』とあり）といふきびしさ、學校へ行く途中などは、寒いといふよりもいたいやうに感じます。面白いのは、三日四日續いて寒ければ、其の次には又其くらゐの間暖さが續くといふやうに、寒さと暖さがほとんど規則正しく交替することです。こちらでは昔から之を三寒四溫といつてゐるさうです。

お知らせしたい事はまだいろ〳〵ありますが、大分長くなりましたから、今日は此くらゐにして置きます。どうか御兩親樣によろしく。おついでに野田君や山口君にもよろしく。

十二月十八日　　原　安雄

水野竹次郎君

三

〔卷九〕

第九　兩將軍の握手（三・二頁）（插繪二）

リエージュの要塞に立てこもりたるベルギーの勇將レマンは、部下の將卒をはげまし〳〵、エンミツヒ將軍のひきゐたるドイツの大軍を物ともせず、勇ましく防ぎ戰ひたり。されど比類なき四十二センチメートルの大口徑砲の威力に對しては、正義の念と愛國の情とに死を恐れざるベルギー軍の防戰も、終に如何ともしがたく、要塞は全く破くわいせられ、將卒は多く戰死せり。

レマン將軍も、火藥の爆發によりて起れるガスの爲に窒息し居たるを、ドイツ兵に發見せられて、野戰病院に送られたり。

後日レマン將軍が捕虜としてエンミツヒ將軍の前に引出され時、エンミツヒ將軍はみづから進んで握手を求め、

「閣下の防戰はまことに見事であつた。」

と感歎せるに、レマン將軍は靜かに、

「おほめにあづかつて恐れ入る。しかし部下の者は、最後までベルギーの名譽をけがさなかつたつもりである。」

と答へたり。

やがてレマン將軍は、萬感胸にみちて、かすかにふるふ手に帶劍をときて渡さんとするを、エンミツヒ將軍は

「いや、それには及ばん。閣下の劍は軍人の魂として少しも名譽をきずつけなかつた。」

と强ひて之をおし止めたり。

レマン將軍の目には淚ありき。

第十　水師營の會見（四・六頁）（插繪一）

旅順開城約成りて、
敵の將軍ステツセル
乃木大將と會見の
所はいづこ、水師營。」
庭に一本なつめの木、
彈丸あともいちじるく、
くづれ殘れる民屋に、
いまぞ相見る二將軍。」
乃木大將はおごそかに、
御めぐみ深き大君の
大みことのりつたふれば、
彼かしこみて謝しまつる。」
昨日の敵は今日の友、
語る言葉もうちとけて、
我はたゝへつ、彼の防備。
彼はたゝへつ、我が武勇。」
かたち正していひ出でぬ、
『此の方面の戰闘に
二子をうしなひ給ひつる
閣下の心如何にぞ。』と。」
『二人の我が子それ〴〵に、
死所を得たるを喜べり。
これぞ武門の面目。』と、
大將答力あり。」
兩將晝食共にして、
なほもつきせぬ物語。
『我に愛する良馬あり。
今日の記念に獻ずべし。』」
『厚意謝するに餘りあり。
軍のおきてにしたがひて、
他日我が手に受領せば、
長くいたはり養はん。』」
『さらば』と、握手ねんごろに、
別れて行くや右左。
砲音たえし砲臺に
ひらめき立てり、日の御旗。」

〔巻十〕

第十五　輸出入（三・一頁）

我々が今日生活して行くには、我が國で出來る品物ばかりでは用が足らない。又國内で出來るものを使ふよりも、時には外國の品を使ふ方が都合のよい事もある。種々の品物が遠く外國から輸入されるのは、主にこれ等の事情からである。

米は我が國でずゐぶん多くとれるが、全く外國米の足しまへを受けぬわけには行かない。それで、印度支那半島あたりから年々輸入してゐる。又毛織物の原料になる羊毛は、我が國ではほとんど產しないから、オーストラリヤなど（舊版には『オーストラリヤ・南部アフリカなど』とあり）から輸入する。機械類は、近年我が國でも盛に製造されるやうになつたが、物によつては、やはり外國の品を買つた方が得な場合が少くない。それで、機械類もまだかなり多く輸入されてゐる。我が國は種々の品物を輸入してゐるばかりでなく、國内で出來た物を外國へ輸出することもなか〳〵多い。輸出品の主な物は、生絲・綿織物・羽二重・縮緬・精糖・陶磁器などで、（舊版には『生絲・綿織・綿絲・羽二重・銅・茶・マツチなどで』とあり）輸出先はアメリカ合衆國・支那・印度（舊版には『アメリカ合衆國・支那・イギリス・フランス』とあり）等である。

又外國から原料を輸入し、それに加工して、更に外國へ輸出する事も少くない。繰綿（舊版にては『綿花』）は主に印度やアメリカ合衆國から輸入し、それに加工して綿絲や綿織物を造る。これらの製品は我々の使ひ料にもなるが、又支那・印度其の他の東洋諸國へ輸出される。支那の豚の毛が輸入されて日本でブラシに造られ、又支那へ輸出されるなども同じ例である。

最近における我が國の輸出・入總額は數十億圓の多額で、之を十年前の額に比べると、ほとんど二倍（舊版には『實に十數倍』とあり）である。輸出入の額の增加して行くのは國家が次第に盛になる印である。

〔巻九〕

四

第七　ナイヤガラの瀧（二・七頁）（挿繪一）

世界一といはれるナイヤガラの瀧は、アメリカ合衆國とカナダとの國境にあります。廣さが千數百方里もある、海のやうな湖から流れる大きな河が、一大絶壁をみなぎり落ちるのですから、其の壯觀はとても筆や口にはつくされません。物すごいひびきは萬雷の如く、大地もふるひ、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋をゑがく程です。

瀧は、落口にあるゴート島といふ小島の爲に二つに分れてゐます。右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、此の二つを合はせてナイヤガラの瀧といふのです。瀧の幅は、アメリカ瀧が百餘丈、カナダ瀧が三百餘丈、高さはどちらも十五六丈あります。

瀧の上手にかけた石橋を渡り、木立の深いゴート島に行つて、もう〳〵と立ちこめる水煙の間から近く瀧をながめるのもよく、下手へ廻つてカナダの方からはるかに全景を見渡すのも面白い。殊に遊覽船に乘つて、頭から雨のやうなしぶきを浴びながら、瀧つぼを見物して廻るのは、實に壯快です。

〔巻十〕

第七　パナマ運河（七・一頁）（挿繪三）

北アメリカが南アメリカに續く部分は、パナマ地峽といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。此の地峽に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。パナマ地峽は一體に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。其の外にもいろ〳〵の理由があるので、此の地峽を切通し、平かな掘割を造つて、太平・大西兩洋の水を通はせることは、到底出來ぬ事であつた。そこで此の運河は非常に變つた仕組に出來てゐるのである。

先づ地峽の山地を流れてゐる河の水をせき止めて、湖を二つ造つた。高い土地の上に水をたゝへたのであるから、湖の水面は海面よりずつと高い。此の湖へ兩方の海から掘割が通じてある。所で、此の高い湖と低い掘割を何の仕掛もなしに連結すれば、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、とても船を通すことは出來ないから、掘割の處々に水門を設けて、たくみに船を上下する樣にしてある。

今太平洋の方から此の運河を通るとする。船は先づ海から廣い掘割にはいる。しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。近づくと、門の戸びらは左右に開いて、船が中にはいり、戸びらはしまる。上手にも水門があるので、船は大きな箱の中に浮いてゐる形である。底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。と、上手の水門が開いて、船は次の箱の中へはいる。前と同じ方法で、船はもう一段高く浮上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。此の湖を横ぎると又水門があつて、海はさらに一段高くなる。かうして前後三段に上つた船は、海面より約二十六メートルも高い水面に浮ぶのである。

それから船はクレブラの掘割を通る。これは高い山地を切通したもので、此處を切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。掘割を通過して、船は又湖に出る。ガツン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある大きな人造湖で、湖上に點々と散在してゐる島々は、もと此處にそびえてゐた山々である。此の湖を渡つて又水門を

通過する。今度は前と反對に、順次に三段を下つて、海と同じ水面に浮ぶ。此處から又掘割を走つて、終に洋々たる大西洋に出るのである。運河は全長五十哩餘り、凡そ十時間前後で之を航することが出來る。

パナマ地峽に運河を造る事は、數百年來ヨーロッパ人のしば〳〵計畫したところで、實地に大仕掛の工事を行つた事もあつたが、成功を見るに至らなかつた。最後にアメリカ合衆國は、國家事業として此の工事に着手し、十年の歳月と八億圓の費用とを費して、我が大正三年、遂に之を造り上げたのである。

米國がこの運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。衞生の設備をよくして危險な病氣を根絶し、幾萬の從業者の健康をはかつた事や、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、一としてそれならぬものは無い。

昔、太平・大西兩洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りをしなければならなかつた。しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて世界船路に大きな變動を生じたのである。

第十八　文天祥（四頁）

支那の宋朝の末、北方に元といふ國おこり、勢日々に盛にして、宋の領地ををかし〳〵かば、宋は次第におとろへて、ほとんど亡びんとするに至れり。

宋の臣文天祥大いに之をうれへ、義兵を集めて國難を救はんとす。其の友之を止めていはく、「羊の虎に向ふが如し。危し。」と。天祥きかずしていはく、「我もとより之を知る。唯國家の危きを如何せん。」と。出でて元軍に當る。

然るに元軍の勢いよ〳〵盛にして、宋軍到る處に敗れ、皇帝・皇后も遂に敵手に落ちぬ。こゝにおいて皇兄位をつぐ。文天祥命を奉じ、各地に轉戰して元軍を破る。されど宋軍の大勢日々に非にして、天祥の誠忠を以てしても如何ともすることあたはず。たま〳〵元の大軍至るに及んで天祥大いに敗れ、遂に敵兵に捕へらる。

時に宋の勇將張世傑よく戰ひて元軍を防ぐ。敵將張弘範如何にもして之を降らしめんとし、文天祥に命じていはく、「書をしたゝめて張世傑を招け。」と。天祥固くこばみていはく、「我、國を救ふことあたはず。いづくんぞ人をいざなひてそむかしめんや。」と。

張世傑等の奮戰も大勢を轉ずることあたはずして、宋遂に亡びしかば、張弘範、文天祥に說きていはく、「宋亡びぬ。御身の忠義を盡くすべき所なし。今より心を改めて元に仕へば、富貴は意の如くならん。」と。天祥きかず。或人又なじりていはく、「汝大勢の如何ともすべからざるを知つて、何ぞいたづらに苦しむことの甚だしきや。」と。天祥いはく、「父母の病あつければ、醫藥の効なきを知りても、

尙治療につとむるは人情の常にあらずや。心力を盡くしてしかも救ふことあたはざるは天命なり。事既にこゝに至る。天祥唯死せんのみ。」と。遂に獄に投ぜらる。

元の皇帝深く文天祥を惜しみ、ねんごろに諭して元に仕へしめんとす。天祥いはく、「我は宋の臣なり。いづくんぞ二朝に仕へんや。願はくは我に死をたまへ。」と。帝其の志の動かすべからざるを知り、之を刑場に送らしむ。天祥刑せらるゝにのぞみ、從容としていはく「臣が事終る。」と。うや〳〵しく南、宋の方を拜して死す。

元帝歎じていはく、「文天祥は眞の男子なり。」と。

卷十一
卷十二　六年級用

一、植民地に關する記事……（五二）

卷十二　第十七課　間宮林藏（樺太）　その頁數　六・三　その歩合　〇・〇二三

二、滿蒙關東州に關する記事なし

三、國際關係に關する記事なし

四、世界及び外國事情に關する記事……（五一）

卷十一　第二課　孔子
第三課　上海
第十二課　ゴム
第二十三課　南米より（父の通信）
第二十四課　孔明

卷十二　第八課　ヨーロッパの旅
第十三課　國旗
第十九課　釋迦
その頁數合計　四六・一
その歩合　〇・一七一強

右各項の內容は次の如し

〔巻十二〕

第十七課　間宮林藏（六・三頁）（挿繪一）

樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに其の實際を調査して此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人の中より現れぬ。間宮林藏これなり。

今より百二十年ばかり前、卽ち文化五年の四月に、林藏は幕府の命によつて、松田傳十郎と共に樺太の海岸を探檢せり。樺太が離れ島にして大陸の地續にあらざることは、此の探檢によりて略ゝ知ることを得たれども、更によく之を確めんがために、同年七月林藏は單身にてまた樺太におもむけり。

先づ樺太の南端なる白主といふ處に渡り、此處にて土人を雇ひて從者となし、小舟に乘じていよ〳〵探檢の途に上りぬ。それより一年ばかりの間、風波をしのぎ、飢寒と戰ひ、非常なる困難ををかして樺太の北端に近きナニヲーといふ處にたどり着きたり。これより北は波荒くして舟を進むべくもあらず、山を越えて東海岸に出でんとすれば、從者の土人等ゆくての危險を恐れて從ふことをがへんぜず。止むなく南方のノテトといふ處に引返し、酋長コーニの宅に留りてしばらく時機の至るを待ちぬ。

網をすき、舟を漕ぎ、漁業の手傳などして土人に親しみ、さてさまゝ〳〵の物語を聞くに、對岸の大陸に渡りて其の地の模樣を探るは、かへつて目的を達するに便なることを知りぬ。たま〳〵コーニが交易のため大陸に渡らんとするに際し、林藏は好機至れりとひそかに喜びて、切に己をともなはんことを求む。コーニは「容貌の異なる汝が彼の地に行かば、必ずや人に怪しまれ、なぶりものにせられて、或は命も危かるべし。」とて、しきりに止むれども林藏きかず、遂に同行することに決せり。

出發の日近づくや、林藏はこれまでの記錄一切を取りまとめ、之を從者に渡していふやう、「我若し彼の地にて死したりと聞かば、汝必ず之を白主に持歸りて日本の役所に差出すべし。」と。文化六年六月の末、コーニ・林藏等の一行八人は、小舟に乘じて今の間宮海峽を横切り、デカストリー灣の北に上陸したり。それより山を越え、河を下り、湖を渡りて黑龍江の河岸なるキチーに出づ。其の間、山にさしかゝれば舟をひきて之を越え、河・湖に出づればまた舟を浮べて進む。夜は野宿すること少からず。木の枝を伐りて地上に立て、上を皮にておほひ、八人一所にうづくまりて僅かに雨露をしのぐ。キチーにて土人の家に宿る。土人等林藏を珍しがりて之を他の家に連行き、大勢にて取圍みながら、或は抱き或は懷を探り、或は手足をもてあそびなどす。やがて酒食を出したれども、林藏は其の心をはかりかねて願みず。土人等怒りて林藏の頭を打ち、强ひて酒を飮ましめんとす。折よく同行の樺太人來りて土人等を叱し、林藏を救ひ出しぬ。

翌日此の地を去り、河をさかのぼること五日、遂に目的地なるデレンに着せり。デレンは各地の人々來り集りて交易をなす處なり。林藏の怪しみもてあそばるること、此處にては更に甚だしかりしが、かゝる中にありても、彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。コーニ等の交易は七日にして終りぬ。歸途一行は黑龍江を下りて河口に達し、海を航してノテトに歸れり。此處にて林藏はコーニ等に別れを告げ、同年九月の半ば、白主に着しぬ。

林藏が二回の探檢によりて、樺太は大陸の一部にあらざること明白となりしのみならず、此の地方の事情も始めて我が國に知らるゝに至れり。

四

〔巻十一〕

第二課　孔　子（三・九頁）（挿繪一）

支那幾千年の人物中、大聖として長く後人に敬はれ、德化の尙今日に著しきもの、孔子に及ぶはなし。孔子は今より凡そ二千五百年前、當時の魯卽ち今の山東省の地に生れたり。少時より學問に勵み、長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、久しく其の職に居ることあたはずして魯を去りぬ。當時支那は數國に分れて互に相爭ひ、戰亂止むことなかりしかば、孔子大いに之をうれひ、如何にもして國家を治め、萬民の苦を救はんものと、廣く各國をめぐりて、用ひられんことを求めぬ。しかも遂に志を達することを得ざりしかば、老後は專ら力を教育と著述とに用ひたり。門人三千人、其の最もすぐれたるもの、顏淵・曾參・有若等七十二人なりき。

論語は、曾參と有若との門人等が孔子及び其の高弟の言行を集錄したるものにして、最もよく此の大聖の面目をうかゞふを得べし。今此の書によりて其の一端を述べん。

孔子は正義の念强き人なりき。其の言にいはく、「富貴は人のねがふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之に居らず。貧賤は人のいとふ所なり。然れども正しき道によるに非ざれば、我之を去らず。」と。

孔子常に中正不偏を貴び、「中庸は德の至れるものなり。」といひ、「過ぎたるは及ばざるが如し。」ともいへり。又きはめて學問に熱心にして、其の好學の念の切なる、「朝に道を聞くことを得ば、夕に死すとも可なり。」といふに至れり。

孔子は他人を正す前に先づおのれを正し、近きより遠きに及ぼすを以て其の主義としたり。「おのれを修めて人を安んず。」とは、彼が簡明に此の意をあらはせる語なり。

かつて自らいはく、「發憤しては食を忘れ、樂しんではうれひを忘れ、

老の將に至らんとするを知らず。」と。其の身を忘れ、よはひを忘れて、人生の爲に盡くしたる大聖の面目、よく此の語にあらはれたりといふべし。

第三課　上　海（三・七）（挿繪一）

長崎を出た汽船は、海上を走ること約四百海里で揚子江の河口に達する。それから五十海里ばかりさかのぼつて、黄浦江といふ支流に入り、更に十海里餘りさかのぼると、其の西岸にある上海に着く。上海は支那第一の貿易場で、百萬以上（大正十四年度には百萬近くとあり）の人口を有する大都會である。こゝには外國人の居留する者が非常に多く、これ等は租界といふ特別の區域内に住んでゐる。租界といふのは居留地の一種で、居留民が支那政府の手を離れて、自治制を布いてゐる處である。

租界には皮膚の色の違ひ、言語・風俗の違つた幾多の人種が入交つてゐるので、其の有様は一見世界人種の展覽會のやうである。市街の様子も支那風ではない。アスファルトや石を敷いた道が縦横に通じ、電車・馬車・自動車等が絶間なく往來してゐる。街路をさしはさんで大商店が軒をつらね、河岸には領事館・稅關を始め、銀行・會社等のりつぱな建物がそびえてゐる。其の外各種の學校や博物館・圖書館等の修養機關、公園・競馬場・劇場等の娯樂機關が到る處に散在してゐる。租界の外に出ると大ていは支那風の町で、町幅も狭く、あまりきれいでない。唯商業の取引の盛な部分は、相當に活氣を帶びてをり、西洋風の建物もあつて、趣がやゝ變つてゐる。

上海が黄浦江に臨む部分は延長八哩、六十餘の波止場がある。此の地は交通上重要な位置を占めてゐて、外國との貿易ばかりでなく、支那の各地との取引にもきはめて便利であるから、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。貿易上最も重要な關係をもつてゐるのは、日・英・米三國で、我が居留民の數は、外國人中第一位を占めてゐる。

上海は專ら商業の都市として知られてゐるが、近時工業も次第に盛になつて、紡績・造船・製粉・製紙其の他の諸工場が勢よく黒煙を立てゝゐる。

第十二課　ゴ　ム（五・二頁）（挿繪二）

自動車・自轉車のタイヤ、ゴムまり・ゴム人形・消しゴム・ゴム靴・ゴム管・ゴム風船など、數へてみるとゴムで造つたものは實に多い。一體ゴムは何からどうして造るのであらうか。

ゴムは熱帶地方に産する或植物からとる白色の液を原料として、製造したものである。此の液の取れる木を普通にゴムの木といつてゐる。これには種類が多く、一番よいのはパラゴムといふのである。今日世界におけるゴムの大部分は、此の木から取つたものである。此の種のゴムが、昔主として南米ブラジルのパラ州から産出したのでパラゴムの名が生じたわけである。

ブラジル邊でゴムを製造するには、山野に自生するゴムの木から原料をとるのであるが、近年ゴムの需要が激増したために、英國人はマレイ半島の領地にパラゴムの木を移植するに至つた。他の國人も之にならつて、南洋におけるゴムの栽培は頗る盛になつた。南洋は一年中温度が高く、雨量が多いので、ゴムの木の發育には最もよく適してゐる。マレイ半島・蘭領東印度等には、日本人の經營してゐるゴム園もたくさんある。此の邊でゴムを栽培するには、先づ森林を燒拂つて、其のあとに種をまくか、又は苗を植付けるのであるが、これが成長して、切付を行ふまでには五六年もかゝる。其の間草をとつたり、虎や象の荒しに來るのを防いだり、苦心はなか〳〵一通りでない。切付といふのは、ゴムの木から液をとるために、木の幹に小刀で傷をつけることをいふのである。切付には餘程熟練を要する。元來ゴム液は、幹の皮部と木質部との間にある乳管組織といふ所から出るのであるから、此の組織の所まで小刀が屆いて、しかもそれより深くは傷のつかないやうにしなければならぬ。この傷から出て來るゴム液は、流れて下のコップにたまるのである。

ゴム園の人は毎朝暗いうちに起きて、受持の木に此の切付をして廻る。それがすむと、今度はバケツを持つてコップにたまつた液を集めて歩くのである。集めた液は工場に持つて行き、先づこして不純な物を取除き、次に藥品を入れて固まらせ、機械で薄くのして乾かすのである。こゝまでが原産地における仕事である。かうして出來たゴムは、各國の工場に運んで加硫法を行ふ。加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、かうするとゴムが非常に彈力を增して來る。之をそれ〴〵用途に應じて、更に加工するのである。電氣の機械や、萬年筆の軸などに用ひるエボナイトといふのもゴムから造る。近來床の敷物や、道路にもゴムを用ひることが行はれて來た。ゴムの用途は年を追うて益々廣くなるばかりである。

第二十三課　南米より（父の通信）（八・九頁）（挿繪三）

一

御手紙拜見致候。二人ともよく勉强し居らるゝ由、安心致候。勉强も大切なれど、體にも精々御注意なさるべく候。

目下滯在中のリオ・デ・ジヤネーロ市は、ブラジル國の首府にて非常に景色よく、港としても有名なる處に候。町のりつぱなる事も、文明諸國の大都會に比して少しも劣る所これなく候。此のブラジル國は、廣さ我が國の十三倍もこれあり、其の大部分は熱帶に屬し居候へども、中央の高地や海岸地方の大半は割合に凉しく、殊に温帶に屬する南部の諸州にては、四季の變化も日本の如くはつきり致居候由、唯をかしきは日本の秋が春、日本の冬が夏といふ様に季節の相反する事に候。

二

此の手紙と一しよに、繪葉書をたくさん小包にて送り申候。其の中に有名なるアマゾン河や、イグアッスーの大瀑布の壯觀を寫したるものもこれあり候。アマゾン河は全長五千五百キロメートル、世界の河の王といはれ居候。河幅は驚く程の廣さにて、河口の處にては、三百二十キロメートルもこれある由、略ゞ東京豐橋間の距離に當り候。次にイグアッスーの瀧は、ブラジル國と隣のアルゼンチン國との境にある大瀑布にて、高さ五十五メートル、幅三千六百メートル其の壯觀實に筆舌に盡くし難く候。

三

二週間ばかり前より西方のサンパウロ市に參り居候。此の邊は南米中、日本人の最も多く住める處にて、何處に行きても日本人を見かけ候は甚だ愉快に候。殊に日本人の小學校ありて、御前たちぐらゐの子供が通學し居るを見ては、殆ど身の南米に在るを忘れ候。

世界に名高きブラジルコーヒーの主要なる產地も此の邊にて、甘蔗・棉花・米等もよく出來る由に候。昨日知人に誘はれてコーヒー園見物に出掛け候。大勢の人々が熟したるコーヒーの實を手にてこき落し、之を集めてみぞに投入れ候へば、まじりたる石・砂などは沈み、實のみ浮びて流れ候を、下流にてすくひ上げ、之を廣きほし場にて乾かし候。之を機械にかけて皮を除き、袋に入れて外國に輸出する由に候。

コーヒー園には多くの日本人が働き居候。中にも十三四ばかりの子供が各國人の間にまじりてかひ〴〵しく立働ける樣を見ては、如何にもけなげに存ぜられ候。

四

森林地開墾の樣子を視察致居候ため、しばらく無沙汰に打過ぎ候。ブラジルは何處へ參りても果なき原野と森林とに候。原野は大てい牧場にて、牛馬は放し飼にせられ居候。森林には大木すき間もなく繁茂し、其の根本には、つる草・灌木など思ふまゝにはびこり居候。かゝる處にても日本人が盛に開墾に從事致居り、其の有樣は如何にも男らしく勇ましきものに候。

先づ柄の長さ一間もあるなたにて灌木を伐り拂ひ、次にをのを振るつて大木を伐るに、三抱も四抱もあるものが地ひゞきを打つて倒るゝ樣、壯快言語に絶し候。伐倒したる木は乾くまで其のまゝに致置き、さて四方より火を放てば、天をもこがすばかりのほのほをあげて燃ゆる光景は、實にすさまじきものに候。燃えあとは取片附けて畠とし、コーヒー・わたの木などを植付け申候。

ブラジルの視察も大體終り候間、程なく歸國致すべく候。

第二十四課　孔　明　（三・二頁）（挿繪二）

白雲いう〳〵去り又來る。
西窓一片殘月あはし。

うき世をよそなるしづけき住居、
出でては日每畑を打ち、
入りては机に書をひもとく。

雪降りみだるゝ冬のあしたに、
風なほ冷たき春のゆふべに、
劉備が三顧のこよなき知遇、
我が身をすてゝ報いんと、
起ちてぞ出でぬる、草のいほりを。

天下を定むる三分の計、
たなそこの上に指さすがごと。
いしずゑ固めし蜀漢の國、
漢中王はおごそかに
帝の位をふませ給ひぬ。

二代の帝に盡くす眞心、
强敵ひしぎて世をしづめんと、
三軍進めし五丈原頭、
はかなく露と消えしかど、
其の名はくちせず、諸葛孔明。

〔卷十二〕

第八課　ヨーロッパの旅　（八・二頁）（挿繪四）

一、ロンドンから

ロンドンは何と言つても世界の大都會です。テームス川を飾るタワー橋・ロンドン橋を始め、國會議事堂・大英博物館・ウエストミンスター寺院、其の他見る物聞く物唯々驚く外はありません。昨日大英博物館を一覽しました。陳列品の多種多樣で、しかも其の數量の數限りもないのは、さすがに世界の大博物館といはれるだけあると思ひました。我が日本のよろひ・かぶと共の他の武器類もたくさん集めてあります。市街を見物して私の特に感心したのは、市民が交通道德を重んずることです。往來の頻繁な街上でも、よく警官の指揮に從つて、混亂することがなく、地下鐵道・乘合自動車などの乘り下りにも、むやみに先を爭ふやうなことはありません。

二、パリーから

一昨日朝ロンドンを出發して午後早くパリーに着きました。

此處はさすがに藝術の都として、世界に聞えてゐるだけあつて、建物なども一般に壯麗です。世界最美の街路といはれてゐるシャンゼリゼーの大通には、五六層もある美しい建物が道路の兩側に並び、

車道と人道との間には、綠したゝる街路樹が目もはるかに連なつてゐます。有名な凱旋門は此の大通の起點にあります。

ルーブル博物館も一覽しましたが、りつぱな繪畫・彫刻の多いことは恐らく世界第一であらうと思ひました。又エッフェル塔にも登つて見ました。此の塔は世界最高の建物で、高さが三百メートルもあるさうです。塔の中には賣店もあり、音樂堂・食堂なども設けられてあります。眺望臺で眺めると、道を往來してゐる人間や自動車などは、まるで蟻のはふやうに見えるし、さしもの大きなパリー市も殆ど一目に見えます。

三、ベルダンから

あゝ、此のむざんな光景を御らんなさい。山も森も村も皆燒野が原と變つてゐます。

私は今落日に對して、うすら寒い秋風を浴びながら、山鳩の聲さびしきベルダンの戰跡に立つてゐます。

四、ベルリンから

汽車でドイツの國内にはいつたのは朝まだほの暗い頃でしたが、もう沿道の田畑には農夫が鍬を振るつてをり、又工場といふ工場には盛に黑煙が上つてゐました。これはイギリスやフランスなどでは見られぬ光景で、私は今更ながらドイツ人の勤勉なのに驚きました。やがてベルリンに入つて見ても、勤儉の美風が市民の間にあふれてゐて、彼等が大戰後における自國の疲弊を回復するため盛に活動してゐるのには全く敬服しました。

五、ジュネーブから

世界の公園ともいはれてゐるスイスは、到る處我が日本のやうに景色がよい。私は今ジュネーブ市のモンブラン橋のてすりにもたれて、ジュネーブ湖上の風光に見とれてゐます。るり色の水に浮ぶルソー島、湖畔に連なる綠樹・白壁、はるかに紺青の空にそびえて雪をいただくアルプスの連峯。久しく單調平凡な景色にあきてゐた私には、如何にも心地よく眺められます。

第十三課　國旗（四・五頁）

今日一國家を形成する國々にして、國旗の制定せられざる所なし。國旗は實に國家を代表する標識にして、其の徽章・色彩にはそれぞれ深き意義あり。今我が國を始め主なる諸外國の國旗に就いて述べん。

雪白の地に紅の日の丸をゑがける我が國の國旗は、最もよく我が國號にかなひ、皇威の發揚、國運の隆昌さながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。更に思へば、白地は我が國民の純正潔白なる性質を示し、日の丸は熱烈燃ゆるが如き愛國の至誠を表すものともいふべきか。

イギリスの國旗は、今日の形式を具ふるまでに幾多の變化を重ねたるものなり。元來イギリスは、イングランド・スコットランド・アイルランド三國の合同して成れる國家にして、先づイングランドとスコットランドと合するや、白地に赤十字の徽章ある前者の國旗と、藍地に斜白十字の徽章ある後者の國旗とを合して一旗となし、更にアイルランドの加はるに及び、白地に斜赤十字の徽章ある其の國旗を合はせて、遂に今日の如き形式をなすに至れり。

アメリカ合衆國の國旗は一定不變の部分と變化を許されたる部分とより成る。卽ち赤・白合はせて十三條の横筋は、獨立當時の十三州を表すものにして、永久に變化することあらざれども、藍地中の星章は、常に州の數と一致せしむるを定めとす。現今は星章の數四十八個なり。

藍・白・赤三色を以て縱に染分けられたるは、フランスの國旗なり。此の三色は、自由・平等・博愛を表すものと稱せらる。

フランスの國旗が縱に三色を分ちたるに對して、黑・赤・金の三色を横に染分けたるものはドイツの國旗なり。

國旗の色彩が其の國の人種を表すものに、支那の國旗あり。卽ち赤・黃・藍・白・黑の五色を横に並べたるものにて、赤は漢人、黃は滿洲人、藍は蒙古人、白は回彊人、黑は西藏人を代表するなり。

イタリヤの國旗は、綠・白・赤の三色を縱に染分け、中央の白地中に王家の紋章を表せり。これイタリヤ中興の主エンマヌエル王、國土統一の時、其の家の紋章の色なる白と赤とに、統一の成功を祈る希望の色として綠を加へ、更に王家の紋章を配したるものなり。

かくの如く各國の國旗は、或は其の建國の歷史を暗示し、或は其の國民の理想・信仰を表すものなれば、國民の之に對する尊敬は、卽ち其の國家に對する忠愛の情の發露なり。故に我等は、自國の國旗を尊重すると同時に、諸外國の國旗に對しても、常に敬意を表せざるべからず。

第十九課　釋　迦（八・五頁）（挿繪一）

釋迦は今から凡そ二千五百年前、北インドのヒマラヤ山のふもとカピラバスト王國の太子として生れた。

釋迦は生れつき同情の念に厚く、何事も深く考へ込むたちであつた。或時、父王と共に城外に出て、農夫の働く樣を見廻つたことがある。ぼろを着た農夫は玉のやうな汗をかいて田をすき起し、牛はつかれ果ててあへぎあへぎ働いてゐる。折から飛下りて來た鳥が鍬に傷つけられた蟲をついばんだ。木蔭からじつと見てゐた彼は、しみじみと自分の身の上に思ひ比べて、農夫や牛の勞苦を思ひやると共に、蟲の運命をあはれんだ。

彼はだん〳〵物思ひに沈むやうになつた。それを見てひどく氣をもんだ父王は、彼に妃を迎へ、目もまばゆい宮殿に住まはせて、國政にも與らせようとした。しかし彼は城外に出るごとに、杖にすがるあはれな老人や、息もたえ〴〵の病人、さては野邊に送られる死者をまのあたり見て、益〻世のはかなさを感じた。

「人は何の爲に此の世に生れて來たのか。我々の行末はどうなるだ

らうか。」

こんな事を次から次へと考へては、遂に心の苦しみにたへられなくなつて、

「此の上は聖賢を訪うて教を受ける外はない」。

と思ひ立つに至つた。

父のいさめも妻のなげきも、此の決心をひるがへすことは出來なかつた。かくて彼は二十九歳の或夜、人知れず宮殿を出て修行の途に上つた。師を求めてあちらこちらさまよつてゐるうちに、マガダ國の首府王舍城の附近に來た。かねて釋迦の德をしたつてゐたマガダ國王は、修行を思ひ止らせようとして、自分の國をゆづらうとまで申し出たが、彼の決心はどうしても動かなかつた。彼は更に其の邊の名高い學者を尋ね廻つて說を聽いたが、どれにも滿足することが出來ない。彼は遂に

「もう人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。」

と決心して、或靜かな森へ行つた。さうして此處で父王の心盡くしから送られた五人の友と、六年の間種々の苦行を試みた。次第にやせ衰へて、物にすがらなければ立てない程になつた時、彼はいくら苦行をしても更に効のないことを知つた。そこで彼は先づ近處の河に浴し、たま〳〵其處にゐた少女のさゝげた牛乳を飮んで元氣を回復した。ところが此の新な態度に驚いた五人の友は、釋迦が全く修行を止めてしまつたものと思ひ、彼を捨てて立去つた。

それから釋迦はブッダガヤの綠色濃き木蔭に靜坐しておもむろに思をこらした。今度は程よく食物も取り、休息もした。さうして日夜次々に起つて來る心の迷をしりぞけて唯一筋に悟の道を求めた。或時のことである。彼は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほの〴〵と明けそめた。其の刹那、彼は迷の雲がからりと晴れて、はつきりとまことの道を悟り得た。彼は此の心境の尊さに數日の間唯うつとりとしてゐたが、やがて此の尊い心境を世界の人々と共にせずにはゐられぬといふ慈悲の心が、胸中にみなぎりあふれた。

釋迦は世を救ふ手始として先づかの五人の友をたづねた。かつて釋迦を見捨てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを得なかつた。彼等は釋迦の教を聽いて卽座に弟子となつた。

續いて釋迦はマガダ國王をたづねてねんごろに道を說聞かせ、更にカピラバストに歸つて、父王・妻子を始め國民を敎化して故鄕の恩に報いた。今や釋迦は衆星の中の滿月の如く國中から仰がれる身となつたが、中には彼をそねむあまり、反抗するばかりでなく、迫害を加へようとするものさへも出て來た。殊にデーバダックは、いとこの身でありながら、かねてから釋迦の名望をねたみ、幾度か彼を害しようとした。或時の如きは、釋迦が山の下にゐるのを見附けて、上の方から大石をころがしたが、石は釋迦の足を傷つけただけで、

目的を果すことは出來なかつた。

釋迦は八十歳の高年に及んでも、なほつづれをまとひ飢と戰ひつゝ各地を巡つて道を傳へてゐたが、遂に病を得て、クシナガラ附近の林中に留つた。危篤の報が傳はると、これまで教を受けた人々が四方から集つて別れを惜しんだ。いよ〳〵臨終が近づいた時、釋迦は泣悲しんでゐる人たちに、

「私は行はうと思つたことを行ひ盡くし、語らうと思つたことを語り盡くした。これまで說いた教そのものが私の命である。私のなくなつた後も、めい〳〵が其の教をまじめに行ふ所に私は永遠に生きてをる。」

と諭して靜かに眼を閉ぢた。

尋常小學修身書

巻五　五年級用

尋常小學修身書

巻五　五年級用

一、國際關係に關する記事……（六一）
第四課　擧國一致
第十五課　勇氣
第二十二課　信義
第二十五課　博愛
その頁數合計　一〇・五
その歩合　〇・一三六強
二、世界及び外國事情に關する記事……（六三）
第十六課　忍耐
その頁數　四・二
その歩合　〇・〇五五弱

その内容下の如し。

〔巻五〕

一　第四課　擧國一致（二・八頁）

明治三十七八年戰役は、我が大日本帝國が國家の安全と東洋の平和のためにロシヤと戰つて、國威を世界にかゞやかした大戰爭であります。明治三十七年二月十日に宣戰の詔が下ると、國民は皆一すぢに大御心を奉體して、國の爲に盡さうとかたく決心しました。出征軍人の元氣は盛なもので、忠勇の美談はあげつくされない程ありました。病をおし、傷をかくして召集に應じた在鄉軍人もあり、三人の兄が皆戰死して殘つた末の弟が志願兵になつた家もありました。戰地では雨霰と飛來る彈丸の中で、落ちつきはらつて自分の務を盡す者もあれば、敵彈のために負傷しても、内地へ送りかへされることを拒んで「ぜひ今一度戰線に立たせて下さい。」と願ふ者もありました。

戰場に出ない國民も皆一致して、忠君愛國の誠を盡しました。働きざかりの壯丁が出征した後は、老人も婦人も少年も皆大決心で、家業につとめ、儉約を守つたので、全國の貯金の高は却つて戰前よりも增しました。戰費のために租稅は平時よりも大そう多くなつたが、國民は喜んで負擔して納稅を怠る者などはありませんでした。

軍人が出征する時には、各地の人々はまごころをこめて送り迎へをしました。戰地へは慰問袋や手紙を送り、軍人の家族・遺族にはいろ〳〵と行屆いた世話をしました。出征者の妻は心を引きしめて、家事をとゝのへ、子供を育てて、戰地の夫に心配をかけないやうにしました。又身分の高い婦人は自分で繃帶を造つて、負傷者に送り或は進んで篤志看護婦となつて、親切に傷病者の世話をしました。

明治天皇御製

國を思ふ道に二つはなかりけり
　軍のにはに立つも立たぬも

第十五課　勇　氣（三頁）（挿繪一）

安芳は幕府の命を受けて長崎に行き、オランダ人について航海術を學びました。修業がすんでからもつゞいて長崎に留つて、血氣盛りの海軍練習生を敎へ、九州の近海で、あちこちと航海を試みました。間もなく、幕府は使をアメリカ合衆國へやることになりました。其の時、使は合衆國の軍艦にのせ、別に日本の軍艦を一そうやるといふはさがありました。安芳はそれを聞いて、我が航海術の進歩を見せるには、この上もないよい機會だと思つたので、自分の敎へた部下をさしづして日本人の力だけで航海をしたいと願ひ出ました。何分我が軍艦を外國へやるのは始めてのことであり、まだ練習も十分に積まない日本人だけではあぶないと思つたので、幕府は容易に許しませんでした。しかし、安芳があくまで願つてやまないので、幕府も遂に其の熱心と勇氣に感じて、咸臨丸といふ小さい軍艦で安芳等をやることにきめました。

航海中は毎日のやうに雨風が續いて、海が大そう荒れました、嵐がはげしい時には、船體がひどくゆれて、ねぢ折られさうになつたことが幾度もありました。しかし、安芳等は少しも恐れず、元氣よく航海をつゞけ、日本を出てから三十八日目にサンフランシスコに着きました。アメリカ人は、日本人が航海術を學んでからまだ間もないのに、少しも外國人の助を受けずに、小さい軍艦で、よくも太平洋を無事に越えて來たものだと、大そう感心しました。

第二十二課　信　義（一・八頁）（挿繪一）

加藤清正は信義の心の強い人でありました。豐臣秀吉が明國を討つために、兵を朝鮮に出した時、淺野幸長が蔚山の城を守つてゐたところへ、明國の大兵が攻めよせて來ました。其の時、城中の兵が少い上に、敵がはげしく攻るので、城は日にましあやふくなりました。そこで、幸長は使を清正のところへやつて救を求めました。清正はそれを聞いて、「自分が本國をたつ時、幸長の父の長政がくれ〴〵も幸長の事を自分に頼み、自分もまた其の頼を引受けた。今もし幸長のあやふいのを見て救はなかつたら、自分は長政に對して面目が立たない。」と言つて、すぐに部下の者を引きつれて出發しました。清正は手向つて來る敵を僅かの兵で追散らして、蔚山の城にはいり、幸長と力を合はせて、明國の大兵を引受けてこゝにたてこもり、大そう難儀をしたが、とう〳〵敵を打破りました。

格言　義ヲ見テ爲ザルハ勇ナキナリ。

第二十五課　博　愛（二・九頁）（挿繪一）

紀伊の水夫虎吉等は、蜜柑を船に積んで江戸に行き、其の歸途で、暴風にあひました。船は山のやうな大波にゆられて、遠くの方へ吹流され、二箇月ばかりも大洋の中をたゞよひました。其の間に、食物も飲料水もなくなつて、大そう難儀をしました。

或日、ちようど通りあはせたアメリカ合衆國の捕鯨船が虎吉等を見つけて、救ひ上げ、パンなどを與へて、親切にいたはりました。船長がどこの者かときいたが、言葉が通じないので、地圖を出して見せてやつと紀伊の人といふことがわかりました。それから、この船は北の方へ鯨を捕りに行き、半年ばかりたつて、歸りに、船長は便船に賴んで虎吉等を香港まで送り屆けました。そこには仕立屋をしてゐる日本人があつて親切に世話をし、フランスの船に賴んで上海まで送つてくれました。それから虎吉等は支那の役人の保護を受け、便船に乘つて、やつと我が國に歸ることが出來ました。鄕里では三年もたよりがないから、死んだことと思つてゐたところへ、無事に歸つて來たので、夢かとばかり喜びました。知つてゐる人も知らない人も博く愛するのが人間の道であります。いろ〳〵災難にあつて困つてゐる者を救ふのはもちろん、たとひ敵でも、負傷したり、病氣になつたりして苦しんでゐる者を助けるのは、博愛の道です。明治三十七八年戰役に上村艦隊が敵の軍艦リューリクを打沈めた時、敵のおぼれ死なうとする者を六百餘人も救ひ上げたのは、名高い美談であります。

二

第十六課　忍　耐（四・二頁）（挿繪一）

アメリカ發見で名高いコロンブスは、イタリアの海岸に生まれ、海が好きで、十四の年から船乘になりました。其の頃はまだ地理の學問が開けず、又さま〴〵な迷信などがあつて、遠くに航海する者はありませんでした。

コロンブスはいろ〳〵の記錄や報告を深く研究して、大地は水と陸とで出來てゐて、其の形は球のやうなものに違ひないから、ヨーロッパから西に向つてどこまでも進んで行けば、きつとアジヤの東に達することが出來ると言出しました。しかし、其の頃の人は大地は平たいものとばかり思つてゐたので、コロンブスの言ふことを誰一人として信じる者がなく、あざけり笑ふばかりでした。

コロンブスはそれに少しも屈しないで、熱心に研究を積んで、いよ〳〵自分の考へてゐることに間違がないと信じました。そこでどうかしてそれを實行しようとしたが、自分にはとても航海の費用を出す力がなく、さりとて事業を助けてくれる人もありません。いろいろ苦心したけれども、久しい間、其の志を遂げることが出來ませんでした。後にイスパニヤの皇后イサベラに知られ、其の助を受けて、やつと年來の志を實行する時節が來ました。そこでコロンブスは喜び勇んで、三そうの船に百二十人の水夫をのせ、イスパニヤを出帆することになりました。

それから大西洋を西へ〳〵と進んで行つたが、日數がたつても、陸地の影さへ見えません。水夫等はこのさきどうなることかと、次第に恐しくなつて、このまゝ引返さうとコロンブスにせまつたが、コロンブスは落ちついて、いろ〳〵水夫等をさとしました。かやうにして進んで行くうちに、陸地が見えたと喜んでゐると、それは雲であつたことが度々でありました。水夫等は失望して、もうとても辛抱しきれず、コロンブスがどうしても引返すことをきかないなら、海の中に投げこまうとたくらんだ者さへありました。けれども、コロンブスは忍耐の心の強い人であつたから、さわいでゐる水夫等を慰めたり、おどしたりして、なほさきへ〳〵と進んで行きました。出帆後七十日たつて、遂に新しい島を發見しました。これが今のサンサルバドル島です。それからコロンブスは一たんイスパニヤへ歸つて、このことを皇后に報告し、其の後、何べんも航海して、とう〳〵アメリカ大陸を發見することが出來ました。

卷六　六年級用

一、國際關係に關する記事……（六五）
　第四課　國　交
　第九課　進取の氣象
　　その貢數合計　五・〇
　　その歩合　〇・六五弱
　その内容次の如し

〔卷六〕

第四課　國　交（二一・五頁）

隣近所同志互に親しくして助け合ふことが、共同の幸福を增す上に必要なことは、いふまでもありません。それと同樣に、國と國とが親しく交り互に助け合つて行くことは、世界の平和、人類の幸福をはかるのに必要なことです。今日各國互に條約を結び、大使・公使を派遣して交際につとめてゐるのも、主としてこれがためであります。明治天皇は、諸外國との和親について非常に大御心をお用ひになりました。明治四十一年に天皇の下し賜はつた詔書の中にも、益〻國交を修めて列國と共に文明の幸福を樂しまうと仰せられてあります。

世界大戰役の終に平和會議がパリーで開かれた時、我が國もこれに參加しました。この會議の結果、出來上つたのが平和條約で、將來世界の平和に大切な國際聯盟規約はこの條約の一部です。この條約の實施された大正九年一月十日に、大正天皇陛下は詔書を下し賜はつて萬國の公是によつて平和の實を擧げ我が國力を養つて時世の進歩に伴なふやうに勉めよと國民にお諭しになりました。

大正十年、今上陛下は歐洲諸國を御巡歷になりました。半年の間陛

下は到る處の國々で御交際におつとめになり、いつも非常に好い感じをお與へになりました。これがため各國との和親がどれほど增したかはかり知られません。我等も國交の大切なことを忘れず、つとめて外國の事情を知り、外國人と交際するに當つては、常に彼我の和親を增すやうに心掛けませう。

第九課　進取の氣象（二・五頁）

高田屋嘉兵衛は淡路の人で、子供の時から船乘となつて人に雇はれてゐましたが、後兵庫に出で回漕業を始めました。さうしてまだあまり人の行かなかつた北海道へまでも出かけて家業につとめたので、家もだん〳〵豐になりました。其の頃、ロシヤ人が千島に入り込むらしいので、幕府は警備の役人を出し、また國後・擇捉への航路を開くために、特に熟練した船長を募りました。しかし北の方の海は浪風もはげしく寒氣も强くて航海が危險であらうと恐れて、誰一人應ずるものがありません。嘉兵衛は深く決心して進んで募に應じ、この困難な仕事を引受けました。

嘉兵衛はまづ國後島に渡りました。國後から擇捉へ渡る海上は殊に難所ですから、いろ〳〵苦心して潮流の模樣を調べた結果、廻り路をすれば安全であることを見きはめたので、いよ〳〵船を出しました。しばらくすると霧が深くなつて行先も見えなくなり、その上始めての航海なので、水夫等はしきりに危險を氣遣つたが、嘉兵衛は自分の考へた通りに船を進めて、無事に擇捉島に着きました。さうして十分島内を視察して引返し、この航路の安全であることを役人に報告しました。次の年にもまた嘉兵衛は幕府の命を受けて擇捉島に渡り、所々に漁場を開いて土人に産業を授けました。

その後、嘉兵衛はロシヤの軍艦に捕へられてカムチャッカに行き、それを機會に、その當時我が國とロシヤとの間に起つてゐた爭を解いて國の爲に功を立てました。

尋常小學國史

上卷 下卷 五、六年級用

尋常小學國史教科書中からは日本と外國との關係の叙述せられたる部分のみを拔萃採錄した。これらの記事のうち、地域的には、樺太、朝鮮、臺灣、關東州、南洋委任統治領及び廣く世界に關する叙述が含まれてゐるけれども、いづれも單獨獨自に取扱はれてゐるわけではなく、すべて國際關係の一のあらはれとして叙述されてゐるのみならず、日本の植民地勢力範圍等に關する部分も概ねこれらの諸地方が戰爭その他の國際的原因によつて、日本の植民地或ひは勢力範圍となりたる徑路等に主眼を置いて叙述されてゐるが故に、すべて國際關係に關する記事と見做し、地域別には分類しなかつた。

上卷に於ては百六十頁のうちこの種の記事は約十五頁半、即ち約九分七厘を占め、下卷においては百五十六頁のうち約六十頁半、即ち三割八分八厘弱を占め、上下兩卷を通じて見れば、總頁數三百十六頁のうち七十六頁、即ち二割四分弱を占める。

その內容は次の如し。

〔上卷〕

第四　神功皇后（四頁）（挿繪二）

仲哀天皇の皇后を神功皇后と申し、御生れつき賢くををしくましませり。天皇の御代に熊襲またそむきしかば、天皇は、皇后と共に九州にみゆきして之を討ちたまひしが、いまだ平がざるうちにかくれたまへり。

此の頃朝鮮には、新羅・百濟・高麗の三國ありて、之を三韓といへり。中にも新羅は最も我が國に近く、且その勢强かりき。されば皇后は、まづ新羅をしたがへなば、熊襲はおのづから平がんとおぼしめし、武內宿禰とはかり、御みづから兵をひきゐて新羅を討ちたまふ。時に紀元八百六十年なり。

皇后は御出發の前、香椎の海べに出で、御髮を解き海水にて洗ひたまひて、男の如くみづらといふ髮のふうにゆひ、人々に向ひたまひて、「われ今かりに男のすがたになりて軍をひきゐ、神々の御たすけと汝等の力とによりて新羅を討ちしたがへん。」と仰せられしに、武內宿禰をはじめ一同つゝしみて、「仰にしたがふべし。」と答へたてまつれり。

皇后舟いくさをひきゐて對馬にわたり、それより新羅におしよせた

まふ。軍船海にみち〳〵て、御勢すこぶる盛なりしかば、新羅王大いに恐れていはく「東の方に日本といふ神國ありて、天皇といふすぐれたる君いますと聞く。今來れるは、必ず日本の神兵ならん。いかでかふせぎ得べき。」と。たゞちに白旗をあげて降參し、皇后の御前にちかひて「たとひ太陽西より出で、川の水さかさまに流るゝ時ありても、毎年の貢はおこたり申さじ。」といへり。やがて皇后凱旋したまひしが、其の後百濟・高麗の二國もまた我が國にしたがへり。かくて、これより朝鮮は天皇の御德になびきしたがひ、熊襲もおのづから平げり。又應神天皇(第十五代)の御代に、王仁といふ學者など百濟より來りて學問を傳へ、機織・鍛冶などの職人も、おひ〳〵渡り來りて、わが國ますます開けしは、全く神功皇后の御てがらに基づきしなり。

第六　聖德太子（三・五頁）（插繪一）

仁德天皇より御十八代めの天皇を推古天皇(第三十三代)と申す。天皇は女帝にましませしかば、政治を御甥の聖德太子にまかせたまへり。

太子は御生れつき人にすぐれて賢くまし〳〵、一時によく十人の訴を聞分けたまひしといふ。其の上に、朝鮮の學者につきて、深く學問ををさめたまひしかば、朝鮮・支那のよきところをとりて、いろ〳〵新しき政治をはじめたまひ、遂に十七條の憲法を定めて、官民の心得べきことを示したまへり。

太子は又使を支那につかはして、交際をはじめたまへり。其の頃支那は國の勢強く、學問なども進みゐたりしかば、常にみづから高ぶりて、他の國々を皆屬國の如くにとりあつかへり。されど太子は少しも其の勢に恐れたまふことなく、彼の國につかはしたまひし國書にも「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子にいたす、恙なきか。」とかゝせたまへり。支那の國主これを見ていかりたれども、程なく使を我が國につかはしたり。よりて太子はさらに留學生をも彼の國に送りたまひ、其の後引きつゞき兩國の間にゆききありたれば、これまで朝鮮を經て我が國に渡り來りし學問などは、たゞちに支那よりつたはることとなれり。

これよりさき、太子の御祖父欽明天皇(第二十九代)の御代に、佛教始めて百濟よりつたはれり。太子は深く之を信じたまひ、多くの寺を建て、又御みづから敎を說きたまひしかば、これより佛敎大いに國內にひろまり、建築などもいちじるしく進みたり。太子の建てたまひし寺の中にて最も名高きは、大和の法隆寺にして、其のおもなる建物は昔のまゝなりといはれ、わが國にて最も古き建物なり。

かくの如く、太子は大いにわが國の利益をはかりたまひしが、いまだ御位に卽きたまはざる前に、うせたまへり。此の時、世の中の人々は皆、親をうしなへるが如く、なげきかなしみたりといふ。

第八　天智天皇と藤原鎌足（つゞき）（一・五頁）

中の一項……

孝德天皇崩じたまひて、皇極天皇再び御位に卽きたまふ。之を齊明天皇(第三十七代)と申す。中大兄皇子はなほ皇太子として、引きつゞき政治にあづかりたまへり。此の頃支那は唐の代にて、勢甚だ盛なりしが、新羅は其の助をかりて百濟をほろぼさんとせしかば、百濟の人々すくひを朝廷にこへり。皇太子すなはち天皇を奉じて九州におもむきたまひしが、天皇間もなく行宮に崩じたまひしかば、皇太子つぎて立ちたまふ。天智天皇(第三十八代)これなり。天皇兵を出して百濟をすくはしめたまひしに、我が軍利をうしなひ、百濟は程なくほろびしかば、天皇はながく我が軍を海外に勞することの不利なるを見たまひ、遂に之を引上げしめたまへり。ついで高麗もまた唐にほろぼされ、新羅ひとり威をふるふに至り、これより朝鮮は全く我が國よりはなれたり。されど唐とは此の後もなほ交を絕たざりき。

第十二　弘法大師（一頁）（插繪一）

中の一項……

此の頃空海といふ名高き僧あり。讃岐の人にして、生れつき賢く、神童のほまれありし上に、ます〳〵學問にはげみ、遂に桓武天皇の御代に、唐に渡りて佛敎を學び、三年の後かへりて、我が國に眞言宗を傳へたり。空海はことに嵯峨天皇の御信任を得て、始めて高野山を開きしが、これより此の宗大いにひろまりて佛敎はます〳〵盛になれり。……云々。

第二十一　北條時宗（五・五頁）（插繪二）

北條義時はかく無道の行をなせしが、後時宗の代に至り、たま〳〵未曾有の外寇ありて時宗もつぱら之にあたり、大いに我が國威をあぐることを得たり。時宗は時賴の子にして、相模太郎といふ。生れつき豪氣にして弓の上手なり。かつて將軍武人を召して弓を射させたる時、人々みな射そんぜんことを恐れて、ためらひたるに、わづかに十一歲なる時宗は、少しも臆する色なく、ひとり馬に乘りて進み出で、一矢にて的に射あて、大いに譽をあげたることあり。龜山天皇(第九十代)の御代、十八歲にて幕府の政治を執れり。

これよりさき、支那の北方に蒙古といふ國おこり、しきりに國々を攻取りて、其の勢、西の方は今のロシヤの西南部より、東の方は朝鮮半島に及べり。時に半島にては、新羅すでに亡びて、高麗これに代りゐたり。

蒙古王はすでに高麗を從へ、さらに我が國を小國とあなどり、我をも從へんとて、高麗王に命じ無禮なる書を送らしめたり。時宗これを見、大いに怒りて其の使をしりぞけたり。

やがて蒙古は支那の大部分を取りて、國を元と名づけたり。後宇多天皇(第九十一代)の文永十一年、元の軍高麗の軍を合はせ四萬人を以て、對馬・壹岐をおかし、筑前によせ來りて、博多附近にて上陸せしが、我が將士勇敢にして、よく之を防ぎしかば、敵軍遂に逃去りたり。世に之を文永の役といふ。

されど元の勢ます〳〵強く、また使を我が國につかはし來れり。然るに時宗は決心いよ〳〵堅く、命じて其の使を斬らしめ、又石壘を博多灣の海岸に築かしめて、元軍の來寇に備へたり。かゝる間に、元は全く支那をあはせ、其の勢に乘じて、弘安四年四萬の兵を發して、朝鮮半島より再び筑前に向はしめ、別に支那より十萬の兵を出したり。朝鮮半島より來れる敵兵は、壹岐を侵して博多にせまりしが、菊地武房・河野通有等の勇士、或は石壘に據りて之を防ぎ、或は敵艦を襲ひて之をなやましたり。ついで支那より來れる大軍これと會して、まさに攻めよせんとせし折しも、大風にはかに起りて、敵艦多く沈沒し、溺れ死するもの數を知らず。諸將われ先にと逃れ去り、取殘されたる兵士は肥前の鷹島に集りしが、或は殺され或は捕はれたり。世に之を弘安の役といふ。

此の二度の役は、まことに我が國始めての大難にして、龜山上皇は大いに之を憂へたまひ、かしこくも御身を以て國難に代らんことを伊勢の神宮に祈りたまひ、時宗は大いなる決心を以て事にあたり、國民も皆奮ひおこり、上下心を一にして、遂に此の强敵をしりぞくることを得たり。これより後、元は再び我が國をうかゞふことなかりき。近く明治天皇は、時宗の大功を賞したまひて、特に從一位を贈りたまへり。

〔下卷〕

第三十五　豐臣秀吉（つゞき）（五・五頁）（挿繪一）

秀吉既に國內を平げたれば、更に明と交を修めんとし、朝鮮をして其の意を通ぜしむ。然るに明我が求に應ぜざるにより、秀吉は道を朝鮮にかりて之を伐たんとせしが、朝鮮は明を恐れて從はざりき。こゝに於て秀吉、朝鮮を定めて明に及ばんとし、關白の職を養子秀次に讓りて太閤と稱し、肥前の名古屋におもむきて諸軍を指揮せり。紀元二千二百五十二年(文祿元年)小西行長・加藤清正を先手として、十三萬餘の大軍海を渡りしが、幾千とも知れぬ軍船、いづれも家々の紋つきたる幕うちまはし、思ひ〳〵の旗おし立て、威勢のほどいはん方なし。それより諸將釜山に上陸し、道を分ちて北進せしが、戰へば勝ち、攻むれば取り、忽ち京城を陷れ、行長は國王の後を追ひて平壤を取り、清正は東北の地方を定めて二王子をとりこにせり。清正はたゞに武勇にすぐれたるのみならず、よく王子をいたはり又民をあはれみたれば、彼の人々も其の德になつけりといふ。かくて

我が軍は三箇月にして、殆ど朝鮮全國を從へたり。

朝鮮王大に恐れて、救を明に請ひしかば、明の大軍來り助けて、行長を平壤に破り、勢に乘じて京城を取りもどさんとす。我が諸將の中には、京城をすてて退かんとするものありしが、小早川隆景は、「大敵の來るは何より幸なり、いざやわが手並を見せん。奮戰してたふるとも、日本に隆景ありと知らせんはまた愉快ならずや。」といひて聞きいれず。立花宗茂等と碧蹄館に陣して、六七倍の敵兵をさん〴〵に打ち破れり。

こゝに於て明は大いに驚き、行長によりて和を求む。秀吉これを許して、出征軍を引上げしめ、明よりは講和の使を送り來れり。時に秀吉は歸りて大阪城にあり、明使をこゝに召せしに、其のもたらせし國書に、秀吉を日本國王となすとありしかば、秀吉無禮を怒りて、明使を追ひ、再び出兵の命を下せり。

慶長二年、清正・行長もとの如く先手となりて、全軍海を渡り、程なく朝鮮の南部を從へたり。年の末に至りて、明の大軍淺野幸長等を蔚山城に圍めり。清正急を聞きておもむき救ひ、城に入る。時に城未だ全く成らず、兵糧も乏しく、清正以下紙を食ひ、馬の血をすゝるに至るも、なほ屈せざりしが、間もなく我が援兵來るに及び、力を合はせて大いに明軍を破れり。

既にして秀吉病にかゝり、慶長三年、六十三歲を以て伏見城に薨ぜり。出征の諸將遺言によりて兵をかへせしに、たま〳〵明軍二十萬島津義弘を泗川に攻む。義弘僅かに五六千の兵を以て、奮戰して之を破りしかば、明軍また我が後をうかゞはず、諸將無事に引上ぐることを得たり。かくて前後七年にわたりたる戰爭は、こゝに其の終を告げたり。

……云々。

第三十八　德川家光（三・五頁）

中の一部分……

家光は又キリスト教の事よりして、外國との交通を禁ずるに至れり。これより先、後奈良天皇の御代にポルトガル(葡萄牙)人始めて我が國に渡り來りしより、イスパニヤ(西班牙)・オランダ(和蘭)・イギリス(英吉利)などの人々も、おひ〳〵に來りて通商を開きたり。又我が國民も遠く海外に渡り行きて盛に貿易を營み、シヤム(邏羅)をはじめ、所々に移住するもの多く、日本町さへ立てられたりき。

ポルトガル人來りしより、間もなくキリスト教もまた傳はれり。織田信長は手あつく其の宣教師を保護し、京都・安土等に教會堂・學校を建てしめたれば、キリスト教は次第にひろまり、西洋の學問もやうやく行はれたり。

然るにキリスト教の信者の中には、わが國の風にそむくものありて弊害少からざれば、秀吉は之を禁じ、教會堂をこぼち、宣教師を國外に追出せり。家康もまた此の方針によりて其の教を嚴禁せしも、

外國との貿易はもとの如く之を許せり。されば海外との交通頗るしげくして、宣教師のひそかに來るもの絕えず、國民の之を信ずるものなほ多かりき。こゝに於て家光は、其の禁絕しがたきを見て、信者を嚴刑に處し、且國民の外國に行くことを禁じたり。

然るに九州は、其の教の最も早く傳はりたる地にて、信者の數も甚だ多く、肥前の島原半島及び肥後の天草島等は、實に其の中心たりき。これ等の信者は、幕府の禁のきびしきを怒り、明正天皇(第百九代)の寛永十四年亂を起し、島原半島なる原城にたてこもれり。家光すなはち兵を發して之を討たしむ。其の徒の勢さかんにして容易にくだらざりしかば、更に兵を增して圍み攻めしめ、翌年遂に之を平げたり。

家光はこれよります〳〵キリスト教を嫌ひ、國民の海外に出づるを許さざるのみならず、西洋人の我が國に來ることをも嚴禁し、たゞオランダ人はキリスト教の布教に關係せざりしより、支那人と同樣に、長崎に來りて貿易することを許せり。かく國を鎖せしかば、キリスト教は遂に國內に絕えて、幕府の目的は達したれども、外國との交通は全く衰へ、洋書を讀むことさへ禁ぜられて、國民は外國の事情にうとく、世界の進步におくるゝに至れり。

第四十二　新井白石（二頁）（插繪一）

中の一項……

はじめ家康朝鮮と交を修めてより、將軍の代がはり毎に、朝鮮より使を我が國に送る定なりき。然るに幕府の之をもてなすこと、勅使よりも厚き有樣なれば、白石は、之が爲にわが國の體面を損ずるを論じ、將軍にすゝめて其のもてなし方を改めしめたり。

さきに綱吉奢にふけり、又大なる寺院などを建てたる爲、幕府の財政困難となりしかば、金貨には銀・銅を多く混ぜ、銀貨には錫などを混ぜて、貨幣の數を增して費用の不足をおぎなひ來れり。されど貨幣の價はおのづから下り、品物の價はたかくなりて、人民大いに苦しみたり。又外國貿易の爲に、金銀おびたゞしく外國に出でたれば、白石はこれ等を改めんとし、しば〳〵書を家宣にたてまつりて意見を述べたり。よりて家繼の時に至り、始めて貨幣を鑄直して質を良くし、又貿易の額を制限して、金銀の多く外國に出づるを防ぎたりき。

第四十三　徳川吉宗（〇・五頁）（插繪一）

中の一項……

吉宗は又西洋の學術の進めるを聞きて、之を學ばしめんと欲し、今までの禁を解きて、キリスト教に關せざる書物は、之を讀むことを許せり。これより國民は、始めて洋書にて西洋の學術を學ぶことを得、後西洋學の盛になる基開けたり。

……

第四十四　松平定信（二頁）（插繪一）

中の一項……

かくて國內よく治り、人々安心したりしに、はからずも憂は外より起れり。さきに家光國を鎖せしより、西洋諸國との交通は久しく絕えたりしに、たま〳〵寛政四年、ロシヤ(露西亞)の使根室に來りて、始めて通商を請ふ。幕府はこれを許さざりしかば、これより形勢やうやくおだやかならず。こゝに於て定信大いに意を海防に用ひ、自ら肢引・草鞋がけにて、けはしき山谷をこえ、宿なきところにては野宿などし、數多の困難を忍びて、伊豆・相模等の海岸を巡視せり。定信かつて外國船を畫かしめ、之に題して、

この船のよるてふことを、夢の間も
わすれぬは世の實なりけり。

とよめり。定信が日夜海防の事を憂へたるは、之によりても知るべし。

第四十五　攘夷と開港（五頁）（插繪一）

高山彦九郎・蒲生君平と共に、寛政の三奇人とよばれたる人に林子平あり。仙臺の人にて、若き時より學問・武藝に勵み、殊に地圖を見ることを好みて、終日食事をさへ忘るゝほどなりき。

子平は足のたつしやなるにまかせて、北は北海道のはてより西は長崎に至るまで、全國を經めぐりて、實地を取調べたり。長崎にてオランダ人より外國の形勢を聞くに及びて、海防のゆるがせにすべからざるを悟り、海國兵談を著して「我が國は四面みな海にして、江戸日本橋よりヨーロッパ(歐羅巴)洲に至る間、一つの水路なり。かれ攻來らんとならば、何れへなりと來ることを得べし。何とて備を怠るべきぞ」と述べたり。實に此の頃西洋諸國は、しきりに勢力を東洋にひろげて、次第に我が國に近づかんとする有樣なりしなり。されど、外國との交通禁ぜらるゝこと久しく、國民は外國の事情にうとくして、多くは世界の形勢を知らず。幕府もまた、子平の論を以ていたづらに人心を惑はすものなりとし、其の書物及び版木を取上げて子平を罪したり。をりから子平病にかゝりしかば、

親もなく妻なく子なく版木なし、
金もなければ死にたくもなし。

との歌をよみて六無齋と號せり。後その罪をゆるされ、明治に至りて更に追賞せられたり。

寛政四年、子平罪せられて間もなく、ロシヤの使我が國に來りしかば、世人は子平の先見に感じたり。然るにロシヤ人は、通商の請の許されざるを以て、樺太・千島に寇し、ついでイギリス船も來りて長崎を騷がし、之が爲に、長崎奉行は責をおうて自殺せり。こゝに於て國民の之を憤るもの多く、攘夷の論しきりに起り、幕府は令を下して海防を嚴にせしめ、遂に仁孝天皇(第百二十代)の御代に、外

國船のうちはらひをさへ命ずるに至れり。

此の頃諸大名は、たいてい攘夷論をとなへしが、中にも最も強く此の論を主張せしは、水戸の藩主徳川齊昭なり。齊昭は四五歳の時既に漢書を讀み和歌を作り、九歳より鐵砲を習ひはじめて種々の武術に及び、やゝ長じては近臣と競爭を試みなどして身體をきたひ、一日に二十餘里を走りても、さらに疲れたる樣子も見えざりしといふ。家をつぎて藩主となるに及び、弘道館といふ學校を建てて大いに文武の業を勵まし、又さかんに大砲を鑄て海防に備へたりしが、後大砲七十四門を幕府に獻じて、世人の耳目を驚かせり。

齊昭は光圀の志をつぎて、皇室を尊び、毎年正月元旦はもとより、先帝の御忌日には、必ず身を清めて京都を遙拜し、常に家臣を戒めて朝廷を敬ひたてまつらしめたり。今や攘夷の論起るに及びて、齊昭は進んで之をとなへ、此の際天下の人心をひきたてて、國威を損ぜざらんことにつとめたれば、これより尊王攘夷の論は大いに天下を動かせり。

第四十八　攘夷と開港（つゞき）（九頁）（挿繪三）

世は一般に攘夷論盛なるも、洋學を修めたるものの中には、外國の事情に通じて、開港の意見を有するものあり。三河の人渡邊華山は、家貧しく、少年の頃より畫をかき、之を賣りて生計を立て、父母に孝養を盡せしが、後洋學に志し、世界の大勢を知るに及びて、外

船うちはらひの非なるを論じ、又陸中の人高野長英も、はやくより洋學及び醫術を學び、夢物語といふ書物を著して、同じく攘夷の不可なることを述べたり。こゝに於て、二人とも世を惑はすものなりとて、幕府より罪せられたり。

此の頃孝明天皇（第百二十一代）御位に卽せたまひしが、たゞちに幕府に勅して、海防を嚴にし國威を損ぜざるやう戒めたまひ、なほ外國船渡來の樣を申し上げしめたまへり。

たま〳〵紀元二千五百十三年（嘉永六年）、アメリカ（亞米利加）合衆國の使節ペリー軍艦四隻を率ゐて、相模の浦賀に來り、好を修め通商を開かんことを請ふ。されど幕府は事の重大なるを見て、容易に之を決する能はざりしかば、ペリーは再び來りて返答を受くべきことを約して去れり。こゝに於て幕府は、たゞちに其の由を朝廷に申し上げ、又諸大名にも意見を述べしめたりしが、意見まち〳〵にして、攘夷開港の論いよ〳〵騷がしくなれり。時の人たはむれに此の有樣を歌によみて、

太平の眠をさます上喜撰（蒸氣船）
たつた四杯（四隻）で夜もねられず。

といへり。

かくて幕府の方針未だ定まらざる中に、早くも翌安政元年となり、ペリーは軍艦を率ゐ再び來りて、さきの返答を求めたり。よりて幕府はやむことを得ず、ひとまづ和親條約を結びて、伊豆の下田・北海道の函館の二港を開き、薪水・食料などの必要品を給することを約せり。されど通商はなほ許さざりしかば、其の後間もなく、ハリス合衆國の總領事として下田に來るに及び、將軍家定にまみえ、世界の大勢を說きて、しきりに通商を開かんことをすゝめたり。こゝに於て幕府遂に通商條約を定めて、之が勅許を請ひたてまつれり。然るに開港につきて國論未だ定まらざるを以て、天皇は深く憂へたまひ、容易に幕府の請を許したまはず、更に諸大名の意見をまとめたる上にて、申し上ぐべしと諭したまへり。されどハリスの幕府にせまることいよ〳〵はげしかりしかば、幕府は、事情切迫して猶豫すべき場合にあらずとし、遂に勅許をまたずして合衆國と通商條約を結び、下田・函館の外に、神奈川（武藏）・長崎（肥前）・新潟（越後）・兵庫（攝津）の四港をも開きて貿易場となすことを約せり。時に紀元二千五百十八年（安政五年）にして、之を安政の假條約といふ。ついでオランダ・ロシヤ・イギリス・フランス（佛蘭西）の四國とも同じく條約を結べり。こゝに於て天皇は、大いに幕府の專斷を御憤あり、又德川齊昭等及び多くの志士は、時の大老井伊直弼の罪を責むるに至れり。

時に將軍家定子なきを以て、其の世嗣を定めんとするに當り、內外多事のをりからなれば、諸大名の多くは、齊昭の子慶喜の頗る賢明なるを見て、之を迎へんことを望めり、然るに直弼は將軍の旨をうけ、衆議をしりぞけて、紀伊家より家茂を迎へたり。間もなく家定薨じて、家茂將軍となれり。これより直弼を非難する聲ます〳〵高し。よりて直弼は、幕府に反對せる人々をおさへんとし、齊昭・慶喜等をおしこめ、志士數十人を捕へて或は流し或は斬れり。世に之を安政の大獄といふ。齊昭は國家の爲に盡すこと殆ど三十年、今や幕府の罪をうけ、いくばくもなく病みて薨ぜり。藩にておくり名して烈公といふ。志士の一人に吉田松陰あり。松陰は長門藩士にて、松下村塾を開きて人才を養成し、又常に國事を憂へ、かつて外國の事情をさぐらん爲、ひそかにアメリカに渡らんとして罰せられしが、今また捕はれて、江戸にて死刑に處せられたり。此の他壯烈なる志士多くむざんの最期をとげたりき。

こゝに於て、直弼のきびしき處分を憤るものいよいよ多く、遂に水戸の浪士等相謀りて、萬延元年三月三日、をりから降りしきる雪を幸に、直弼の登城を櫻田門外に待ちぶせて、不意に其の乘物を襲ひて、直弼をさし殺せり。世に之を櫻田門外の變といふ。

第四十九　孝明天皇（三頁）（挿繪一）

中の一部分……

井伊直弼殺されしより、幕府の威勢くぢけて、長門藩をはじめ尊王攘夷を論ずるもの多く、其の勢ます〳〵盛になれり。

孝明天皇は、御生れつき剛毅にまし〳〵、常に朝廷の御威光の振はざるをなげきたまひ、又外交の問題につきても、深く大御心をなや

ましたまへり。たま〳〵長門藩は、幕府をして速に攘夷の議を決せしめんことを朝廷に請ひたてまつりしかば、天皇は之をいれたまひ、三條實美等を勅使として江戸に下し、攘夷をうながさしめたまふ。將軍家茂は勅使を手あつくもてなし、謹みて其の命を奉ぜり。これより朝廷の御威光は高まりて、政治の中心は次第に京都の方にうつり行けり。

やがて文久三年家茂勅命によりて京都に上りしが、天皇は將軍及び諸大名を從へ、賀茂神社に行幸して、攘夷を祈らせたまふ。御行列いかめしく、士民四方より集り來りて之を拜觀し、皆天皇の尊きをあふぎたてまつれり。かくて攘夷の氣勢ます〳〵あがりたれば、家茂もやむを得ず、遂に五月十日を以て攘夷を實行することと定め、之を朝廷に申し上げ、又諸大名にも通知したり。されば五月十日に至り、長門藩は下關海峽に外國船を砲撃して、攘夷のさきがけをなし、ついで攘夷の親征を朝廷に請ひたてまつれり。朝廷これを許したまひ、大和に行幸して神武天皇の御陵を拜し、以て親征の詔を下さんとの令を發したまへり。

然るに一方には、また薩摩・會津など諸藩の溫和論をとなふるものありて、親征の不可なることを朝廷に申し上げたり。よりて朝議は俄にかはり、ひとまづ大和の行幸をとゞめ、長門藩士等の入京を禁じ、又攘夷を主張せる三條實美等七人の公卿をしりぞけたり。

……云々。

第五十一　明治天皇（二四頁）（挿繪六）

二　西南の役中の一項（征韓論）……

我が國外國と和親する方針を定むるや、先づ使を朝鮮に遣はして、好を修めんことをすゝめたり。然るに朝鮮は我が好意をしりぞけ、かへつて、しば〳〵禮を失ひたれば、西鄉隆盛は、自ら朝鮮に赴きて談判を試み、彼なほ聽かずば、兵を發して之を伐たんと主張し、朝議殆ど之に決せり。たまたま明治六年、岩倉具視等歐米諸國をめぐりて歸り來り、內治を整ふるの急なるを說きて、外征に反對せしかば、其の事遂にやみ、隆盛等はただちに官を辭して鄉里に歸れり。

……云々。

同じく　明治天皇中の

四　明治二十七八年戰役

さきに征朝の論やみてより、我が國はつとめて朝鮮と交を修め、公使館を京城に設け、後護衞の兵を置けり。然るに朝鮮には黨派の爭ありて、明治十七年、淸國にたよらんとするものは、京城にとゞまれる淸國兵の力をかりて、我が國にたよらんとするものを破り、遂に我が公使館を燒き、多くの官民を殺傷せり。されば我が政府は、朝鮮をして償金を出して其の罪を謝せしめ、更に伊藤博文を淸國に遣はし、其の使臣李鴻章と天津に會して、兩國とも朝鮮に兵をとゞむることをやめ、若し必要あらば、互に通知したる後に出兵すべしと

約せしめたり。之を天津條約といふ。其の後も淸國は、なほ朝鮮を屬國の如く見なし、ひそかに己にたよらんとするものを助け、其の黨獨り勢を得て、政治大いに亂れしかば、人民は之に苦しみて、遂に二十七年に至り亂を起せり。其の勢頗るさかんなるにより、淸國は屬國の難を救ふと稱して兵を送り、之を我に通知し來れり。よりて我が國もまた、公使館と居留民とを保護する爲に兵を出し、且淸國にすゝめて、相共に力を合せて朝鮮の弊政を改めんとせり。然るに淸國は之を聽かず、かへつて海陸の大兵を朝鮮に送り、此の年七月、豐島沖にて我が軍艦を砲擊し、戰端を開きしかば、我が軍艦應戰して之を破り、ついで我が陸軍もまた淸兵と成歡に戰ひて之に勝てり。こゝに於て翌月、天皇宣戰の詔を下したまひ、間もなく大本營を廣島に進めたまひたれば、我が軍氣いよ〳〵振へり。

此の時あたかも我が陸軍は、平壤に集れる淸兵を四方より攻圍みて之を陷れ、又我が海軍は、黃海に於て大いに敵の艦隊を破り、我は一艦をも失はずして、敵艦の全部に大損害を與へたり。

其の後我が軍は、陸に海に至るところ勝を得、二十八年に入りて、陸軍大將大山巖は海軍中將伊東祐亨と力を合せて、敵の海軍の根據地たる威海衞にせまれり。敵將丁汝昌は死力をつくして之を守りしが、我が軍しきりに砲臺を陷れ軍艦をうち沈むるに及びて、力つきて、降を請ひ、部下の將士を助けんことを求めて、自らは毒をのみて死せり。祐亨深く其の志をあはれみ、特に汽船を與へて汝昌の柩を送らしめたり。

我が軍は、連戰連勝の勢を以て、程なく遼東半島を占領し、まさに北京にせまらんとせり。こゝに於て淸國は大いに恐れ、李鴻章を我が國に遣はして和を請はしむ。我が政府すなはち內閣總理大臣伊藤博文・外務大臣陸奧宗光をして、之と下關にて談判せしめ、遂に淸國をして、朝鮮の獨立をみとめしめ、又遼東半島と臺灣・澎湖島とを我が國に讓り、償金二億兩（三億圓ばかり）を出すこと等を約せしめて和を結べり。之を下關條約といふ。時に二十八年四月なり。然るにロシヤ・ドイツ（獨逸）・フランスの三國は、我が國の遼東半島を領するは、東洋の平和に害ありとし、之を淸國にかへさんことをすゝめ來れり。よりて我が政府は、內外の形勢を見、其のすゝめをいれて、半島を淸國にかへせり。かくて朝鮮は、此の條約によりて、確に獨立國たることをみとめられ、ついで國號を韓と改めたり。

臺灣は既に我が領地となりしも、島內にはなほ我に從はざるものありしかば、北白川宮能久親王は、近衞師團の兵を率ゐて之を討ちたまふ。親王は所々に轉戰したまふうちに、風土の病にかゝりたまひしも、なほ轎に乘りて指圖したまひしかば、御病日々に重りて、遂に薨じたまひき。全島やがて平ぎ、後親王を臺灣神社にまつれり。

此の戰役は、東洋に於ける近世の大戰爭なりしが、平和の成れるまで、天皇は久しく廣島の大本營にまし〳〵、狹き御室にて日夜萬機を開召され、かたじけなくも出征軍人と辛苦を共にしたまひ、をり

からの嚴寒にもストーブをさへしりぞけたまへり。されば出征の將卒は、家を忘れ身をすてて、いよ〳〵忠勇をあらはし、內には國民こぞつて之が後援につとめ、上下心を一にして、遂に此の大勝を得たりしなり。

同じく　明治天皇中の

五　條約改正

二十七八年戰役によりて國威をあげたる我が國は、之と前後して、諸外國との條約を改正し、歐米諸國とひとしき地位に立つことを得たり。

其の頃までの條約は、多くは德川幕府が外國にすゝめられて結びたるものにして、我が國の面目を損じ、利益を害する箇條少からず。中にも、我が國內に居留する外國人の裁判は、我が裁判官によらずして、其の國の領事これを行ひ、又外國より輸入する品物に對しても、自由に稅を課すること能はざるが如き定ありき。されば國民深く之を遺憾として、速にかゝる不利・不面目なる箇條を除かんことを望み、維新以來、政府はしばしば諸外國に談判して、熱心に之が改正をはかりたり。されど其の同意を得ること容易ならざりき。然るに其の後、憲法を布き議會を開き、法律・制度おひおひに整ひしかば、外務大臣陸奧宗光まづ英國に談判して、改正條約の同意を得たり。これ實に二十七八年戰役のまさに始まらんとする時なりき。ついで此の戰勝にて我が國の實力大いにあらはれたれば、他の諸外國も皆つゞいて改正に同意したり。

此の改正條約は三十二年に至りて始めて行はれ、外國人もすべて、我が裁判に服することとなり、又其の後の改正によりて、輸入品に對する稅も、我が國にて自由に定め得ることとなれり。かくて國民多年の望はじめて達せられたり。

同じく　明治天皇中の

六　明治三十七八年戰役

ロシヤ・ドイツ・フランスの三國は、さきに我が國にすゝめて遼東半島をかへさしめたりしが、其の後おの〳〵清國に求むるところあり。中にもドイツは膠州灣を借受け、露國は旅順・大連等の地を借受けたり。されば清國人の中には、外人をいみ嫌ふもの多く、遂に義和團と稱する暴徒起りて、キリスト教の會堂を燒き、宣教師等を殺せしが、明治三十三年には官兵もまた之に加はりて、北京の各國公使館を圍むに至れり。よりて我が國をはじめ各國の軍相聯合し、北京に攻入りて之を救へり。こゝに於て清國は、暴徒を罪し償金を列國に出して和を結びたり。世に之を北清事變といふ。此の役、我が軍の功績殊に多く、將卒の勇武にして規律正しきことも、列國の軍にぬきんでたりき。

此の事變に當り、露國はしきりに兵を滿洲に送りて之を占領し、更に進みて韓國をも威壓せんとする勢を示せり。よりて我が國は、清・韓兩國の領土を全くし、東洋の平和を保たんが爲に、英國と同盟を

結べり。其の後我が政府は、また東洋の平和につき、しば〳〵露國と談判を試みたるに、露國は之に應ぜざるのみならず、かへつて旅順の備を堅くし、ます〳〵海陸の兵を增して、少しも誠意を示さざりしかば、三十七年二月、我が國はやむを得ず國交を絕ち、天皇やがて宣戰の詔を下したまへり。

我が陸軍は、ロシヤ兵を韓國より追ひ、進みて滿洲の野に轉戰したりしが、諸軍相ついで北進し、戰線ます〳〵ひろがるに及びて、天皇陛下は陸軍大將大山巖を總司令官として、滿洲の諸軍を統べしめたまふ。時に敵の總司令官クロパトキンは、全力をつくして遼陽を守りしが、我が軍急に攻破りて、之を占領せり。敵は奉天に走り、本國よりの援兵を合はせて再び南下せしを、我が軍また沙河にむかへ擊ち、激戰の後大いに之を破れり。

我が海軍は、しば〳〵旅順を攻擊して敵艦に損害を與へ、又其の出動を遮らんが爲に、決死隊を募りて、三度港口の閉塞を試み、海軍少佐廣瀨武夫等諸勇士の働によりて、ほゞ目的を達したり。然るに敵艦は、大擧して港外に逃れ出で、ウラヂヲストツク（浦潮斯德）に走らんとせしを、我が艦隊黃海に追ひうちて大いに之を破り、ついで我が別艦隊も、ウラヂヲストツク艦隊を蔚山沖にうち破りしかば、海上また敵艦の影を見ざるに至れり。

又陸軍大將乃木希典は、陸軍を率ゐて旅順にせまり、海軍と力を合はせて、其の要塞を攻擊せり。旅順の要塞は、敵が難攻不落を以て世界にほこりし堅城なる上、敵將ステッセル固く守りしかば、容易に陷るゝこと能はず、されど我が忠勇なる將卒は、一死以て君恩にむくいんとし、幾度となく突擊を行ひて、やうやく二百三高地を占領し、港內にかくれゐたる軍艦を悉くうち沈め、他の砲臺をもつゞいて占領せしかば、ステッセル力つきて、翌三十八年一月、城を開きて降を請ふ。天皇は、ステッセルが其の國の爲に盡せし忠節を嘉して、武士の面目を保たしむべき御旨を傳へたまひ、城中の將校には、特に帶劍を許して、本國に歸ることを得せしめたり。

こゝに於て旅順の攻擊軍は、更に北上して滿洲軍に加り、總軍凡そ四十萬、進んで奉天の敵にせまる。敵將クロパトキンは、連敗の恥を此の一戰にてすゝがんとし、六十餘萬の大軍を率ゐて之にあたりしが、我が軍三面よりはさみ擊ちて大いに之を破り、三月十日遂に奉天を占領し、敵兵四萬餘を捕虜とするに至れり。

かゝる間に、露國は其の海軍の全力を擧げて、遙に東洋に廻航せしめ、五月二十七日、三十八隻より成る大艦隊いよ〳〵對馬海峽にあらはれたり。海軍大將東鄕平八郎は聯合艦隊四十餘隻を率ゐて之をむかへ擊ち、旗艦三笠に高く信號をかゝげていはく「皇國の興廢此の一戰にあり、各員一層奮勵努力せよ。」と。將士相見て勇み立ち必ず敵を全滅せんことを期せり。をりから風强く波高かりしが、我が軍奮戰して、遂に敵艦十九隻をうち沈め、五隻を捕へ、其の司令長官を虜にし、世界の海戰にかつて例なき大勝を得たり。ついで我が

別軍は、更に樺太に向ひ、たゞちに之をも占領せり。

戰役の大勢既に定まりたれば、アメリカ合衆國大統領ルーズベルトは、我が國と露國との間に入りて、講和をすゝめ來れり。我が政府は之に應じて、外務大臣小村壽太郎等を全權委員とし、露國の全權委員ウキツテ等と合衆國のポーツマスに會して談判せしめ、三十八年九月、遂に講和條約を結べり。これによりて、露國は樺太の南半部を我にさき、又長春・旅順間の鐵道及び清國より借受けたる旅順・大連等の關東州を我に讓れり。

これより海陸の諸軍はつゞいて凱旋し、天皇は伊勢に行幸して、御みづから神宮に平和の回復を告げたまへり。此の役、我が國が世界の强國と戰ひて、連戰連勝、大いに國威を海外にかゞやかしたるは、もとより天皇の御稜威によれりといへども、また教育あまねく國民に行きわたりて、奉公の念ます〳〵强く、擧國一致して、君國に盡したるが爲なり。

同じく　明治天皇中の

七　韓國併合

ポーツマス條約により、露國は我が國の韓國に於ける特別の權利をみとめたれば、我が政府は、韓國と協約を結びて、其の外交を取りあつかひ、之を我が保護國となして、京城に統監府を置き、伊藤博文統監に任ぜられ、次第に韓國の內政を改めたり。これ韓國が獨立の實を擧ぐること能はずして、常に他國の壓迫をうけ、東洋の平和を破るおそれありしが爲なり。

韓國は、我が保護の下にあること既に數年に及び、政治おひ〳〵に改りしが、其の國多年の弊政は全く除きがたく、民心なほ安からざるを以て、國利民福を進めんには、日・韓兩國を合はすの外なきこと次第に明かとなり、韓民中にも之を望むもの少からず。こゝに於て韓國皇帝は、統治の權を天皇に讓り、帝國の新政によりて、ます〳〵國民の幸福を增さんことを望まれ、天皇また其の必要をみとめたまひしかば、四十三年八月遂に韓國の併合を見るに至れり。天皇すなはち前の韓國皇帝を王となし、皇族の禮を以て王家を待遇したまひ、韓國を改めて朝鮮と稱し、新に總督を置きて、もろ〳〵の政務を統べしめたまへり。かくて半島の民は悉く帝國の臣民となり、東洋平和の基はいよ〳〵固くなれり。

これに先だち伊藤博文、統監をやめて滿洲に旅行せし折、ハルビンに於て兇徒に暗殺せられたり。博文は明治維新の前後より、專ら國家の爲に盡し、憲法の制定はもとより、韓國の統治にも大功を立てたりしに、俄に薨じたるは、實に惜しむべし。

第五十二　大正天皇（六頁）（挿繪二）

一　歐洲の大戰と我が國

大正三年七月歐洲に戰亂起り、ドイツ・オーストリヤ、ハンガリー（墺地利、洪牙利）はロシヤ・フランス・イギリスの諸國と戰を開きしが、後にはイタリヤ（伊太利）・アメリカ合衆國なども之に加り、遂に世界にかつてなき大戰となれり。

此の戰亂の起るや、ドイツは膠洲灣にても日夜戰備を修め、其の艦艇しきりに出沒して東洋の平和を危くせり。よりて我が國は、英國との同盟の好を重んじ、且東洋の平和を保たんが爲に、やむなく大正三年八月ドイツと國交を絕ち、天皇宣戰の詔を發したまへり。

こゝに於て我が海軍は、たゞちに膠洲灣を封鎖し、陸軍は背面より青島を攻撃せり。既にして我が軍、青島の要塞にせまるに及び、天皇の御旨を敵に傳へて、非戰鬪員を救ひ出したる後、海陸力を合せて總攻撃を行ひしに、さしも堅固を以てほこりし要塞も、十一月遂に陷り、敵軍悉く降れり。此の間に、我が艦隊の一部は、遠く南洋に至り、ドイツ領なるマーシャル・マリヤナ・カロリン諸島を占領して、敵艦の根據地をくつがへし、日の丸の國旗は南洋の島々にまでひるがへれり。

然るにドイツの艦艇、また印度洋、地中海等に於て、みだりに各國の商船をうち沈め、數多の良民をそこなひて、非常の振舞少からず。よりて我が艦隊は、遙に此の方面に派遣せられて、警戒・護衛の事に當り、種々の困難をしのぎて勇敢に働き、よく敵の暴行をおさへたり。

かくて大戰は五年の久しきにわたりしが、大正七年ドイツは遂に力つきて和を請へり。こゝに於て各國の全權委員は、佛國パリーに會して平和條件を議し、西園寺公望等の我が委員これに參列し英・米・佛・伊の諸國と共に、五大國の一として重なる會議にあづかりしが、翌年六月遂に平和條約成り、各國は國際聯盟の規約を結び、協力して世界の平和を完うせんことをはかれり。又此の平和條約により、我が國はドイツ領たりし南洋諸島を統治する委任を受くるに至れり。

大正十年アメリカ合衆國の主唱により、世界の重なる國々ワシントンに集りて、軍備制限に關する會議を開けり。我が國にても海軍大臣加藤友三郎等を使節としてこれに參列せしめ、英・米・佛・伊と共におの〳〵海軍軍備を制限することと定めたり。又此の會議に於て、日・英・米・佛の四國は太平洋方面に於ける各自の領地に關する權利を維持する目的を以て條約を結べり。これによりて日英同盟は廢止せられたり。

卷一六年級用

尋常小學地理書

卷二　六年級用

尋常小學地理書中、第一卷は北海道を除く內地の記事に充てられ、第二卷は北海道及び日本の各植民地、世界六大洲の記事、世界と日本との關係に關する記事及び地球の表面の總括的說明に充てられてゐる。下卷に屬するこれらの記事をその內容の上から分類すると左の如くである。

一、植民地に關する記事

	頁數	上下二卷中に占むる割合
第二　樺太地方	五・九	〇・〇一八強
第三　臺灣地方	一三・九	〇・〇四三弱
第四　朝鮮地方	一六・八	〇・〇五二弱
計	三六・六	〇・一一二強

二、滿洲、關東州、蒙古に關する記事

第五　關東州	四・一	〇・〇一二強
第七　アジヤ洲　(二)支那中の二項目		
滿洲	七・五	〇・〇二三強
蒙古	二・七	〇・〇〇八強
計	一四・二	〇・〇四四弱

三、國際關係に關する記事

第六　日本の總說	その一部分	
第七　アジヤ洲　(二)支那	その一部分	
第十三　世界と日本		
その頁數	合計	一二・〇
	その二卷中に占むる割合	〇・〇三七弱

四、世界及び外國事情に關する記事

第七　アジヤ洲	その大部分	
第八　ヨーロッパ洲		
第九　アフリカ洲		
第十　北アメリカ洲		
第十一　南アメリカ洲		
第十二　大洋洲		
地球の表面		八六・〇
その頁數合計		〇・二六四弱
その割合		

高等小學讀本

巻一 巻二 一年級用

巻三 巻四 巻五 巻六 二年級用

巻一 巻二 一年級用

一、植民地に關する記事なし

二、滿蒙關東州に關する記事なし

三、國際關係に關する記事……（二三）

巻二 第二十四課 福澤諭吉——その一部分

第二十八課 奉天附近の大會戰 一一・八

その頁數合計 〇・〇四四強

その歩合

四、世界及び外國事情に關する記事……（二五）

巻一 第七課 洞庭湖

第十二課 フエルヂナンド、マゼラン

第十八課 象 狩

第十九課 南洋の珍果

巻二 第十二課 エジプトの遺蹟

第十三課 マルコポーロ 三四・六

その頁數合計

その歩合 〇・一三〇弱

右各項の内容は次の如し

〔巻二〕 三

第二十四課 福澤諭吉 その一部（二頁）（挿繪一）

……

諭吉の江戸に出でたる年は、恰も幕府が諸外國と條約を結びたる時なりき。諭吉其の頃横濱に遊びて外人の店に到りしが、オランダ語にては全く用を辨ぜず、世界の言語中、イギリス語の最も廣く行はるゝことを聞きぬ。こゝに於て大いに發憤し、是より專らイギリス語の研究に沒頭したり。

是より先、幕府はオランダより一軍艦を購ひしが、萬延元年春、之をアメリカに遣はさんとす。諭吉、一行中の某氏に請うて其の從者となり、彼の地に渡りて、始めて文明國の實況を視察せり。歸國後、幕府の外國方に出仕し、翻譯の事を司りぬ。文久元年冬、幕府使節をヨーロッパに遣はすや、諭吉も命ぜられて行を共にし、フランス・イギリス・オランダ・ドイツ・ロシヤ・ポルトガル等の諸國を巡視せり。諭吉が後年著したる「西洋事情」といふ書は、此の巡視中に得たる知識によること多しといふ。

其の後、慶應三年、幕府事ありて再び使節をアメリカに遣はしたりしが、諭吉またこれに同行したり。……云々……

第二十八課　奉天附近の大會戰

（九・八頁）（插繪二）

露軍のクロパトキン大將は、此の一擧を以て日本軍を破り、遼陽・沙河敗戰の汚名をすゝがんと欲し、奉天に根據を定め、戰鬪員約三十萬九千六百人、大砲千二百十九門の大軍を擁し、其の後方に備へたる部隊を合すれば、總員五十萬、防備をさ〳〵怠なく、援軍の到るを待ちて攻擊に移らんとす。我が軍の之に對する戰鬪員は約二十四萬九千八百人、大砲九百九十二門にして、其の兵力彼に及ばずといへども、今度の一戰には必ず敵をして再び起つこと能はざらしめんと、大膽にして周密なる方策を定め、非常の覺悟を以て戰機の熟するを待てり。「敵味方共に此の大兵を擁して近く相對し、東は清河城附近より西は遼河に至るまで、山にわたり川を横ぎり、戰線約百六十キロメートルに及べり。時は二月の末つ方、堅氷河水を鎖し、寒風膚をつんざくといへども、勇氣勃々たる我が軍の將校・下士卒は、日夜敵壘に對して肉躍り血湧けり。

我の作戰計畫は、漸次に敵の兩翼に迫りて、其の退路を斷ち、以て之を全滅せんとするに在り。卽ち黒木・野津・奥三大將の率ゐたる各軍は、正面より敵を攻擊し、乃木大將の率ゐたる軍は、渾河・遼河の中間地域より進みて敵の右翼を包圍し、又川村大將は我が最右翼軍を率ゐ、是等の諸軍に先立ち撫順に向ひて運動を起し、以て敵の左側を包圍し、且つ其の兵力を此の方面に牽制し、全軍相依りて敵を奉天附近に壓せんとす。

戰機は愈々熟せり。明治三十八年二月二十三日、我が最右翼なる川村軍先づ活動を開始して清河城を抜き、進んで馬群鄂に迫り、又中央の各軍は沙河の陣地に在りて、徐に左右兩翼に於ける戰局の發展を待つ。初めクロパトキン大將は我が主力の中央に在るを認め、彼亦大軍を集めて之に當らしめ、且奥軍の左翼を攻擊して、漸次中央に及さんとし、既に二月二十五日を期して發動せんと企畫せり。然るに我が右翼軍の活動頗る猛烈なるを見るや、先に旅順より北進せし乃木大將の精鋭此の方面に向へりと信じ、急ぎ其の手裏及び西方右翼後に在りたる豫備隊の大部を左翼に移して、極力東面を防ぎ、奉天・鐵嶺間の背後連絡線を保護せんとせり。

我が最左翼たる乃木大將の軍は、時至れりと見て、渾河及び遼河の間に在る敵兵を一掃し、四方臺附近の敵を擊破し、天馬空を行くの勢を以て北進し、三月二日、突如として奉天の西方二十キロメートルなる沙嶺堡附近に現れたり。クロパトキン大將の驚知るべきなり。卽ち大將は、先づ其の手裏に殘りし豫備隊を擧げて乃木軍に當らしめ、更に右翼及び中央軍より精兵をぬきて之に加へたるも、遂に其の効なく、乃木軍の擊破する所となれり。

此の間、我が中央の各軍は猛然起ちて攻擊を始めしが、敵壘堅うして、惡戰苦鬪を重ぬること數日に及び、僅かに其の一部を奪取したるのみ。然れども此の攻擊は、川村軍の馬群鄂攻擊と相待ちて、敵の大部を此の方面に牽制し、乃木軍の迂回運動を容易ならしめたり。乃木軍が益〻敵の右側背に迂回するや、奥軍は敵の右翼を擊破しつゝ、遂次渾河の右岸に移りて之に連絡し、乃木軍は遂に奉天の西北方に出でて、將に敵の退路を斷たんとせり。こゝに於てクロパトキン大將は、乃木軍に向ひてしば〳〵大逆襲を試みたるも、悉く其の効なきがため、やむを得ず令を諸軍に傳へ、七日夜沙河の陣地を棄てゝ、渾河の豫定陣地に據らしめ、更に大兵を奉天の西北方に集めて、再び乃木軍を擊破せんと企てたり。」之と同時に、我が滿洲軍總司令官大山元帥は總追擊の命令を發し、全軍一せいに猛進す。川村軍は馬群鄂附近の敵陣地を奪ひ、破竹の勢を以て撫順に迫り、黒木・野津の兩軍は沙河の敵陣地を拔きたる後、直ちに敵を窮追して撫順・奉天間に於ける渾河の線に到り、奥軍は奉天の西方に迫り、乃木軍は奉天の北方に出でて敵の退路をおびやかし、遂にクロパトキン大將をして其の最後の企圖をなげうたしめたるのみならず、我が中央の軍は晝尚暗き風塵に乘じて、九日渾河を渡り、其の右岸の敵陣地を分斷せり。クロパトキン大將が本國に向つて「余は包圍せられたり。」との電報を發したるは、けだし此の時なるべし。斯くて十日に至り、川村軍及び黒木軍の一部は協力して撫順附近を攻略し、又黒木軍の主力及び野津軍は敵を追ひて奉天の東北方に突進し、息をもつがせず砲火をあびせたれば、敵は全軍潰亂して鐵嶺方面に敗走せしが、其の一部は奉天附近に於て我が軍のために全く包圍せられ、混戰翌十一日に及び、伏屍累々として山野に充滿し、途を失して捕虜となる者、力盡きて軍門に降る者、其の數を知らず。

敵はかねて鐵嶺附近に據り再抵抗を行ふ計畫にて、堅固なる防禦工事を施したりしが、我が軍の神速なる追擊の爲、據守する暇もなく、鐵嶺の東北約二百四十キロメートルなる公主嶺の邊に逃走せり。斯くて三月十六日を以て、黒木軍及び野津軍の一部は鐵嶺を占領し、川村軍は興京を陷れ、乃木軍の騎馬は更に開原・昌圖地方に進入したれば、南滿洲の山野また敵の隻影を留めず。奉天附近の大會戰こゝに全く終りを告げぬ。

此の役や、戰鬪を繼續すること半月を超え、敵の失ふ所死傷約六万百人失踪約二万九千三百人、捕虜二萬一千八百人、大砲四十八門及び軍旗の外、小銃・彈藥・輜重車輛等の遺棄枚擧に暇あらず。實に有史以來未曾有の大戰・長戰・激戰にして、日本海々戰と共に古來稀なる大勝なりき。

四

〔卷一〕

第七課　洞庭湖

（四・二頁）（插繪一）

洞庭湖は支那湖南省の北部に横たはる大湖で、我が國人にも昔から

其の名はよく知られてゐる。さうして有名な岳陽樓の記などによつて、我々は一望千里大洋の如き風光を想像してゐる。なるほど大きいには違ひないが、此の湖は季節の移り變るに隨ひ、水量が著しく增減するので、水面の廣さに非常な變化を生ずる。

試みに冬の洞庭湖を見ると、それは一望無邊の干潟とでもいつたらよからうか、其の間を水やせた沅江、湘江其の他の諸川が流れて、僅かに往き來の船に路を開いてゐる。處々に小さい湖程の水たまりはあるが、はてしも知らぬ漫々たる湖水は遂に見ることが出來ない。これでは洞庭湖といふよりは、むしろ洞庭原といつた方が適切であるかも知れぬ。

ところで嚴冬一度去つて、揚子江水原地方の雪や氷が解け、江水がだん〳〵增して來ると、其の水の一部は湖の北方、太平・藕池等の運河を通じて南に流れ、四五月頃には、既に湖中諸川の水が兩岸を越えて廣がり、どうやら一帶が湖らしくなつて來る。更に晩春から初夏にかけて降り續く雨に、揚子江はいやが上にもみなぎり、湖南の諸川も亦增水して此の湖に注ぐので、七八月頃には、かの茫々たる洞庭原は洲も川も水たまりも悉く一面の水中に沒して、こゝに漫々たる大湖水を現出する。

かういふ風であるから、湖面の廣さは常に一定してゐない。水量が數尺增すと湖の水は數里の外に廣がり、數尺へると十數方里の土地が現れる。增水期中には東西・南北ともに二十五里といつてゐるが勿論大體の數字に過ぎない。增水中でも深さは一般に淺く、諸川の水路をなしてゐる處だけがやゝ深いので、船はそれをたどつて航行する。若しだん〳〵減水する秋の頃、過つて船を淺瀨に乘上げたら、それこそ大變である。下さうとしてゐる間に水は一刻々々と減じて、船の乘上げた淺瀨は陸地となり、忽ち丘となつてしまふ。船は進退きはまつて、其のまゝ來年の增水期を待たねばならない。かういふ船を冬季水かれて後に見ると、三四十尺の高地に安閑として横たはつてゐる。

洞庭湖は、實に揚子江の急激な變化を緩和する一大貯水槽である。江水が一時增加すると、其の水の一部を此の湖が收め、充滿するに及んで、徐々に元の揚子江に吐出す。若し此の湖が無かつたら、揚子江沿岸に於て年々起る洪水は更に急激におそつて來て、一層大なる損害を與へるであらう。天然のたくみもこゝに至れば甚だ巧妙といふべきではないか。

第十二課　フェルヂナンド、マゼラン

（九・二頁）（挿繪一）

今から四百年ばかり前、ヨーロッパ諸國には航海熱が盛になつて、新航路の發見や新陸地の探檢を試みる者が多かつた。ポルトガルの人フェルヂナンド、マゼランも其の一人で、世界周航の最初の偉業は實に彼によつて企てられたのであつた。

マゼランの生れた年は詳かでないが、西曆千四百八十年頃といはれてゐる。大膽で進取の氣象に富んでゐた彼は、時代の機運に動かされて、航海には深い趣味を持つてゐた。さうして若い頃から遠く印度やマライ附近の島々に航して、幾多の辛酸をなめ、實地の經驗を積んだので、航海に對する自信は非常に强かつた。

マゼランはかねて大西洋を西へ進んで、南洋のモルッカ諸島に出る航路を發見したいと望んでゐた。しかしポルトガルに於ては此の希望を實現することが出來なかつたので、隣國イスパニヤへ行き、時の王チヤールス五世を說いて、遂に其の贊助を得た。

そこで彼は先づ大小五隻の船を用意した。次に乘組員の募集を始めたが、斯ういふ命がけの大冒險に參加しようとする者は殆どない。いろ〳〵骨を折つた結果、イスパニヤ・ポルトガル兩國人を主として、二百三十餘名の乘組員をやうやく集めることが出來た。

總べての用意を整へていよ〳〵大航海の途に上つたのは、コロンブスの新大陸發見後二十七年の千五百十九年九月二十日であつた。一行はカナリヤ諸島を經、しばらくアフリカの西岸に沿うて南下し、それから方向を南西に轉じて、大西洋橫斷にかゝつた。洋々たる希望に胸ををどらせながら、前途の幸福を祈つてゐたマゼランの前に、そろ〳〵不幸が頭を持上げて來た。當時航海に從事した船員には、一體に兇暴無賴の徒が多かつたが、殊に此の時は數國の人々を集めたために、やゝもすると互に反感をいだき、不和を生じ易かつた。

船は皆百トン前後のものである。しかも大西洋には荒狂ふ風、逆卷く波があり、身を切るやうな寒さがあつた。是等の强敵と戰ふ乘組員は、疲れるにつれて、けんくわは始める、不平はいふ、船內の秩序は日數の重るに隨つてだん〳〵亂れて來た。或船長の如きは、まのあたりマゼランを非難するに至つた。マゼランは見せしめのため斷呼として其の不都合を責めて、船室に幽閉した。此の勢に恐れてか、不平の徒は聲をひそめて、大事には至らなかつた。

一行は風波と戰ひつゝも遂に大西洋を乘切つて、ブラジルの東岸に着いた。それから南下して、翌年三月にサン、ジュリヤン港にはいつたが、ちやうど南半球の冬が近づいたから、其處で冬を過すことにした。此の港の附近は荒涼たる不毛の地であつたから、食料を得る便宜がなかつた。そこでマゼランは乘組員の日々の食物に制限を加へた。これがために積り積つた部下の不平は遂に爆發した。

各船內には不穩の氣がみなぎつて、マゼランの身に危險が迫つた。若し此の上航海を續けたら、部下のために殺されるかも知れない。しかし剛毅なマゼランは、これくらゐのことで意志をまげる人ではなかつた。彼は各船長と協議して、事を穩便にをさめようとしたが、かへつて三人までも彼に對して反旗をひるがへした。マゼランは尋常の手段では事がをさまらないと見て、二船長を死刑に處し、一船長を陸上に追放して、秩序の回復を計り、同年八月再び出發した。南へ〳〵と進む中、十月二十一日はからずも一の海峽にはいつた。

白雪をいたゞいた山々を兩岸に望みながら進むこと三十八日、海峽は急に開けて、前面に見渡す限りはてしなき大洋が現れた。途中一隻の船は難破し、一隻は謀反を起して本國へ引返したが、マゼランはそれ等の不幸も打忘れて、飛立つばかりに喜んだ。此の海峽はマゼランの名譽を永く傳へるために、後の人がマゼラン海峽と名づけた。

永く風波に苦しめられた後、一度海峽を出ると、波は靜かに、風は和らいで、如何にも平和の氣に滿ちてゐた。マゼランは此の太洋を橫斷する間波風に苦しめられることがなかつたので、平和な海といふ意味で太平洋と名づけた。

太平洋航行中一行を非常に苦しめたものは、食料の缺乏であつた。貯へた食料はだん〳〵へる。進んでも〳〵陸は見えない。甲板の一部を張つた牛の皮、船倉のねづみ、食へさうなものは何でも食ふといふ悲慘な有樣で、弱り果てゝたふれる者が多かつた。

全く陸を見ないこと九十八日、千五百二十一年三月六日、一行はやうやく一群島を發見した。其處に碇泊してゐる中、土人にボートや船具を盜まれたので、マゼランは此處をどろぼう群島と名づけた。これが今我が國の委任統治に歸してゐるマリヤナ群島である。

それから尙も西航して、程なく今のフィリピン群島に着いた。此處では食料も十分に得られたので、疲れきつた一行は、久しぶりにゆつくり保養することが出來た。

マゼランはフィリピン諸島の征服に取りかかつたが、餘りに功を急ぎ、自分の力を賴み過ぎた爲に、多くの部下を失ひ、自分も遂に土人の爲に殺された。それは千五百二十一年の四月二十七日のことであつた。

一行はボルネオを經て、かねてマゼランが目ざしてゐたモルッカ諸島に出た。使用にたへる船は唯一隻となつたので、殘つた乘組員をこれに集め、セバスチヤン、デル、カノーが指揮して本國へ向つた。

印度洋を橫ぎり、喜望峰を廻つて、長い〳〵航海を續ける間にも、病氣でたふれる者が少くなかつた。斯うして千五百二十二年九月六日、世界周航の最初の名譽を負うて故國に歸つたのは、僅か十八人に過ぎなかつた。地球の圓いといふことの證明せられたのも、此の航海の賜物である。

第十八課　象　狩（四頁）

印度のセーロン島で土人が象狩をする方法は、頗るおもしろい。先づ象の居る森林を選び、其の近處の立木を其のまゝ柱にして、大きな柵を造る。最も大きな柵になると、周圍數マイルにわたることもある。其の一處には狹い入口をあけて置く。柵が出來上ると、大勢の土人がてんでにたいまつを振りながら、象の群を遠卷にして、だん〳〵と柵の方へ狩りたてる。象の群はたいまつの光を見て、驚いて逃出す。さうしてだん〳〵柵に近づいて來ると、竿や槍を持つて

ゐる土人が、一せいに喊聲を揚げて、竿でそこらあたりをたゝいたり、槍を振つたりする。象の群は益〻驚きうろたへて、何處かに逃口は無いかと探し廻る。そこへ幸ひ柵の間に一處すき間があるので象の群は好い逃口だと思つて、恐しい勢で皆其の中にかけ込む。ところが逃口と思つたのは、土人がかねてあけて置いた柵の入口である。象の群がすつかりかけ込むと、土人は其の入口を閉ぢる。象はまんまと土人の計畧に乘つたのである。これから土人は、此の柵に閉ぢこめた象を一匹づつ外へ誘ひ出すのであるが、それには四五匹の馴れた象ををとりに使ふ。其の象は土人がかつて之と同じ方法で捕らへて、よく飼馴したものである。

さて馴れた象が柵の中の象を一匹誘ひ出すと、土人は直に入口を閉ぢる。誘ひ出された象は逃げようと思つてあばれ出す。それを馴れた象が四方から取卷いて、長い鼻で其の象の體を輕くたゝいて、いろ〳〵となぐさめる。それで其の象はだん〳〵靜かになつて、優しい親切らしい同族と一しよに歩くやうになる。土人は其の後をつけて行つて、大きな木の下まで行くと、不意に丈夫な繩を象の足に投げかけて、木にくゝり附けてしまふ。馴れた象はまた柵の中に居る他の象を誘ひに行く。くゝられた象は之を見て、後を慕つてしきりにあせる。けれども行くことが出來ないので大聲にうなつて、大きな木も根こぎにされるかと思ふ程にあばれ廻る。其の時土人は、象の好きな椰子や木の葉などを持つて來て食はさうとする。象は初の中はそれをはね飛ばしたり、ふみにじつたりして、なか〳〵食はうとしないが、腹のへつて來るのにたまりかねて、そこらに散らばつてゐる物を一つ食ひ二つ食ひ、遂には土人が皿に盛つて來る物までも喜んで食ふやうになる。

斯うして四五日もたつ中には、象はだん〳〵おとなしくなつて、飼主の命令に從つて、いろ〳〵の仕事をするやうになり、後には又をとりの役をも務めるやうになる。

第十九課　南洋の珍果（六・五頁）（插繪二）

午前の中に日本領事館をおとづれて、何かと用事を濟ました。

ホテルの晝食にはまだ大分間がある。此のひまに少しバタビヤの町を見物して、歸路南洋の珍果マンゴスチーンを買ひたいと言へば、案內者のジョンは委細承知と馭者臺に飛上つた。

馬車は快く南國の陽光の下を走る。さすがにジヤワは美しい處だ。綠濃き熱帶植物の木立の間に、白壁の洋館が凉しげに見える。

コーニングス、プレーンといふ廣々とした芝原を一周し、木立物古りたるウイルレム小路を拔けると、眼界は再び開けて、ウォーターロー、プレーンといふ公園に出る。中央には高さ五六丈もあらうと見える白色の圓柱の上に、大きな獅子像が立つてゐる。ジヤワの政廳は此の公園の東にある。

馬車は北に走つて、支那人町を通り拔け、古風な城門のほとりに着

く。此處が果物市場である。ジョンが馬車から飛下りて、いろ〳〵商人と交渉して、幾籠かの果物を買集める。自分も側からあれもこれもと手を出す。

ホテルへ歸ると、食事にはまだ三十分程もあるので、早速マゴスチーンの征伐にかかつた。大きさは蜜柑ぐらゐ。黑みがちの紫色をした厚い殻をナイフで切廻して、すぽつと二つに開くと、純白な美しい肉が現れる。之をフォークの先でそつと引上げると、蜜柑のふさのやうに抱合つた六個の白肉が、そのまゝそつくり出て來る。之を舌に載せると、あたかも春の淡雪のやうにすぐ解け去つて、唯芳香のみが殘るやうに感じられる。味は林檎に似てしかも非常に甘く、舌ざはりはさながらアイスクリームのやうである。思ふにマンゴスチーンは造化が其の巧を凝らして、萬果の粹を此一果に集めたものであらう。しかし此の實は、枝を離れて一週間立たぬ間に、早くも白肉が褐色に變じて、くづれてしまふ。かつて英國の汽船會社が、船長に賞を懸けて、一籠のマンゴスチーンをビクトリヤ女帝の食膳に奉らうとしたが、遂に誰一人成功しなかつたといふ。近頃冷藏庫に入れて遠地に送るが、やはり香味を失つてしまふ。罐詰にしては到底香味の萬分の一をも保たないといふことである。

晝食後部屋に歸つてしばらく休んでゐると、何とも言はれぬ惡臭が鼻をついて來る。何だらうと考へて見てもわからない。すると廊下の方で、かちりとナイフの音がする。戸をあけて見ると、ジョンがドリヤンの實を割つてゐる。少し離れて、土人のボーイがほしそうな顏をして立つてゐる。

マンゴスチーンを果物の女王とすれば、ドリヤンは果物の惡魔である。腐つた卵のやうな惡臭、とげのあるにく〳〵しい外皮、それでゐて其の特殊な味は、食ひなれた人を非常に誘惑する。大きさは子供の頭ぐらゐ、暗黃色を帶びた外皮は木の皮のやうに堅く、之に太いとげが密生してゐる。高さ數十尺の樹上に生じ、往々通行人に落ちかゝつて大けがをさせることがある。しかも木からもぎ取つては未熟であり、落ちてゐるを拾つては腐敗のおそれがあるから、土人は終日終夜樹下に居て、實の落ちて來るのを待つてゐるといふ話である。

今ジョンが割つたドリヤンの實を見ると、その中に不規則な幾つものかたまりがあつて、其の一つ〳〵がどろ〳〵して黃色いクリームのやうである。其の濃厚な味は、マンゴスチーンの淡泊上品と全く正反對であるが、食ひなれると、其の惡臭などは少しも氣にならぬのみか、かへつてマンゴスチーン以上に好むやうになるといふ。ドリヤンの出盛頃になると、土人は之をむさぼり食はんがため、往々家業を捨てて顧みないといふことである。

（鶴見祐輔「南洋遊記」ニ據ル）

〔巻二〕

第十二課　エジプトの遺蹟（四・七頁）（挿繪三）

エジプトは五千年の昔に於て、つとに文化の發達著しく、國勢頗る盛なりしが、其の後しば〳〵外國の侵略をかうむりて、興亡幾變遷、當時の都市は悉く荒廢に歸したり。然れども今尚沙漠の間に存する遺蹟を見れば、其の規模の大なる、實に人目を驚かしむるに足るものあり。今其の最も著名なるもの、二三を記さん。

エジプト國現時の首府カイロ市の附近に至れば、處々に雲をしのぎてそびゆる三角塔を見るべし。これ卽ち有名なるピラミットなり。何れも巨石を積重ねて造りたるものにて、如何にして之を積上げたるかは、今日尚建築學者の疑問とする所なり。其の最も壯大なるものは、高さ百四十七メートル、底面の一邊長さ各約二百三十メートル、底面積約五萬三千平方メートルの廣さに達せり。或史家の說によれば、此の巨大なる塔を建つるには、每年洪水の季節三箇月間十萬人の人夫を使役して、二十年餘の長年月を要したるなりといふ。

ピラミットは國王及び王族の墳墓にして、內部に室房あり、壯大なる石棺を安置せり。此の石棺中には、數千年の星霜を經て尚朽ちざるミイラあり。

オベリスクは宮殿・寺院等の門前に建てたる石碑なり。細長き四角の柱にして、其上部は尖端に終り、高きものは三十メートルを超ゆ。皆一本の石にて、多くは花崗岩を用ひ、鏡の如く磨きたる四面には、エジプト特有の文字を彫刻せり。總べて國家の大事、英雄の偉績等を傳ふるために建設せるものなるを以て、エジプト太古の歷史を研究するに最も必要なるものなり。

エジプト文字の研究は早くより試みられたれども、十分に讀解くこと能はざりしが、西曆一千七百九十九年、三樣の文字にて彫刻せる石を發見せしに、其の一はギリシヤ文字なりしを以て、之と對照して始めて讀得るに至れり。

體と四肢とは獅子をかたどり、頭部は人の形を具へたる異樣なる大石像あり。之をスフィンクスと稱す。其の大なるものは、頭部のみにても十メートルに及べり。一對づつ相向ひて列をなすを常とす。けだし宮殿・寺院・墳墓等の裝飾物なるべし。大ピラミットの近傍にあるもの殊に雄大なり。是等のスフィンクス中には、吹寄せられたる砂中に埋沒して、今は唯頭部のみ現れたるものあり。

第十三課　マルコ、ポーロ（六頁）（挿繪一）

コロンブスのアメリカ發見は、世界の歷史上に一時代を劃したる大事業なり。彼が此の大事業を成就するに至れるは、實にマルコ、ポーロの東方見聞記を讀みて、富源を東洋に開くの志を志したるによる。東方見聞記は、諸國の語に飜譯せられて今も世に傳はり、歷史

家の尊重する史料たり。いざやこゝに、マルコ、ポーロの事蹟の大要を語りて、其の貴重なる旅行記の由來を述べん。

第十三世紀の中頃、イタリヤのベニスの寶石商ニコロ、ポーロ・マフェオ、ポーロの兄弟は、行商の旅先より遠く支那に入りて、元の世祖忽必烈に謁見し、語るにヨーロッパ文明の大概を以てせり。忽必烈之を聞き、キリスト教の力によりて自國を開發せんと欲し、故國に歸りて宣教師を伴なひ來らんことを兩人に委囑せり。こゝに於て兄弟は國に歸り、二人の宣教師と、ニコロの子にして、當時十八歲の青年なりしマルコ、ポーロとを伴なひて、支那に向つて出發せしが、間もなく前途の危難の多きを恐れて、二人ながら途中より引返せり。これより兄弟・父子三人、遙々とペルシヤを横ぎり、中央アジヤを過ぎて支那に入り、ベニス出發以來四年の歲月を旅路に送りて、漸く元主に謁することを得たり。其の間、山に臥し沙漠に寢ね、或は重き風土病にをかさるるなど、辛苦つぶさに言ふべからず。

さてありし次　を物語りければ、忽必烈其の勞をねぎらひて、厚く之を待遇せり。三人の中マルコ殊に才幹あり、諸國の語に通じたりしかば、或は外國に使し、或は國務に參與して、頗る重用せられしが、支那に留ること十七年にして、三人共ベニスに歸りぬ。

故郷を出でて二十餘年、一度の音信もせず、今歸り來りても容貌・態度總べて變りはてたることなれば、死したるものとのみ思ひゐたりし親族・朋友は、其のポーロ父子・兄弟たることを信ぜず。よりて三人は一策を案じ、盛大なる宴會を開きて人々を招待せり。さて其の席上にて、旅中の服を人々の目前に持出して縫目を解き、中より數多の寶石を取出して卓上に並ぶるに、ルビー・サファイヤ・エメラルド・ダイヤモンドなど、燦然として目もくらまんばかりなり。これ皆忽必烈恩賜の品々にして、途中の危險を慮りて、斯くは衣服の中に縫込めたりしなり。三人は人々の大いに驚くを見て、事の次第をくはしく語り聞かせければ、人々漸く其の言を信じ、遂に爭つて其の談を聞くに至れりといふ。

マルコ等歸鄉の後、ベニスは商業上の競爭よりゼノアと戰端を開きしかば、マルコは艦長として出征せしが、戰敗れて捕虜となり、ゼノアの獄中に囚れたり。然るに大旅行家マルコの名は既に遠近に高かりしかば、其の談を聞かんとするもの續々として來訪せり。さればマルコは其の煩に堪へず、こゝに旅行記編述の事を思ひ立ち、たま〳〵同囚の中にありし一文學者に、昔の記憶を物語りて之を筆にせしめ、遂に一部の書を成すに至れり。これ實に有名なる東方見聞記なり。マルコ後ゆるされて故郷に歸り、天壽を全うして終れり。

東方見聞記には、當時全く東洋の事情に通ぜざりしヨーロッパ人を驚かしたる珍談奇說甚だ多し。又我が日本が、チパンの名を以て、此の書により始めて西洋に紹介せられしは、吾人にとりて最も興味多き事なりとす。マルコは日本を寶の國として記して曰く、

チパンは東海の一大島にして、大陸の海岸を去る一千五百マイル

巻三
巻四　二年級用

一、植民地に關する記事なし

二、滿蒙關東州に關する記事なし

三、國際關係に關する記事……（二四）

巻四　第六課　伊藤博文――その一部分

第十六課　ボアソナード君の歸國を送る詞

第二十四課　歐米の日本觀

その頁數合計　一〇・八

その歩合　〇・〇三七強

四、世界及び外國事情に關する記事……（二五）

巻四　第八課　萬里の長城

第十一課　ハツイ通信

第二十二課　世界の航路

第二十五課　ローマの舊都

第二十六課　大樹――その一部分

第二十八課　曾國藩

その頁數合計　三三・六

その歩合　〇・一一七強

右各項の內容は次の如し

――なほ巻三には採錄すべき記事なし――

三

〔巻四〕

第六課　伊藤博文　その一部分（三頁）（挿繪一）

博文年二十三、海外の事情を審にせんと欲し、井上馨等と相謀り、萬難を排して密かにイギリスに航せり。此の時長州藩にては、下關海峽を通過せる外國船を砲撃すること數回、各國聯合して其の罪を問はんとす。博文イギリスに在り、新聞を讀みて之を知り、馨と共に倉皇歸國し、直ちに各國公使に懇請して猶豫を求め、藩主に向つて具に攘夷の行ふべからざるを說き、辯論甚だ力む。然れども未だ藩論を一變するに至らざるに、聯合艦隊は下關を砲撃して、長州藩の兵大いに破られ、博文等の慘澹たる苦心も全く水泡に歸せしかば、高杉晉作及び馨等と力を講和に盡くして、能く其の局を結べり。是より後明治維新の大業成るに至るまで、博文は常に長州藩の爲に列國及び諸藩と應酬折衝の任に當り、隨つて內外の情勢に通ずること益々精しく、識見は年と共に高し。

維新の業成るや、博文は二十八才にして兵庫縣知事に拔擢せられ、次いで明治三年、貨幣制度及び銀行制度取調のためアメリカ合衆國に派遣せられ、翌年また岩倉大使の副使として歐米を巡遊し、歸朝後直ちに參議兼工部卿に任ぜらる。時に年僅かに三十三。累進の速なる多く其の比を見ず。……

明治二十七八年の戰役の際、博文は內閣總理大臣として、畫策宜しきを得、全權大臣として講和談判の衝に當り、下關條約を締結して帝國の國威を發揚せり。又明治三十七八年戰役に際して獻替盡瘁する所甚だ多く、既にして韓國の統監に任ぜられ、銳意韓國の指導啓發に當る。後日韓國併合の圓滿に遂行せられしは、博文が用意周到なる施政の功に基づくもの多し。……

明治四十二年十月、六十九歲の老軀を以て滿洲視察の途に上りしが、二十六日ハルビンに於て兇漢に狙撃せられ、光輝赫々たる一生は其の終を告げぬ。凶報の一たび傳はるや、內外各地よりの弔電雨の如く至り、東西の新聞は筆を揃へて生前の勳功を稱へたり。……

第十六課　ボアソナード君の歸國を送る詞（三・三頁）（挿繪一）

一日朝早く、余はボアソナード君を永田町の家に訪ひたりしに、君は例の如く文机によりて、餘念なく法條を起草しをられたるが、其の顏色疲れて常ならず覺えければ、「病やある。」と問ひしに、「病は斯くなん。」とて、其の脚を示されたり。見れば二つの脚共に水色になりてはれ太りたり。余は「何故に靜かに養生し給はざるか。」と問へば、「司法大臣と約束ありて、某の日までに若干箇條を起草し終へざるべからず。此の義務は病によりて背く能はず。」と答へられたり。余且は驚き且はおぼつかなく思ひて、山田司法大臣の邸に至り、此の由を告げけるに、司法大臣も共に驚かれ、卽ち秘書官栗塚君を遣り、君を訪問せしめて、速に轉地療養あらんことを勸められけり。君は約束當事者の命を受けて、始めて心おきなく田舍に轉地せられたり。

余は此の時家に歸りて、密かに歎息して思へらく、「凡そ司ある人々にして、斯くまでに深き義務心を伴なへる勉强を以ていそしみたらんには、立法事業並びに諸般の事の擧らざることやあるべき。」と。此の事一小件なれども、余は將來ボアソナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價値ありと信ずるがために、別に臨みて之を公衆の前に述ぶ。君二十年間の立法上の功績の如きは、他の諸君の演說に讓りてこゝに多言せず。余は實にボアソナード君と二十年來の友なり。場合によりては我が師なり。さるを病を以て餞の席に臨むこと能はざるは、これぞ遺憾の極みなる。今書して君の旅行の安全を祝し、併せて左の詞を以て君を餞す。

余は君が曾て我が國を呼びて第二の本國といへりしことを記憶す。余輩は將來に遠く君を海のあなたに慕ひ望むと同時に君も亦長く第二の本國を忘れざることを知る。ボアソナード君よ、君の第二の本國が立法上及び諸般の事業に於て如何に發達するかを見て、幸に余輩の爲に必要なる注意と勸告とを怠ることなかれ。（井上毅「梧陰存稿」ニ據ル）

四

〔巻四〕

第二十四課　歐米人の日本人觀（四・五頁）

歐米の學者や旅行家の中で、著書や雜誌で我が國民に關する批評を公にしたものが少くない。其の觀察は精粗區々であり、中には當つてゐないものもあるが、左に揭げる諸點は各人大抵一致する所で、よく我が國民の長所と短所を指摘し得てゐるやうである。

日本人は身よりも家を愛し、家よりも更に國を愛する。故にたとへ一身を捨てても、家名を汚し、祖先を辱しめることを欲しない。實に君國の爲には命を鴻毛の輕きに比するのである。此の精神の表れる所、義俠心となつては、自ら進んで他人の難に赴き、榮辱の念となつては、一命を捨てても其の面目を完うしようとする。

しかしながらまた之がために一時の客氣に驅られて、前後の分別を忘れ、輕擧事を誤るが如きこともないではない。

日本人は親族故舊に厚く、一門の中に貧困・不具・癈疾の者があれば、進んで之を扶助し、鰥寡孤獨の者があれば、力めて之を救濟する。しかし此のために、やゝもすれば、自立自營の念に乏しく困窮に會へば、直ちに親近の者にたよるといふ弊があるを免れない。

危急存亡の場合に、公共の爲に自己の利益を犧牲にすることを辭さないのは、其の長所であるけれども、平素事のない時には、公共の事に對して冷淡なのは、其の短所といふべきである。自治團體の事務を少數の理事者の專斷に任せて、團體所屬の人々は之に關知しないことや、會社・銀行等の經營を少數の重役に委ねて、株主が無關心であることなどは、歐米人の頗る怪しむ所である。自分の權利をむやみに主張しない長所はあるが、又他人の權利を十分に尊重しない短所がある。多人數の集會に約束の時間を違へたり、商業の取引に契約を重んじなかつたりするやうなことは、つまり他人の權利を尊重しないからである。

敏捷で機智に富み、時に臨み變に應じて宜しきに處し、勇往邁進して勝を一擧に制するのは、最も得意とする所である。しかしながら耐久持重の根氣が乏しく、事業を經營するにしても、一度つまづけば意氣沮喪して、また起つことが出來ない風がある。

禮讓の心が厚く、坐作進退の禮儀作法は備つてゐるが、一般公衆に對する公德心は尙甚だ幼稚なやうである。

古人は「他人の石を以て玉をみがくべし。」と言つてゐるが、是等外國人の批評も傾聽に値する所が少くないであらう。將來我が國の發展を期するには、國民固有の長所を發揮すると共に、其の短所を補ふことに力めなければならない。我等日本人の最も著しい短所は七度倒れて八度起きる執着心の缺乏と、信用を重んずる道德心の缺乏とであらう。此の短所を去らなければ、世界列强の間に立つて、平和の競爭に打勝つことは困難であらう。

第八課　萬里の長城（三・五頁）（挿繪一）

萬里の長城は支那の北部にあり。東、山海關より起り、西嘉峪關に至る。其の間、高山を越え、深谷をわたり、廣原を横切りて、蜿蜒七百餘里に及ぶ。城壁の主なる處は、外面を煉瓦又は石にて疊み、内部を土にて埋む。高さ凡そ二丈五尺、厚さ一丈五尺、其の上は轝を並べて騎行することを得べし。六十間毎に方形の櫓あり。煉瓦にて造り、高さ五丈。城壁と櫓との上部には凹凸の胸壁を設けて、敵を射擊するに便せり。

今より二千數百年前、支那は戰國の世とて、諸侯分爭して天下亂麻の如し。北方の胡人此の機に乘じてしば〳〵内地に侵入せしかば、北部に位せる秦・趙・燕の三國は、各國境に長城を築きて、其の侵入を防げり。其の後秦王遂に諸國を一統して皇帝となるに及び、永く胡人侵入の患を絶たんとて、さきに秦・趙・燕の築きたる長城を修繕し、尙新に增築して、いはゆる萬里の長城を成せるなり。これがために使役せる人夫數十萬人、數歲の日子を費したりといへば、其の大工事なりしこと推して知るべし。今存するものは秦帝の造りしままのものにあらず、其の後幾度か修繕改築したるものなりといふ。秦帝の長城を築けるは、外敵の侵入するを防がんがためなりき。然

れども書物をやき、學者を坑にする等の暴攻擧げて數ふべからず。故に自ら始皇帝と稱して二世・三世、統を萬世に傳へんと期せしかども、死後未だいくばくならざるに、天下再び亂れ、僅か二世にして漢の世となれり。支那の詩人が、

知らず、禍の蕭牆の内に起るを。

虚しく築く、防胡萬里の城。

と歌ひたるが如く、外敵を防がんと欲して長城を築き、内部に禍亂のきざすを知らざりしこそ笑止なれ。金城鐵壁の守ありとも、政令下に行はれず、國民心服せずんば、國家の安寧は期し難かるべし。

いづくんぞ知らん、萬里連雲の勢。

及ばず、堯階三尺の高きに。

第十一課　ハワイ通信（九・三頁）（挿繪一）

拜啓先日は御懇書にあづかり有難く存候益〻御壯健の由折角御勉强祈上候私事も丈夫にて愉快に執務致し居り候間御安心なし下されたく候さて本日は御返事かた〳〵御參考までに當地の狀況の一班を申上ぐべく候

當ハワイがアメリカ合衆國の領土にて十餘の島より成立ちをる事は既に御承知の事と存候總面積は約六千五百平方マイル我が四國よりはやゝ小さきくらゐにて其の中ハワイ島が一番大きく次はマウイ島其の次はオアフ島に候小生が唯今在住致候ホノルルは此のオアフ島に在りハワイ第一の都會に候

ホノルルは我が横濱より三千四百海里アメリカ合衆國のサンフランシスコまでは二千百海里これ有り日米間航路の唯一の寄港地とて此の間を航行する船は殆ど立寄らざるなく航海者にとりてハワイは全く洋上のオアシスとも申すべき地に候

本島の人口は三十餘萬に候が其の内土人は其の一割にも足らず他はアメリカ人と各國の移住者とにて候我が國人は明治元年より移住し始め今日にては約十三萬外國人中最も多數を占居り候多くは農業勞働者にて甘蔗・パインアップル・コーヒーの栽培製糖等に從事致し居り候又漁業に從事するものも相當これあり此の方面はむしろ日本人の獨占とも申すべく候とにかく日本人が永年ハワイの產業の爲盡くしたる事は非常のものにて當地產業の發達は實に我が國人に負ふ所少からずと存候當地には斯く多數の同胞居住致し居り候事とて之を相手とする邦人商店の多きは勿論總領事館あり銀行あり其の他日本人學校百四十餘校邦字新聞社十數社神社寺院八十餘以て如何に日本人が當地に活動しつゝあるかを御推察願上候日常の生活に於ても衣服食料品等本國の品物を求むるに何一つ不自由とてはこれなく故鄉を離れて遠地に參り居る感は殆どこれなく候

當地はいはゆる熱帶圈内にある事とて何人も暑熱燒くが如き處と想像致候へども參りて見れば案外にて絶えず海風吹渡り殊に驟雨多きため存外凉しく氣溫は年中六十度より八十五度ぐらゐを上下し誠に

心地よく候學校の冬休に子供等が海水浴をするなどは日本にてはとても考へ及ばぬ事なるべく候斯様に氣候に變化少きため年中植物のよく繁茂するは驚くばかりにて當市の名のホノルルといふも「ゆたか」といふ意味なりと聞及び候當地に參りて海岸に立ち並ぶ椰子の並木の見事なるには誰しも先づ一驚致す處に候足一歩島内に入れば此の外南國特有の常磐木綠を滴らし其の下蔭には紅黄紫白色とりどりなる美花唉亂れ更に傍には累々たる果物のみのをるなど春とも夏とも秋とも申されぬ光景全くハワイは常春の國常夏の國常秋の國にて四季の最も良きところのみを集めし地とも申し得べく候殊におもしろきは四季の現象を一本の木にも見らるゝ事にて一方に若芽萠出でつゝある他方には綠葉茂り花美しき枝の陰には見事なる果物熟し居り候

當地が自然の惠に浴する事豐かなるは植物にのみ限り申さず動物にも羽毛美しき鳥類非常に多く處により野生の孔雀七面鳥などの居るも珍しく候反對に猛獸と申すものは殆ど居らず多からんと思はるゝ蛇の全く居らざるも意外に候

終に最も美しき天象の事を申し添く候當地が熱地の常として驟雨多き事は前に記し候が其の雨後の美觀は何とも申されず生ひ茂れる椰子の間より白雲ふはり〳〵と浮かぶと見れば七彩鮮かなる虹の二重にも三重にもかゝるなど内地にては想像も及ばぬ美しさに候殊に此の虹は晝のみに限らず夜も現れ夢のやうなる其の姿はさながらお伽噺の國に在る心地を致させ候又空氣清きため空も限なく澄みをる事當地の一特色にて何時も月色の美しき事日本の秋にも勝り候此の月を眺め彼の花に圍まれそよ〳〵と吹く涼風の中に居る心地を想像なし下されたく候

なほ此の外にもキラウエヤと申す火山の壯觀當地特有なる魚類の美しさ土人が傳ふる不可思議なる傳說など申上ぐべき事は數々これ有り候へどもそれ等は他日に讓り候太平洋上日米の接觸點たる當地の貿易上其の他より見て如何に重要なる地點なるかはこゝに說くまでもなき事と存候

とにかく當ハワイは煙波果なき太平洋上の一オアシス否人世に隔絕せる一別天地否々自然の恩惠豐かなる極樂世界とも申すべく小生は此の極樂中にありて毎日樂しく働きをる事を申し添へて筆をとゞめ申候　早々

年月日　　西田洋一

青山茂樣

第二十二課　世界の航路（七頁）（挿繪一）

始めて蒸氣力を用ひて大西洋を横ぎつた船は、僅か三四百トンの大きさのもので、早さも六七海里に過ぎなかつたが、其の後だん〳〵發達して、現今では實に六萬トンに近いものもあり、其の早さも增大して、平均一時間二十六海里を走るものさへあるやうになつた。

隨つて大西洋を横ぎるに、最初は二十數日を費したのが、次第に減じて十五日となり、十日となり、八日となり、今では四日半に短縮した。斯く其の早さが增したのみならず、其の設備の上にも非常な進歩を來して、完備した客船では、船室の設備が陸上のホテルと變るところがなく、其の上無線電信によつて、海陸通信の連絡を圖り、船中で新聞を發行して、日々の出來事を報導するまでに進んでゐる。

航路の延長は、商工業の發展に非常な關係のあるものであるから、各國は競つて自國商船の航行を奬勵し、特に補助金を附與するやうなことも少くない。現今航路の最も發達してゐるのは、歐米二大洲の間にある大西洋で、世界の海運國を以て任ずる諸國は、劇しい競爭をこゝに演じてゐる。しかし近時我が國を始め、太平洋沿岸諸國の著しく發達したこと、又パナマ運河が開通して、大西・太平兩洋の連絡がついたことなどのために、太平洋にも劇しい航路競爭が起り、今日では其の航路も非常な發達をした。今左に世界の航路中主要なものに就いて述べることとする。

大西洋の航路の中、北大西洋航路は、ヨーロッパ諸國、殊にイギリス・フランス・オランダ・ドイツ・ベルギー・イタリヤ等の主要港灣とアメリカ合衆國・カナダ等の主要港灣との間を往來するもので、世界船舶の二分の一は此處に集り、前に述べた最新式の大船巨船は、實に此の航路に用ひられてゐるのである。此の外、尚大西洋には、ヨーロッパと南アメリカを繋ぐ南大西洋航路がある。近年南アメリカの開發が俄に進んで、移民の招致、物資の輸出入が盛となつた結果、此の航路も亦次第に發達した。

ヨーロッパと東洋又はオーストラリヤを繋ぐ航路を印度洋航路といふ。此の航路は、ヨーロッパ諸國と東洋諸國及びオーストラリヤとの交通・貿易が近年盛になつたので、めざましい發達をした。此の航路に於ては、イギリスが最も優勢で、日本・フランスが之に次いでゐる。

太平洋航路の中主要なものは北太平洋横斷航路で、此の航路に使用せられる船舶は、北大西洋航路のものに比すると遜色はあるが、しかし中には船體も頗る大きく、早さも亦能く平均一時間二十海里に達し、優秀な設備を有してゐるものも少くない。此の航路に於て最も優勢なのは我が國で、アメリカ合衆國及びイギリスが之に次いでゐる。

我が國も近年大いに意を航海業の發達に注ぎ、遠洋及び近海に多くの航路を設けた。現に遠洋航路の主なるものには、歐洲航路・北米航路・南米航路・濠洲航路がある。歐洲航路は、横濱から上海・香港・シンガポール・コロンボ・マルセーユ・ロンドン等を經てアンベルスに行くもの。北米航路は、横濱からサンフランシスコに行くものとシヤトルに行くものがある。南米航路は西海岸線と東海岸線に分れ、前者は横濱からハワイのホノルル、サンフランシスコ、メキシコのマンサーニヨ等を經て、バルパライソに至り、後者は横濱からシン

ガボール・ケープタウン等を經てサントス・プエノスアイレスに行く。濠洲航路は横濱からマニラ・シドニー等を經てメルボルンに至る。イギリスは世界汽船總トン數の約三割を所有し、世界の諸港中イギリスの國旗のひるがへらない處はないと誇つてゐる。之に次ぐものはアメリカ合衆國であるが、第三位は卽ち我が國である。

第二十五課　ローマの舊都（七・四頁）（挿繪二）

ローマ帝國の最も盛大なりしは、第二世紀の頃にして、其の版圖はヨーロッパ・アジヤ・アフリカの三大洲にまたがり、首府ローマは四方の富を集めて、壯麗善美、萬世不朽の都府たるを誇れり。然るに北方諸民族の侵入漸く劇しきに及び、驕奢に染み榮華に醉ひて柔懦風を成せるローマ人は、其の勢を阻止すること能はず、西曆三百三十年、コンスタンチン帝は遂に都をビザンチンに遷すのやむなきに至れり。是より後、さしもの都城も蠻人の蹂躙する所となり、宮殿・堂宇其の他壯麗なる建造物は多くは破壞せられ、市民離散して年々其の數を減じたれば、いはゆる不朽の大都も何時しか荒廢の極に達せり。

今のローマ市の繁華なる街路及び王宮・諸官衙の在る處は、元のローマの邊隅にして、昔大厦高樓の櫛比せしあたり、今は唯荒廢寂寞の巷たるのみ。ローマに遊ぶ者をして深き感興を催さしむるは、車馬絡繹たる街路にあらずして、丘陵の上、郊野の間に寂しき影を留めたる廢墟殘壁なりとす。

ローマに遊びて先づ觀るべきはフォールムの跡なり。フォールムは丘陵に圍まれ、中央政府・議會・裁判所等總て此の大國を支配せし機關の在りし處にして、一千八百七十年、イタリヤ政府之が發掘を開始せしまで、約千五百年間は全く土中に埋沒したりき。丘陵の上より見下せば、三々五々並び立てる大圓柱の上に石梁の將に落ちんとして危く支へられたるあり、屋壁の崩れて石柱のみ空しくそびえたるあり。傾ける石階、覆りたる礎石、所在に雜然たり。

フォールムの東方に宏大なる楕圓形の建造物の半ば崩れたるを見るべし。これ卽ちコロセウムなり。古代ローマ人は勇猛なる行爲を好み、アジヤ・アフリカ等より獅子・虎・豹等の猛獸を集め來りて、奴隷をして之と格鬪せしめ、一般公衆をして之を見物せしめたり。コロセウムは卽ち其の格鬪場の稱なり。周圍五百二十五メートル、長徑二百十八メートル、高さ四十八メートルあり。優に四萬五千人を容るゝに足れり。其の落成式の際の興行は、百日の久しきにわたりて、五千頭の猛獸を殺せりといふ。毎年興行の始るや、國民は狂喜して四方より來觀せり。中世諸國より來りし巡禮者等は此の壯大なる建造物に驚きて、

「コロセウムの立てる限はとこしへにローマはあらん。コロセウムの崩れん時は諸共に都も絕えて跡なけん。ローマの市の亡びなば人の世界も共にまた。」

と歌へり。今や其の內部は悉く崩壞して、僅かに外壁の半ばを殘せるのみ。コロセウムを見るは月夜を最も良しとす。巨大なる周壁の一部は明光に照され、一部は暗黑に鎖され、各層幾百の窓漏る光を以て、縱橫上下に明暗の紋樣を織りなす壯觀、實に名狀すべからず。又驚くべきはカラカラ帝の浴場なり。古代ローマ人は入浴を好み、到る處に浴場を設けたりき。なかんづくカラカラ帝の造れる浴場は其の最も廣大なるものにて、千六百の浴席あり。浴室の外、圖書室・談話室・化粧室・游泳場・遊戲場・庭園等の設ありき。今は唯大理石もて張れる床の一部と其の周壁の一部とのみを存すれども、附近に散亂せる大理石の彫刻を以て見るも、室內の裝飾の如何に華美を盡くしたりしかを知るべし。

ローマの郊外カンパニヤの平原をアルバ山の方へ通ずる一條の廣き道路あり。昔は繁華なる街道にして、勝誇りたる猛將勇士の意氣揚々として、アジヤより、アフリカより、市民歡呼の聲に迎へられてここに凱旋せしなり。此の道と殆ど並行して、高架水道の殘礎あり。蜿蜒として原野をわたりて、遙かにアルバ山に向へり。其の壁の高き處は二十メートルに及ぶ。カラカラ帝の浴場も其の水を此の水道に仰ぎしなり。野邊の千草の霜枯れて、滿目蕭條たる時、アルバの山の端を出づる月の靜かに殘壘を照らすを見れば、誰か俯仰懷古の情を禁ぜんや。

第二十六課　大樹　その一部分（二・五頁）

……

其の挿繪といふのは、「銀の樅」と題して、グレーが自分の家の庭の大樹の下に立つてゐる寫眞である。其の樅の木は百二三十尺もあるであらうか、私は其の寫眞を見て、或莊嚴な感じに打たれた。千年の風雨に打たれた高い木が、すつくと青空にそびえてゐる姿を見ると、頭の下るやうな氣がする。子供の時から斯ういふ大樹の下に生ひ立つたから、グレーにはあのやうな悠揚迫らざる風格が出來てきたのだ。私はさう思つた。さうしてそよ風に搖れる低い落葉松の姿を寂しい心持で眺め渡した。斯ういふ木を毎日見てゐたのではだめだと思つた。

私はイギリスに遊ぶ毎に、一木能く森をなすやうな大きい樅の木を、汽車の窓から眺めて感歎する。あゝいふ樅の古木を眺めながら、イギリス人は生ひ立つてゐるのだ。私は又オランダのヘーグ郊外にある大森林の菩提樹とぶなの雄姿を忘れることは出來ない。イギリスに先立つて議院制度を世界に示したオランダ、あのヨーロッパの一角で、孤壘に據つて新敎と民權を擁護したオランダだけに、やはり大樹を保存し、讃美することを忘れない。パリー郊外のフォンテーヌブローの森も壯大だ。アメリカ合衆國ではニューイングランドの楡の木、蒼空に迫る老樹を打仰ぎながら、私はよく初代植民人の心

意氣を想望した。

北京の町では、雄大な槐の木が遊子の魂をとらへる。蘇東坡が三槐堂の文中に、王祐が大樹を庭に植ゑて、子孫に偉人の出ることを待つた心持を歌つて、「王城の東、晉公のいほりせるところ、欝々たる三槐、これ德の符。あゝ、よいかな」といつたのも同じ心であらう。

……云々……（「經濟隨想」所載鶴見裕輔ノ文ニ據ル）

第二十八課　曾國藩（三・九頁）（挿繪一）

清朝創業以來こゝに二百年、綱紀漸く緩みて內外多事、宣宗の末、遂にいはゆる長髮賊の亂起れり。

抑〻此の亂は、廣西の洪秀全といふ者、名をキリスト敎に假りて愚民を惑はし、之を煽動して事を起ししに始る。もと一地方の暴動に過ぎざりしも、官軍微力にして容易に之を平定すること能はざりき。宣宗沒して文宗立つに及び、新に將を派して力を征討に盡くさしめしが、賊勢漸く盛にして、遂に天下の大亂となり。

一代の英傑曾國藩の蹶起したるは、實に此の時なりき。國藩は湖南湘鄉の人、もと文官にして、軍事は其の職とする所にあらざりしが、たま〳〵親の喪にあひて鄉里に在るや、賊を討ずるの詔を受く。國藩慨然として志を決し、身を挺して征討の事に從ふ。すなはち鄉兵を募りて新に軍を組織し、又揚子江の上流に水軍を設け、水陸相應じて賊軍を掃蕩せんとす。

當時賊軍は既に揚子江をさかのぼり、武昌を拔き、九江を破り、沿江の郡縣悉く其の手中に歸せり。官軍死力を盡くして討伐に力むれども、蕩々たる洪水の如き賊勢を覆さんこと容易の業にあらず。國藩此の間に處してあらゆる艱難に堪へ、惡戰苦鬪十二年、穆宗の同治三年に至りて遂に賊亂を平定せり。

斯くて天下は平靜に歸したれども時勢は既に變じ、積弊漸く著れ、清朝の基礎危からんとす。國藩思へらく、此の時に際して斷然舊習を改め、國政の革新を行ふにあらずんば、再び內憂の起らんこと期して待つべきのみと。こゝに於て親しく穆宗に謁し、兵馬の權を收め、財政を整へ、官吏登庸の法を改むる等の議を奏上す。此の奏議は眞に時弊に適中せる卓見にして、若し穆宗之を容れ、改革を斷行せんか。清朝の運命は必ずや今日我等の見る所と異なるものありしならん。

彼又當時に於て、早くも歐米の新文明を採るの必要を知り、留學生を各國に派遣して、海外の文化を輸入し、西洋の方式にならひて新に造船・造兵の業を起せり。

國藩は斯くの如く武人として經世家として絕世の手腕と非凡の見識とを有せしのみならず、又學者として德行家として實に稀有の人物なりき。彼の部下より起りて名を一世にほしいまゝにせし人傑李鴻章が、彼を評して諸葛亮・司馬光に勝れりといへるも、溢美の言にはあらざるなり。

高等小學國史

上卷 下卷 一、二年級用

拔萃採錄の標準及び分類の規準は尋常小學國史の場合に同じ。

上卷に於ては、この種の國際關係に關する記事は、一七一頁中約二七・二頁、即ちその歩合は〇・一五九强に當る。

下卷に於ては、一七七頁中約七二頁、從つてその歩合は〇・四〇七弱に當る。

上下兩卷を通じて見れば、總頁數三四八頁中九九・二頁、從つてその歩合は約〇・二八强に當る。

その內容は次の如し。

〔上卷〕

第五　朝鮮半島の服屬と文物の傳來

（三・五頁）（挿繪一）

我が國と朝鮮半島との間には、交通はやくより開けたりしが、皇化のひろまるにしたがひて、ますます深き關係を生じたり。この頃半島の北部に高麗の國あり、南部には新羅・百濟・任那などの諸國ならび立てり。任那は新羅と百濟とにはさまれたる小國にして、新羅と爭ひて國內安からざりしにより崇神天皇の御代の末に、救を我が國に請へり。朝廷これを許し、將軍を遣はして鎭めしめたまふ。これ任那の日本府の起なり。ついで紀元八百六十年、神功皇后の新羅王を降したまふに及び、百濟・高麗の諸國もまた相ついで從ひしかば、これより我が國は、任那の日本府を中心として、これらの國々を治め、彼の貢船は相つづいて難波の津に來航せり。

これらの國々は、支那の學問・工藝を入れて、文物はやく開けたりしかば、我が國との往來しげくなるにつれ、次第にこれを傳へ來れり。第十五代應神天皇の御代に、百濟の博士王仁めされまゐりて、論語などの書籍を奉る。これ漢學の傳はりし始なり。皇子稚郎子は、王仁につきて漢學を修め、深くその義に通じたまひしかば、のち高麗より朝廷に奉りし書に、無禮なる辭ありしを見つけ、怒りてその

使を責めたまへりといふ。また阿知使主も、多くの人々を率ゐて歸化し、その子孫は、王仁の子孫と共に文氏といひて、代々朝廷につかへて記錄をつかさどれり。この後も、多くの學者半島より來りて、我が國の學問おひ〳〵に開けゆけり。

學問と共にもろ〳〵の工藝もまた傳はれり。同じく應神天皇の御代に、弓月君（ゆづきのきみ）數多の人々をつれて百濟より來り、もつぱら機織を業としたり。よりてその子孫を秦氏（はた）といふ。天皇はさらに使を支那に遣はして、機織・裁縫などに長ぜる女工を求めしめたまひ、ついで第十六代仁德天皇はまた秦氏を諸國にくばりて、ます〳〵この業の發達をはかりたまひしにより、第二十一代雄略天皇の御代に至り、絹布の產大いに殖えて、その貢物にはかに增加せり。殊に天皇は深く御心を產業にとゞめたまひ、農桑の神なる豐受大神を伊勢にまつらしめ、また皇后をして、御みづから桑をつみ蠶をかはしめ、支那より織縫の女工を召し、百濟より綿織の職工、陶工・畫工などをも招きたまひしかば、これより我が國の工藝いよ〳〵進歩せり。

第六　佛教の傳來と美術・工藝の發達

（一頁）（挿繪一）

中の一部分

漢學傳はりて、その仁義・忠孝の教はおのづから我が國俗にかなひ、また彼の工藝も、我が古來の技術と調和して、大いに文化の發達を助けしが、さらに佛教傳來して、社會にさま〴〵の影響を與ふるに至れり。

佛教はもと印度の釋迦牟尼のはじめたる宗教にして、支那をへて朝鮮に傳はりしが、紀元一千二百十二年第二十九代欽明天皇の御代に至り、百濟王使を遣はして佛像・經文などを朝庭に獻じ、盛に佛の功德を說けり。……中略……

佛教は過去・現在・未來の三世にわたりて、善惡のむくい絕えずめぐり來るものなりと教へて、大いに人心を動かしたり。また寺を建て佛像を造ることを功德として、しきりにこれをすゝめ、朝鮮半島よりは、建築・彫刻・繪畫などの技師多く渡來したれば、これらの技術いちじるしく進歩せり。……中略……また高麗の僧曇徵は、紙・墨・繪具の製法を傳へ、繪畫もすこぶる發達して、壁には佛畫を畫くことなど行はれ、……下略……

第七　支那との交通

（三・七頁）（挿繪二）

支那の文物は、多くは朝鮮半島をへて我が國に傳はりしが、推古天皇の御代に至り聖德太子は、支那と隣國の好を修め、直接にその文物を取入れんとして、小野妹子を彼の地に遣はしたまふ。この頃、支那は南北に分れて久しく亂れたりしを、隋これを統一して、勢はなはだ強く、他國を屬國の如くあつかひしが、太子は少しも恐るゝところなく、對等の禮を以て、國書を送りたまへり。されば隋主は

これを無禮なりとし、大いに怒りしも、我が意氣のさかんなるを見て翌年妹子とともなはせて、使を我に送れり。朝廷難波の津に新館を設けて、その使を優待し、ついでこれを宮廷に召し、百官みな金の華をかざせる冠をかうむり、綾・錦の禮服を着け、威儀を正したるうちに、天皇詔を賜ひて、國書を受けたまふ。やがてその使者の歸る時、太子は再び妹子を隋に遣はし、「東天皇敬みて西皇帝に白す。」との國書を送りて、對等の國交を結びたまひしかば、この後も彼との交は、つねにこの意氣を以てつゞきたりき。

妹子の再び隋におもむくに當り、歸化人の子孫なる高向玄理・南淵請安・僧旻など朝命を奉じ、留學生としてこれに從ひ行けり。ほどなく隋亡びしかど、玄理らはなほ留まりて、その文物・制度を學び、歸朝の後これを利用して、大いに我が國利民福を進めたり。

唐の隋に代りて起るや、第三十四代舒明天皇は、前にならひて使を唐に遣はしたまへり。これより遣唐使の往復次第にしげく、その制度もおひ〳〵に整へり。大使・副使以下の職員は、それ〴〵四艘の船に分乘し、萬里の風波をおかして彼の地に渡り、おほむねよく使命を果したるが、中には我が國をして、君子國の譽を得しめたるものもあり。また學生・僧侶の留學するものます〳〵多く、時には數百人にのぼりしことさへあり。いづれも熱心に彼の宗教・學藝を傳へしかば、ほとんど二百餘年の間、大陸の文物はしきりに輸入せられ、我が政治・風俗など、その影響を受けて大いに改れり。

第九　東北地方の開拓と朝鮮半島の離反

（二・六頁）

中の一部……

また朝鮮半島にては、かねてより諸國互に勢を爭ひて、とかく穩ならず。中にも新羅は、國力の強きをたのみ、常に貢を怠りて無禮のことのみ多く、遂に欽明天皇の御代に、任那を攻めて日本府を滅したり。よりて天皇將軍を遣はして、日本府を復せしめんとしたまひしに、かへつて新羅のために破らる。この時調伊企儺といふもの敵に捕はれしが、敵將しひて我が將を罵らしめんとす。然るに伊企儺大いに新羅王をあざけりしかば、たちまち斬殺さる。その妻大葉子もまた虜となり、悲しみにたへず、歌をよみていはく、

韓國の城の道に立ちて、大葉子は

領巾振らすも日本へ向きて。

と。將士これを聞きて惜しみいたまざるはなかりき。伊企儺は歸化人の子孫にして、忠烈なることかくの如く、その妻の眞心と共に、ながく傳へて美談とすべし。

欽明天皇は、任那の亡びたるを殘りをしくおぼしめし、遺詔してこれが再興をはからしめたまひしかば、歷代の天皇これにつとめたまひしも、遂に成らず。そののち新羅の勢ます〳〵強く、齊明天皇の御代に至り、唐の兵をかりて百濟を攻め、その王を降せり。百濟の

遣臣助を朝廷に請ひたれば、天皇はこれを許し、皇太子と共に筑前に下り、黒木の御所を朝倉に建てて軍事をすべたまふ。然るにまもなく天皇行宮に崩じたまひ、皇太子つぎて立ちたまふ。第三十八代天智天皇これなり。天皇阿曇比邏夫らを遣はして百濟を助けしめられしに、唐の海軍と戰ひて勝たず、百濟遂に亡び、ついで高麗もまた唐に滅されたり。それより新羅ひとり勢をふるひ、やがて百濟・高麗の地を合はせて半島を統一せり。

百濟の亡ぶるや、その遺民の我が國に歸化するもの少からざりしが、天皇はことごとくこれををさめて、位を授け田を賜ひて、いたはりたまふことあつかりき。また天皇は時勢にかんがみて半島との關係を絶ちたまひたれば、神功皇后このかた四百年にして、半島の地はまつたく我が國より離れたり。

第十一　奈良時代の學藝・風俗（二頁）（挿繪一）

中の一部……

この頃は、大學・國學の教育もますます進み、また唐との交通もしげくなりて、數多の留學生は、熱心に彼の地の文物を輸入したれば、我が國の學問大いに發達せり。當時の留學生の一人なる阿倍仲麻呂は、少年の身にて唐に渡り、久しく留まれる間に、彼の大家と詩文をとりかはして、文名をとどろかせり。のち歸朝せんとて、船に乘らんとせるをり、東の空にすみわたれる月をながめては、さすがに奈良の故郷のしたはしさにたへず、

天の原ふりさけ見れば、春日なる
三笠の山に出でし月かも。

との一首に、日頃の思をよせたり。然るに海上難風にあひて、志を果さず、再び唐の都に入り、高官につきて遂にその地に死せり。また仲麻呂と共に留學せし吉備眞備は、ひろく學問を修め、歸朝ののち朝廷につかへて、大學の教育を興し、大いに文化の開發につとめたり。されば官位次第に進みて右大臣にのぼり、吉備大臣の名は、ながく後の世に殘れり。

第十三　平安時代初期の發展（一・五頁）（挿繪二）

中の一部……

また佛教も、この頃より大いに改れり。奈良時代には、都の大寺互に勢力を爭ひ、我がまゝなる僧もありて弊害少からざりしかば、桓武天皇はこれを革新せんとして、最澄・空海の二名僧を選びて支那に遣はし、新しき佛教を研究せしめたまへり。最澄は近江の人にして、天皇の御ために比叡山に延曆寺を建てしが、勅を受けて唐に入り、天臺山にて學び、歸朝して天臺宗をひろめ、のち朝廷より傳教大師の諡を賜はる。空海は讃岐の人にして、最澄と共に唐に渡り、眞言宗をきはめて歸り、第五十二代嵯峨天皇の御時、紀伊の高野山に金剛峯寺を開きしが、また天皇より京都の東寺を賜はれり。のち

朝廷、諡を賜ひて弘法大師といふ。……下略……

第十五　朝臣の榮華と文化（一〇・五頁）

中の一部……

……平安時代の初には、唐との交通なほ行はれしが、宇多天皇の御代の頃は、唐國まつたく衰へて、内亂相つぎ、もはや學藝を求むることも益なきを以て、天皇は菅原道眞の意見を用ひて、遣唐使をとゞめたまへり。これより使節の派遣ながく絶えたれば、今まで盛なりし漢文學は次第に衰へ、これに代りて國文學の發達を見るに至れり。

第十八　平臣の驕奢（一〇・三頁）

中の一部……

……清盛は安藝の嚴島に壯麗なる社殿を建て、また攝津の兵庫港を修築して、海運の便をはかり、こゝに宋國と貿易を營みしことなどありき。宋とは、さきに唐に代りて支那を統一せし國なり。

第二十一　元　寇（五頁）（挿繪三）

秦時・時頼執權の頃は、國内太平なりしが、時頼の子時宗の代に至り、はからずも蒙古との交渉はじまりて、遂に未曾有の國難を來せり。蒙古は鎌倉時代の初、支那の北方に興りて、次第に勢を得、アジヤの西北地方を從へて、はるかに西の方ヨーロッパを侵し、その主忽必烈出づるに及びて、南は宋をおさへて、都を今の北京にさだめ、東は朝鮮半島に迫りて、高麗を屬國とせり。高麗とは、さきに新羅に代りて半島を統一せる國なり。

忽必烈は高麗を服したる勢を以て、我が國をも從へんとし、第九十代龜山天皇の文永五年、高麗王をへて、好を我に求め來れり。されどその國書には、我が天皇をば、單に日本國王と稱したてまつり、忽必烈みづからは大蒙古國皇帝と稱して、しきりにおのが威德をのべ、もし通好をこばまば、兵力を用ひんとの意をさへ示せり。朝廷その文辭の無禮なるを憤りて、答へたまはず。翌年彼の使者また來りしが、執權時宗は斷然これをしりぞけ、西國の將士に命じて、嚴に兵備を修めしめたり。

時に蒙古は、國號を元と改め、さらに使を遣はして、我が服從をうながせしに、いつも追ひかへされしかば、大いに怒りて、第九十一代後宇多天皇の文永十一年、大兵を發して來り寇せり。元軍筑前を侵し、博多海岸に上陸するや、隊を組み鼓をうちて、進退かけひきすこぶる整へるうへに、毒矢を飛ばし、鐵砲をも放ちて、我が軍に迫れり。一騎打の戰になれし我が將士は、苦戰ひとかたならず、勇をふるつて、やうやくこれを退くることを得たり。これより我は、團體教練の必要を感ずるに至れり。

元はその後も、また使を送り來りしが、時宗はこれを斬りて、我が

決心のほどを示し、北條貞政を九州の探題とし、防壘を博多灣の海岸に築かしめて、ます〳〵防備を嚴にし、さらに我より進みて、彼を伐たんとさへ企てたりき。この間に元は、新に宋を滅し、その勢に乘じて、紀元一千九百四十一年（弘安四年）數千艘の軍艦を發して、再び來り寇せり。

この時敵は、防壘にさゝへられて、上陸すること能はず。我が勇士は、たび〳〵小船に乘りて、見あぐる如き敵の大艦をおそひ、大いにこれをなやませり。たま〳〵七月晦の夜半より、にはかに起れる神風に、さしもの敵艦、秋の木の葉と吹きみだされて、沈沒するもの數を知らず、我が軍これに乘じて、遂に殘兵をみなごろしにせり。こののち元は、しばしば再擧をはかりしかども果さず、遂に我が國をうかゞふの念を斷ちたり。

當時大陸の諸國は、たいてい元に侵されしに、ひとり我が國のこれを免れしのみならず、かへつて國威を揚ぐることを得しは、まつたく上下心を一にして國を護りしによれり。その頃元につかへたるイタリヤ人マルコ、ポーロは、我が國のことを傳へ聞き、歸國の後これを西洋に紹介したりしかば、日本の名は、彼の地にまでも知らるるに至れり。

第二十六　室町幕府の盛時（〇・八頁）

中の一部……

義滿また使を支那に遣はして、再び國交を開けり。支那との通商は、元寇の後もなほ絶えずして、我が商船私に彼の地に往來したりしが、元亡びて明起るに及び、義滿これと好を修めて、貿易の利をはかりしなり。されば明との通商により、莫大の利益ををさめ得たるも、義滿はその利を求むるに急なるあまり、明主より日本國王の號を受けて、みづから臣と稱するなど、はなはだしき失體を重ねたり。然るに義持これを恥ぢて、斷然交通をこばみ、明が兵を用ひんとおびやかせるに對しては、元寇の例を引きて答へ、少しもこれを恐れざる態度を示したりき。

第三十一　邦人の海外渡航　西洋人の渡來（六・三頁）（挿繪三）

戰國時代には、人々各〻實力を競ひしかば、國民の元氣は、國内にみなぎりしのみならず、さらに海外にあふれたり。もと我が西南の地方は、特に海運の便多きにより、海事思想發達して、はやくより海外に交通するものあり。九州及び瀨戸内海附近の住民のうちには、黨を結びて支那・朝鮮に渡り、もつぱら商利を求めて、聽かれざれば、すなはち武力を振ふもの少からず。明及び高麗は大いに恐れしば〳〵書を足利義滿に寄せて、これを禁ぜんことを請ひしかば、義滿これをいれて、一時その徒を取りしまれり。されど應仁亂後、室町幕府の衰ふるに及びて、その徒の勢再びさかんになり、軍船を

そろへ、八幡大菩薩と書ける旗おし立てゝ彼の地に渡り、時には明の暴民に利用せられて、その沿岸をあらせり。かくて我が國民の冒險心は、おのづから振ひ起され、遠洋に航海を試むるものさへあらはるゝに至れり。

この頃、西洋にても航海の術大いに進みて、次第に航路を東洋に開かんとせり。イタリヤ人コロンブスは、マルコ、ポーロの著書を見、我が國の金銀及び產物に富めるるを知りて來航せんとし、イスパニヤ女王の助力を得て、大西洋を西に橫ぎり、はからずもアメリカを發見したりしが、その後まもなく、ポルトガル人はアフリカの南端を廻航して、はじめて印度に達せり。

これより西洋人の東洋に來航するもの、やうやく多く、中にもポルトガル人は、他に先んじて印度の西岸なるゴアを占領し、こゝを根據として、盛に商業に從事し、しば〳〵支那に往來するうちに、たま〳〵紀元一千二百三年後奈良天皇の天文十二年、その商船暴風にあひて、大隅の種子島に漂着せり。これ實に西洋人の我が國に渡來せし始なり。この時小銃はじめて傳はりて、世に種子島と呼ばれ、その効力弓矢にまさりしかば、大いに武人に珍重せられて、たちまち四方にひろまり、戰術こゝに一變して、築城法の如きも、面目を改めたりき。

イスパニヤ人もまたコロンブスのアメリカ發見以來、しきりに新大陸の經營に從ひしが、のち太平洋を航して東洋に來り、フィリピン群島を取りて、ルソンのマニラを根據地とし、ポルトガル人についで我が國に來航せり。

この頃イスパニヤ人ザビエルといふもの、印度にてキリスト教を宣傳したりしが、遂は天文十八年鹿兒島に來りてその教を傳へ、諸國をめぐりてこれをひろめたり。キリスト教は、我が垂仁天皇の頃、キリストによりてはじめられ、古くより西洋に行はれたる宗教にて、こゝにはじめて我が國に傳はり、大内・大友ら諸大名の信ずるもの多く、教會堂・學校など所々に設けられて、西洋文化のやうやく諸國にひろまる端を開けり。當時我が國にては、これらの外人をすべて南蠻人と呼び、その宗教を切支丹宗または天主教といへり。かくてその文化は、信長の天下統一の業成らんとするにつれて、その保護により、さらに發達を見るに至れり。

〔下卷〕

第三十四　邦人の海外發展と當時の文化

——その前半（五・八頁）（挿繪二）

信長は延曆寺の僧兵がとかく橫暴にして命を用ひざるを憤り、その寺を燒きはらひ、また本願寺など兵力を以て反抗せるものをうち平げたり。信長はかくの如く大いに佛教徒をおさふると共に、新に傳はれるキリスト教を保護し、京都・安土などに教會堂を建てしめて

自由に布教することを許せり。こゝに於てポルトガル・イスパニヤの宣教師渡來して熱心に教をひろめしかば、九州・中國はもとより、關東・奥羽地方にまで、數多の信者を出すに至れり。中にも九州の大友・大村・有馬の諸大名は信仰のあまり、遠く使をヨーロッパに遣はしたり。此の使にえらばれたるは、いづれも十五六歳の少年にて、アフリカの南端を廻航して、イタリヤに至り、ローマ法王に謁して親しく信書を呈し、よく使節の體面を保ちたりき。これ實に邦人がヨーロッパの地を踏みし始にて、至るところに歡迎を受け、地圖・地球儀・時計などをもたらし、八箇年餘にして歸れり。

キリスト教のひろまるにつれて、西洋の學問・技藝もやうやく傳はれり。宣教師はいづれも布教のかたはらもろ〳〵の學術・語學などを教へたれば、飜譯の書物も發行せられ、信者のうちには、ローマ字を用ふるものさへありき。ラシャ・カステラ・パン・タバコ・カルタの如く、その頃輸入せられし外國語の、今日國語として通用するもの少からず。

然るに宣教師及び信者のうちには、みだりに社寺をこぼちなどして、わが國風にそむくものあり。そのうへキリスト教の布教は、外國人が人心を收めて我が領土を奪はんとする手段にあらざるかと危ぶまれしかば、秀吉は遂にキリスト教を嚴禁せり。されど貿易はなほこれを奬勵し、願ひ出づるものには、朱印をおせる免許狀を與へて外國との交通を許せり。されば長崎・堺・京都などの商人の、これを受けて支那・印度・フィリピン群島に渡航し、貿易に從事して多大の利益を得たるもの少からず。世にその船を御朱印船といへり。

この頃國内にても金銀多く産出し、田地・貨幣の制も整ひて國力やうやく充實せしかば、秀吉この機に於て手を海外に延ばさんとし、まづ朝鮮・明と交を修め、ついでフィリピン・臺灣と好を通じ、遂に印度に及さんとす。

朝鮮は、さきに高麗の時、我が國に來寇せし元軍を助けて大いに財力を費せしうへに、國を我が西南地方の住民にあらされて勢はなはだ振はず。その間李成桂高麗を倒してみづから王となり、國號を朝鮮と改めたりしが、そののち對馬の宗氏と交通すること久しきに及べり。されば秀吉はまづ宗氏に命じて朝鮮との修好をはからしめ、また朝鮮王をして我が意を明に通ぜしめんとす。然るに朝鮮聽かざりしかば、秀吉怒りて兵を朝鮮に出ししも、事なかばにして伏見城に薨じ、遺命して軍を引きあげしむ。かくて修好の目的は遂に達することを得ざりき。秀吉また書をフィリピン及び臺灣におくりて交通をはかりしも、これまた功を奏せず、一世の雄圖遂に成らずして終りぬ。秀吉の辭世にいはく、

露とおち露と消えぬるわが身かな、
なにはの事は夢のまた夢。

と。實に感慨かぎりなかりしなるべし。

……下畧……

第三十六　外國との交通（五・四頁）（插繪二）

家康は力を内治に用ひしのみならず、また外交に注意し、國富を增さんがために通商を奬勵せしかば、江戸時代の初に當りては、諸外國との交通はなはだ盛なりき。

朝鮮・明との國交は秀吉の出兵以來全く絶えたれば、家康これを回復せんとし、まづ對馬の宗氏をして朝鮮に說かしめたり。これより朝鮮は將軍の代がはり毎に慶賀の使を我に送り、幕府も厚くこれを待遇せり。

明との國交は遂に成らざりしも、彼の商人は毎年長崎に來りて貿易を營み、のち清起りて明に代るに及びても、通商はもとの如くなりき。明の亡ぶるや、その遺臣に鄭成功といふものあり、母が肥前平戸の人なるにより、我が國の助を請ひて明の回復をはかりしが、遂に果さざりき。また僧隱元・朱舜水の如き遺民の我が國に來るものも少からず。隱元は宇治に萬福寺を開きて禪宗の一派なる黄檗宗を傳へ、朱舜水は水戸の藩主德川光圀に用ひられて、大いにわが文教の進歩を助けたり。

これよりさき、オランダはポルトガル・イスパニヤの兩國と貿易を競ひて、しきりに遠征隊を東洋に派遣したりしが、たま〳〵慶長五年その商品一隻我が國に漂着せり。家康もとより廣く西洋諸國と交通せんとする志ありしかば、その船に乘組めるオランダ人ヤン・ヨーステン及びイギリス人ウイリヤム、アダムスの兩人を江戸に召し、くはしく海外の事情をたづねて、いよ〳〵海外貿易の利をさとれり。よりて二人を優待して江戸に邸宅を與へ、殊にアダムスには三浦半島に地をたまひ、ながく外交の顧問となし、命じて西洋形の大船をも造らしめたり。

この頃オランダ及びイギリスは各〻東印度會社を起して熱心に東洋貿易に從ひしが、相ついで我が國に來り、いづれもアダムスの周旋により、家康より通商を許されて商館を平戸に開けり。然るにその後オランダ人は、イギリス人などと商業を競ひてこれにうち勝ち、ひとり我が國との貿易の利を占むるに至れり。

家康また、當時イスパニヤの領地たりしメキシコと交通を開かんとし、商人をやりて通商を求めしめしも成らず。こゝに於て伊達政宗家康の内命を受けて家臣支倉常長らを遣はせり。常長ら太平洋を航してまづメキシコに至り、さらに大西洋を渡りてヨーロッパに入り、イスパニヤ王に謁して政宗の信書を呈し、なほイタリヤに行き、ローマ法王にも謁してその助力を請ひしが、遂に目的を達せず、七箇年をへて歸朝せり。

外國人の渡來やうやく盛なるに及びて、國民の進んで海外貿易に從事するものおびたゞしくその數を加へたり。長崎の末次、大阪の末吉、京都の角倉らの商人をはじめとし、九州地方の大名、近畿地方の寺院など遠く南洋地方に朱印船を遣はして貿易を試みたりき。

またこの頃海外に移住するもの多く、シヤム・ルソン・安南などには日本町さへ建つに至れり。したがひて我が國人の勢を彼の地に振ひ、威を海外にかゞやかしたるものまた少からず。中にも駿河の人山田長政はシヤムに渡り、日本町の壯丁を率ゐて亂を鎭め遂に國王の婿となり、高官にのぼりて國政にあづかれり。また長崎の商人濱田彌兵衞は、臺灣に於て我が商船がオランダ人のためにかすめられたるを怒り、同志と共に彼の地に渡りてその不法を責めたり。

第二十七　島原の亂と鎖國（四・三頁）（插繪三）

家康は秀吉の方針をつぎてキリスト教を禁じたれども、通商はこれを勵ましにしかば、海外との交通次第に盛になるにつれ、宣教師のひそかに渡來するもの絶えず、容易に禁止の目的を達することを得ざりき。こゝに於て家光は海外との交通に制限を加へ、大船を造ることをとゞめ、國民の海外に出づることを禁ずると共に、ます〳〵もびしくキリスト教を取りしまれり。

このきびしき取りしまりに不平なりし島原・天草島の信徒らは、紀元二千二百九十七年（第百八代）明正天皇の寛永十四年遂に亂を起し、益田時貞といふ少年を奉じて島原半島の原城にたてこもれり。幕府板倉重昌をして伐たしめしに、老幼男女を合はせて三萬に餘れる信徒の團結すこぶる固く、幕府の軍しば〳〵利を失へり。よりて老中松平信綱命を受けて來り、諸大名の軍を指圖し、城中の兵糧盡るを待ちて、やうやくこれを平げたり。

これより幕府はいよ〳〵キリスト教をきらひて、全くこれを絶やさんとし、信徒たる疑あるものには、キリストの像を踏ましめ、その然るや否やをたゞして改宗をうながし、國民をしてこと〴〵く佛教を奉ぜしめ、それ〴〵その屬する寺院を定めしめたり。こゝに於て佛教をあまねく全國に行きわたりしも、僧侶はかへつて安逸になれて活氣を失ふに至れり。

幕府はなほキリスト教を恐るゝのあまり、さらに鎖國の方針を立て西洋人の渡來を嚴禁せり。たゞオランダ人のみは、かつて布教に關係せしことなく、常に幕府のためにはかり、島原の亂にも叛徒を砲撃したるなど、ひたすら好意を示したれば、特に貿易を許され、長崎の出島に居留せり。さればオランダ人及び支那人との貿易は、この後もながく長崎の一角に行はれたれども、さきの盛況はもはや見るべくもあらず。

幕府はまた洋書の輸入をも禁じたれば、これまで盛に傳はりし學藝もその入るべき路絶えて、國民は西洋の文明に遠ざかるに至れり。されどオランダ船の長崎に來るや、その船長は江戸におもむきて將軍に謁し、またヨーロッパの大勢を報じたれば、幕府はこれによりてわづかに海外の事情を知るを得たりき。

かくて戰國時代以來、國民の間にみなぎりたりし海外發展の氣勢全くくじけて、わが國はながく世界の進運におくれたり。然れども國

內太平うちつゞきて、產業及び學問の發達を來したること少からず。

第三十九　江戸幕府の中興　その一部（一・一頁）

……

綱吉薨じて家宣その後をつぐに及び、たゞちに生類あはれみの令をやめ、吉保をしりぞけて新井白石をあげ用ひたり。白石は博學にして特に歷史にくはしく、また政治の才あり、つかへて次の將軍家繼の代にわたり、その間改革するところ少からず、まづ財政上にては前代の粗惡なる金銀貨を良質のものに鑄あらため、また長崎に於ける支那・オランダとの貿易の額を制限して、我が金・銀・銅の海外に流出するを防ぎ、外交上にては、これまで朝鮮の使節に對する待遇の厚きに過ぎたりしを改め、これによりて接待の費用をはぶくと共に、我が國の權威を重からしめたり。

……

吉宗また西洋の學術の精密にして有用なるを知り、洋書の禁をゆるめて、キリスト教に關係なき書籍の研究を許ししかば、これより天文學・曆法・醫術など大いに發展したり。

……

第四十二　外國船の來航と海防

（五・四頁）（插繪二）

內には尊王の論やうやく盛なるに際し、外には外國の刺激次第に加りて、海內の形勢はまさに一變せんとす。當時東洋に於けるポルトガル・イスパニヤ兩國の勢力はすでに衰へて、イギリスのみ勢盛にして、着々印度經略の歩を進め、オランダを壓して東洋貿易の利を獨占するの志あり、南方より我が國に迫らんとす。またロシヤは、はやくより意を東方の經營に用ひて、シベリヤの地を占領し、ペートル大帝出づるに及びてカムチヤッカ半島をも占領し、遂に我が千島列島を侵して、北邊より我に迫れり。林子平は長崎のオランダ人につきてこれらの事情を知り、海國兵談をあらはして海防の急務なるを論ぜしが、また蝦夷地のロシヤ人に侵されんことを憂へて、これを警告せり。されど幕府は、これを以てみだりに人心を惑はすものとして、その書を燒きすて、子平を罪したり。

然るに子平の先見はたがはず、まもなく紀元二千四百五十二年（第百十八代）光格天皇の寛政四年ロシヤの使者、我が漂流民をともなひて根室に來り、はじめて通商を請ひしも、幕府これを許さざりき。これより幕府は海防の必要をさとり、老中松平定信をして伊豆・相模などの海岸を巡視せしめ、また近藤重藏に命じて、たび〳〵蝦夷地を探檢せしめたり。重藏は、高田屋嘉兵衞を案內者とし、多量の米・鹽などを船に積込み、遠く擇捉島に渡りて、これを島民に分ち與へ、漁場を開きなどして土民をなつけ、なほロシヤ人の建てたる標

柱を拔きて我が國標を建てたり。ついで間宮林藏は、幕府の命により て兩度樺太を探檢し、その北部をきはめ、さらにシベリヤに渡り、地勢・風俗などを視察してかへれり。樺太はこれまで大陸の地つゞきなりと信ぜられたりしに、林藏の踏査によりて離島なること明かとなり、その記念は今に間宮海峽の呼名にとゞめらる。……

……中略……

かゝる間にロシヤは、再び使者を遣はして通商の約を結ばんことを請ひしに、幕府またこれをこばみしかば、彼の船しば〳〵千島・樺太などに寇し、北邊すこぶる騷がしかりき。この時またイギリスの軍艦は、當時敵國たるオランダの船を捕へんがため、突然長崎に來りて港内を騷がし、長崎奉行もこれを鎭むること能はず、責を引きて自殺したることなどあり。この後も、イギリス船はたび〳〵我が近海に出沒して、暴行をほしいまゝにせしかば、攘夷の論やうやく起り、紀元二千四百八十五年仁孝天皇(第百十九代)の文政八年、幕府は遂に外國船の我が海岸に近づくものは、いつさいこれをうち攘ふべしと令するに至れり。こののち幕府はなほ鎖國の方針をかへずもつぱら意を海防にそゝぎ、高島四郎太夫・江川太郎左衞門らを用ひて新式の兵器・戰術を研究せしむ。四郎太夫は長崎の人にして、西洋の兵學にくはしく、幕府に召されて、一日武藏野に練兵を行ひ、得意の砲術を試みてその技を賞せられ、これより砲術を旗本に教へたり。その門弟中江川太郎左衞門最もその術に達して、西洋兵式の教官となり、のち伊豆の韮山に反射爐を造りて大砲を鑄、すこぶる名をとゞろかせり。諸國の大名にも海防・攘夷に盡すもの多かりしが、わけて水戸の德川齊昭は、藤田東湖らを用ひて、弘道館を興し、忠孝の道をすゝめて士氣を勵ますと共に、率先して攘夷論をとなへ、盛に天下の人心を鼓舞したり。また薩摩の島津齊彬、佐賀の鍋島直正らは、はやくより西洋の學術を應用して、兵器を改め軍艦を造り、大いに海防につとめたりき。

第四十三　洋學の發達と開港の始末

（九・四頁）（挿繪三）

幕府が鎖國の政策を勵行せしため、上下久しく太平の夢をむさぼりて、多くは海外の形勢に通ぜず、したがひていつぱんに攘夷の說にかたむきしが、ひとり洋學者のうちには、世界の大勢をさとりて、開港の意見をいだくものありき。

さきに洋書の禁じられてより、西洋の事情はほとんど我が國に知られざりしが、新井白石は、たまたま來朝せる西洋人につきて世界各國の地理・歷史などを聞き、西洋紀聞をあらはして、やゝ海外の有樣を傳へたり。ついで將軍吉宗は、洋書を讀むことを許し、青木昆陽を長崎にやりて、オランダ語を學ばしめしかば、洋學を修むるものおひ〳〵にあらはれ來りぬ。昆陽の門人に前野良澤といふ醫者あり、長崎に遊びてオランダ語を習ひ、その解剖書を買ひて江戸にかへり、

友人杉田玄白らと共に、刻苦勉勵してこれを飜譯し、解體新書と名づけて出版せり。これ實に鎖國以來洋書飜譯の始なり。良澤の洋學研究の志を起すや、天滿宮に祈りて一身をこれにさゝげ、名利のためにせざることを誓ひしかば、この書を出版するに當りても、おのが名をのせざりきといふ。また大槻磐水は良澤・玄白につきて學び、特にオランダ語法を研究し、蘭學階梯といふ書をあらはして、綴方・發音などを示ししかば、洋學に志すものこれよります〳〵多かりき。これらの人々は多く醫學の研究を目的としたりしも、海防の論盛なるにともないて、兵學を研究するものも次第に出づるに至れり。

さればこれら洋學者のうちには、世界の形勢を察して、我が鎖國政策の不利をさとれるもの少からず。たま〳〵天保の頃、イギリスの軍艦來りて通商を請はんとするの風聞あり。幕府またこれをうち攘はんと決するや、渡邊崋山・高野長英らの洋學者は、各々書をあらはしてその非を論じ、これがため幕府に罪せられたり。

この頃隣邦淸國は、イギリス人の印度地方よりアヘンを輸入するをこばみ、遂にイギリスと戰爭を開きて利あらず。その報はやく我が國に達せしかば、幕府もこれにかんがみるところあり、外國船うち攘の令をゆるめて、漂着せる外國船にかぎり、薪水・食料を給せしむることとせり。ほどなくオランダの國王は書を將軍におくり、今や汽船の發明ありて、遠き國々も隣の如く相往來するに當り、鎖國のとうてい行はれざる由を、ねんごろに忠告せり。されど幕府はなほ祖先の遺法のたやすくかふべからざるを主張して、これに從はずいよ〳〵海岸の警備を嚴にしたり。

そののち、外國船の來りて通商を請ふものますます多くなれり。中にもアメリカ合衆國は、淸國と通商を開きしより、寄港地を我が國に求むるの必要あり、紀元二千五百十三年孝明天皇(第百二十代)の嘉永六年、使節ペリーをして軍艦を率ゐて、浦賀に來り、國書をもたらして通商を請はしむ。幕府は浦賀奉行をして、これと久里濱に會見してその國書を受けしめ、いつたんペリーを立ちかへらしめたり。ついでロシヤの使節も長崎に來りて貿易を求め、且、北邊の境界を定めんことを請ひしが、幕府また回答の期を延べて使節をかへせり。

かくて外交の事態すこぶる重大となれるを以て、幕府はこれを朝廷に奏し、また諸大名の意見を問ひしに、攘夷・開港の論まち〳〵にして決せず、世の中これよりもの騷がしくなれり。たまたま將軍家慶薨じて、子家定職をつぎしが、幕府はいまだ對外の方針を決する能はず。翌安政元年ペリー再び來りて神奈川沖に入り、しきりに決答をうながししかば、幕府はやむを得ず、和親條約を結びて、下田・函館の二港を開き、薪水・食料を給することを約せり。ついでイギリス・ロシヤ・オランダとも、ほゞ同樣の條約を結び、殊にロシヤとは、千島列島を二分し、樺太を兩國人の雜居地と定めたり。

和親條約すでに結ばれしかば、アメリカ合衆國の總領事ハリス下田

に來り、ついで江戸に入り、將軍に謁して國書を呈し、世界の大勢を說きて我が鎖國の不可なるを論じ、通商を開かんことを求めたり。幕府は時勢のやむ能はざるを察し、ハリスとはかりて通商條約の案を定め、これが勅許をあふぎたてまつれり。されど諸大名のうちには攘夷を主張するもの多く、京都にてもまたこの說をとるもの少からずして、國論いまだ一定せざれば、孝明天皇は深く國家の前途を憂へて、容易に幕府の請を許したまはず、諸大名の意見を徵してさらに上奏せよと命じたまへり。この時彥根の藩主井伊直弼大老にあげられて、この難局にあたれり。たまたまイギリス・フランスの兩國清國と戰ひ、これに勝ちたる勢を以て、我が國に通商を迫らんとするの風聞あり。ハリスこれに乘じて、しきりに條約の調印をうながししかば、幕府は事情大いに切迫せりと見て、遂に勅許を待たずして、紀元二千五百十八年(安政五年)通商條約に調印し、下田・函館の外に神奈川・兵庫・長崎・新潟の四港を開き、また我が國に居留する外國人に信教の自由を與へ、治外法權を認め、なほ輸入品・輸出品に對する稅則などを定めたり。この條約により、關稅は我が國の任意に定むることを得ず、治外法權と共に、我にとりて最も不利とするところなりき。ついで、オランダ・ロシヤ・イギリス・フランスの諸國とも、同じく通商條約を結べり。

よりてまづ長崎・函館・神奈川の三港を開きて、內外人のたがひに貿易するを許し、外國奉行を置きて、もつぱら外交の事をつかさどらしむ。ついで外國奉行新見正興ら幕府の使節としてアメリカ合衆國におもむき、條約書の交換を終へしが、こののち慶應元年に至りていよ〳〵條約は勅許せられ、江戸幕府の鎖國政策こゝに全く破れたり。

第四十四　大政奉還—その一部（一・九頁）（插繪一）

時に薩摩・長門・土佐の三藩、朝廷の命により京都を鎭めたりしが、長門藩を中心として過激の攘夷論次第に勢を得、朝廷、三條實美らを江戸に下して、攘夷をうながさしめたまふ。文久三年將軍家茂京都にのぼりて勅を拜し、五月十日を以て攘夷實行の期と定め、あまねくこれを諸藩に告げたり。されば長門藩は期日に至り、下關海峽に外國船を砲擊し、ついで薩摩藩もイギリスの軍艦と鹿兒島灣にて砲火を交へたり。

かくて薩・長二藩が外國船を砲擊せるの報、ひとたび天下に傳はるや攘夷論者の意氣大いにあがり、長門藩主毛利敬親は朝廷に御親征を請ひたてまつれり。三條實美らの公卿これを贊し、天皇大和に行幸して神武天皇の山陵を拜し、親征の詔を下したまはんとするの議定まる。然るに京都守護職たる會津藩主松平容保、溫和論をとれる薩摩藩士とはかり、親征の不可なる旨を奏したれば、朝議にはかに一變して、大和の行幸をやめ、實美らの參內を禁じ、また長門藩の皇

宮守衞の任を解きたり。こゝに於て實美ら七人の公卿は、長門藩士に護られて長州に走れり。世にこれを七卿の都落といふ。

……下略……

第四十六　邊境の開發　隣國と修好

（三・五頁）（插繪一）

樺太の地は、かつてロシヤ人との雜居地と定められしが、そののち我は國境を定めんとてしばしば彼と談判し、北緯五十度を以て境とせんとするに、彼は全島を得んとせしより、議容易に決せざりき。然るに今や北海道開拓の業進むに及び、淸隆は書をたてまつりて、樺太の地、利少きを以てむしろこれを棄てて、もつぱら力を北海道開拓に盡すのまさるを論じたり。朝議これをいれ、明治八年ロシヤと交涉して、樺太全島を彼に讓り、千島全部を我に收め、多年の紛議はじめて解けたり。

當時淸國との國交はいまだ開けざりしを以て、明治四年彼をうながして、修好通商の條約を結べり。時にわが琉球の民臺灣に漂着して五十餘名その地の生蕃のために殺さる。その頃臺灣は淸國の領土なりしかば、我はこれを淸國に交涉せしに、彼は生蕃を支配外の民なりとして、その責を負はざりき。よりて明治七年陸軍中將西鄕從道をして、兵を率ゐて臺灣に渡り蕃人を伐たしむ。我が軍たちまちこれを征服し、歸順せるものにはそれ〴〵國旗を授けてこれを安んじしばらく軍を蕃地にとゞめたり。

こゝに至り淸國にはかに蕃地もおのが領土なりと主張し、我が出兵に異議をとなへしかば、參議大久保利通を北京に遣はして交涉せしめ、淸國をして償金を出し、我が出兵の正當なることを認めしめて、軍を引上げたり。これより琉球の支那に進貢することを嚴禁し、後この地を沖繩縣として治むるに至れり。

また朝鮮とは、幕末より交通おのづから絕えたれば、我はこれを遺憾とし、まづ對馬の宗氏をして王政維新のことを告げしめ、しばしば使を遣はして、舊好を修めんとせり。されど彼はこれに應ぜざるのみならず、その態度はなはだ無禮なりしかば、西鄕隆盛らその罪を問はんことを主張せしが、その議遂にしりぞけらる。たまたま明治八年我が雲揚艦朝鮮の近海を過ぐるや、江華島の守兵不意にこれを砲擊せり。よりて我が政府は使節を遣はして、その不法を責め、かねて修好をはからしめしに、彼はその暴擧を謝し、はじめて修好條約を結び、釜山外二港を開くことを約せり。これより朝鮮との交通再び開け、邦人の彼の地におもむきて在留するものやうやく多く彼我の關係次第に密接となれり。

第四十七　外交の進步と社會の變遷

その一部（二・二頁）（插繪一）

隣國との修好開けゆく間に、歐米諸國との交もおひ〳〵に進みたり。維新のはじめ、朝廷は世界の大勢にかんがみ、廣く諸外國と和親する方針を立てゝ天下に布告したまひ、天皇各國の公使を京都皇宮に召し、紫宸殿に於て親しく拜謁を賜へり。ついで明治三年公使をおもなる條約國に駐在せしめて、交を厚くし、また民間の外國人をきらひしものも、次第に交際になれて、諸外國との親しみは年と共に加りたり。

政府はさらに岩倉具視を大使とし、木戸孝允・大久保利通・伊藤博文らを副使として、歐米に派遣せり。大使の一行はまづアメリカ合衆國に渡り、大統領に謁して國書を呈し、ついで歐洲諸國をまはりて、各國と親交をかさぬると共に、その文明を視察し、ほゞ二年にして歸朝せり。これより我が國はいよ〳〵西洋の文明を輸入して、內治の改良をはからんとす。

大使の歐米に派遣せらるゝや、數多の留學生ともなはれ行き、數名の少女もこれにまじりたりしが、こののち國民の海外諸國を視察し彼の地に留學するものもまた多し。かくて知識を世界に求めて我が文化を補ふの風は、維新の機運と相まちて盛となり、もろ〳〵の制度の改善せられたるもの少からず。

……下略……

第四十九　文化の發達　その一部（一・二頁）

……かゝる間に諸種の文化も、ます〳〵健全なる發達をとげたり。維新のはじめ復古の氣分社會にみなぎり、一時神道を盛にして佛教をおさへんとし、寺塔を破り佛像をこぼつものさへあらはれたり。されどいつぱんの信仰は衰へざりしのみならず、僧侶はこれがために安逸より目ざめて社會の教化につくすの傾となれり。またキリスト教は、外交の進むと共にその禁次第にゆるみ、宣教師の來りて熱心に布教するうへに、邦人にも、はやくこれが傳道に從ふものあり。中にも新島襄は、幕末その禁のいまだきびしかりしをり、ひそかにアメリカに渡りてキリスト教を研究し、歸朝ののち京都に同志社を建てゝ、教育と傳道とに全力をそゝぎたりき。さればキリスト教もやうやく行はれたれど、なほ民間の迫害をまぬかれざりしが、憲法の發布せらるゝに及び、信教の自由を許されたるより、宗教上の爭はやみて、それ〴〵圓滿なる發達を見るに至りぬ。……

……下略……

第五十　條約改正と法典の編纂

（四・二頁）（挿繪一）

帝國議會のはじめて開かれし頃、諸種の法典は次第に完備せられて、國民はその生活に安んずるを得たりしのみならず、また條約改正問題の解決は、これによりてうながされたり。

江戸幕府が列國と結びたる條約は、法權・稅權など我に不利なる點少からざりしかば、これが改正は維新以來の宿題なりき。さきに岩倉大使の歐米巡廻のをり、これが交涉をアメリカ合衆國に試みたることありしも、果さず。そののち政府は絕えず熱心にその改正をはかれり。外務大臣井上馨は列國の公使と會して協議をかさぬること二十餘度に及びしが進行とかく意の如くならず。ついで大隈重信外務大臣となるに及び、列國會議の方法によらずして國ごとに談判を開き、順次に條約を結ばんとせり。然るにその條件のうちに、外國人を我が裁判官に任用し、土地の所有を外國人に許すことなどありしかば、これ大いに國權をそこなふものなりとて反對の聲朝野にかまびすしく改正のことまたやみたり。

條約改正問題の容易に決せざりしは、國內の法典いまだ備らず、我が國情よく諸外國に知られざりしがためなり。維新のはじめ、政府は地方によりてそれ〴〵異なれる法制を統一せんとし、まづ刑律の編纂を始めたり。この時天皇特に詔して、法を定むるは寬恕を旨とせしめたまひしかば、聖旨を奉じて、刑罰はすべて輕きに從ひしが、さらに西洋の法律を參考してたび〳〵改定し十五年に至りていよいよ刑法を實施せり。そののち各種の法典年を追ひて編纂せられ立憲政體さへ確立して、我が國の眞價やうやく列國に認められしかば、條約改正の談判も、前日の如く困難ならざるに至れり。

陸奥宗光外務大臣となるに及び、まづイギリスに交涉してその同意を得、二十七年淸國と開戰の頃、はじめて改正條約の調印を終へたり。まもなく戰役の勝利に我が實力を示したることは、大いに談判の進行をたすけ、各國相ついで新條約に調印し三十二年より實施せられたり。こゝに於て治外法權は除かれ外國人も內地に雜居して我が法權の支配を受くるに至れり。たゞ稅權の回復はいまだまつたからざりしも、後さらに條約を改正し、關稅につきても自由に我が權利を行ふことを得、こゝに我が國は歐米諸國と對等の地位を占め、上下多年の望はじめて達せられぬ。

改正條約の實施せられし頃、また諸種の法典も施行せられたり。政府はかねて西洋の法制にならひ我が國の習慣をまじへて、民事及び商事に關する法規を編纂したりしが、こゝに至り、民法・商法としてこれを施行せり。また時勢の進むにつれて刑法の改正も行はれ、わが法典いよ〳〵備りて、大いに社會の發達をたすけたりき。

第五十一　朝鮮の事變と明治二十七八年戰役

（五・九頁）（挿繪二）

內治のやうやく整ひ、歐米諸國といよ〳〵親しみを加へたるをり、はからずも隣邦と兵を交ふるに至れり。

さきに我が國は率先して朝鮮の獨立を認め、修好條約を結びしより、京城に公使館を設けて花房義質（よしもと）を駐在せしめ、彼はまた我が軍人を招きて、その兵士を訓練せしむるなど、兩國の關係おひ〳〵親密に

おもむけり。然るに十五年京城に暴徒起り、王宮に亂入して我が軍人を殺し、また我が公使館を燒けり。政府はたゞちに談判し、彼をしてその罪を謝せしめ、また我が兵を置きて公使館を護らしむることとせり。

やがて朴泳孝は謝罪の使として金玉均と共に來朝せしが、兩人は我が進歩せる制度・文物を視察して歸り、同志とはかりて國政を改め、我が國にたよりて獨立を固くせんとせり、これを獨立黨といふ。獨立黨に反對して、保守を喜び、大國清に事へんとするものあり、これを事大黨といふ。清國は袁世凱に大兵を附けて、京城に入りて事大黨を助けしむ。然るに十七年兩黨の爭大いに起り、清兵は朝鮮兵と共に我が公使館を燒き、數多の官民を殺傷せしかば、再び朝鮮との交渉となり、彼は罪を謝し、償金を出すことを約して事をさまりたり。されどこの事變は、もと清國にも關係するところ多かりしより、清國とはかりて他日の紛爭をさけんがために、翌年特に伊藤博文を遣はし、李鴻章と天津に會見せしむ。その結果、兩國とも朝鮮に兵をとゞむることをやめ、もし出兵の必要ある時は、まづたがひに通知すべきこととなれり。

然るに、この後も清國はなほ朝鮮を屬國と見なし、事大黨を助けて威を振ひ、朝鮮の內政ます〳〵亂れて、人民はなはだこれに苦しめり。時に東學黨といふ一派あり、儒・佛などの教を奉ずるものなりとて、民望をあつめ、すこぶる勢を得たりしが、二十七年自國の弊政を憤りて亂を起せり。清國は屬國の難を救ふと稱して、たゞちに兵を朝鮮に出し、天津條約に基づきて我に通知し來れり。我が國もまた居留民保護のために出兵し、これを機として清國と力を合はせ、朝鮮の政治を改良して、ながく東洋の平和を保たんことを交渉せしに、清國はこれに應ぜざるのみか、我に撤兵を求めながら、みづからは大兵を送りて、我を威壓せんとせり。こゝに於て清國との和親遂に破れ、天皇宣戰の大詔を下し、海陸の大軍を發したまふ。やがて大本營を廣島に進めて、日夜親しく軍務を統べたまひたれば、士氣大いに振へり。また廣島に召集せられたる臨時帝國議會はたちどころに一億五千萬圓の軍費を可決し、老幼婦女に至るまで資を献じ、擧國一致して奉公の誠をいたさんことを期せり。

これより我が軍は、平壤・黃海・威海衞など、陸に海に至るところ勝を得、破竹の勢を以てまさに北京に迫らんとす。清國大いに恐れ、二十八年李鴻章を我が國に遣はして和を請はしむ。內閣總理大臣伊藤博文・外務大臣陸奥宗光これと下關に會見し、談判の末、清國は朝鮮の獨立を認め、遼東半島及び臺灣・澎湖島を我に讓り、償金およそ三億圓を出すことなどを約して和を結べり。

遼東半島は、ロシヤ・ドイツ・フランス三國のすゝめによりてこれを清國にかへせしが、臺灣には總督府を置きて治めしむ。民政これより整ひて皇化全島にあまねく、產業も興りて文化次第に開けゆけり。また朝鮮はこののち全く清國の干涉よりまぬかれ、我が國これを助

けて、その獨立の實を擧げしむることにつとめたり。かくて三十年、朝鮮は國號を韓と改め、國王李熙新に皇帝の位に卽きて獨立國の體面を備ふるに至れり。

第五十二　北淸事變と日英國盟(四頁)(插繪一)

明治二十七八年戰役の終るや、ロシヤは、東方の經營上、我が國の遼東半島を有するを不利とし、ドイツ・フランスと共に東洋平和の保全を名としてこれを清國にかへさしめしが、やがてその報酬として、シベリヤ鐵道につゞけて東支鐵道を滿洲に敷く特權を得、のちさらに旅順・大連一帶の地を租借し、東支鐵道の支線をこの地まで敷き、沿道の鑛山を採掘することとなれり。ドイツは、またその宣教師が清國の暴民に殺されたるより、たちまち膠州灣を占領し、遂に同地を租借すると共に種々の權利を得たり。こゝに於てイギリスも威海衞及び九龍半島の地を租借し、フランスもまた廣州灣を租借せり。かくてヨーロッパの諸國は、東洋に於ける權力の平均を保たんがために、しきりに清國に迫りて、それ〴〵多大の利權を收めたりき。

されば清國民の間には、これら諸外國の壓迫を憤るもの多く、したがつて外國人をいみきらふの念さかんになり、三十二年義和團といふ暴徒起りて、保淸滅洋の旗をひるがへして外國の宣教師を殺し、教會堂をこぼちて暴行をたくましうせり。翌年その徒天津の外國人居留地をおそひ、さらに北京に進入し、官兵と合して各國公使館を圍み、また我が公使館員及びドイツ公使を殺害するに至れり。

こゝに於て、その急を救はんがため各國兵を出して聯合軍を組織し我が軍その中堅となりてたゞちに天津を陷れ、進みて北京にうち入り、たちまち騷亂を鎭めたり。その時我が將卒の勇武にして軍紀ただしきことは、各國の軍に拔んで、大いに名聲をあげたり。やがて淸國和を請ひしかば、列國の公使はしば〳〵會議を開き、淸國をして謝罪使を我が國とドイツとに遣はし、その暴徒を罰し、償金を出さしめて局を結べり。世にこれを北淸事變といふ。

この事變に當り、滿洲にある淸兵は、暴徒に應じて在留のロシヤ人をおそひたれば、ロシヤはこれを機として、大兵を滿洲に送りてその地を占領し、事變の鎭りたる後も、なほ兵を撤せず、遂に韓國を威壓して、獨立を危くするの勢を示せり。

そも〳〵淸・韓兩國の領土を全うし、東洋の平和を保つことは、我が國とイギリスと多年その意見を同じくせるところなりき。然るに極東の形勢やゝもすればこの主義を危くするのおそれあるにより、三十五年我が國はイギリスと同盟を結び、他の二國以上が聯合して、極東に於て我が國またはイギリスと開戰する場合には、兩國協同してこれに當るべきことを約せり。かくて世界東西の兩島帝國は相たづさへて東洋の平和を維持し、ひいて世界の安寧を增進せんことにつとめたり。

第五十三　明治三十七八年戰役（四頁）（挿繪一）

日英同盟の成るや、ロシヤは滿洲にとゞめたる兵を撤せんことを約せしに、これを果さざるのみか、かへつて韓國の北境を占領するに至れり。かくて滿洲にしてもしロシヤの有となり、韓國危くなるに至らば、たゞちに我が國の安危にもかゝはり、東洋の平和は保たるべくもあらず。よりて我が政府はロシヤと交渉をかさね、あくまで平和の間に事をまとめんと望みたり。されど彼はこれに應ずるの誠意なく、いたづらに時日を延ばして、その間に旅順の要塞を修め、海陸の軍備を整へて我を威壓せんとせしかば、三十七年二月我はやむなく國交を絶ち、やがて天皇宣戰の大詔を下したまへり。

こゝに於て我が陸國は、敵兵を韓國より追ひて、滿洲の野に進み、遼陽・沙河の激戰に勝を得、海軍は決死隊を以て旅順の港口をふさぎ、また敵艦の逃れ出でたるをば、たちまち黃海にうち破れり、ついで陸軍は旅順の要塞に迫り、苦戰半年にしてやうやくこれを陷れたりしが、さらに奉天及び日本海に於ては、世界の戰史上にもかつて例なき大勝を得たり。かくの如きは、もとより天皇の御稜威によれりといへども、また將士の忠勇と國民の後援と相まちて君國に盡したるがためなり。この役に當り、國民は增稅の負擔に甘んじ、進んで募債に應じ、また赤十字社が敵味方の別なく救護につとめ、愛國婦人會が出征軍人及びその家族の慰問、戰病死者の弔慰などに全力をそゝぎたるが如き、いづれもその功績いちじるしかりき。

戰役の大勢すでに定まれるを見て、アメリカ合衆國大統領ルーズベルトは、和を我とロシヤとの兩國にすゝめたり。我が政府はこれをいれ、外務大臣小村壽太郎らを全權委員として、ロシヤの全權委員ウキッテらと合衆國ポーツマスに會議せしめ、三十八年九月遂に講和條約を結べり。これによりてロシヤは我が國が韓國に於て政治・軍事・經濟の上に特別の權利を有することを認め、樺太の北緯五十度以南の地をさき、またそのかねて清國より得たる關東州の租借權、長春以南の鐵道・炭坑を我に讓れり。

平和回復ののち、樺太に樺太廳を設けて、內地人の移住を奬勵し、漁業・林業などの發達をはかれり。關東州には都督府を旅順に置きてその政務をすべしめ、また南滿洲鐵道株式會社を大連に起して、ロシヤより讓り受けたる鐵道及び鑛山などを經營せしめ、諸種の事業年を追うて進みたり。

なほ我が國は戰時中占領したりし滿洲の地を清國にかへし、ロシヤもまた兵を撤したれば、清國は再び政令をその地にしくに至れり。清國の領土を全うせんとするわが目的はこゝに達せられたり。

第五十四　韓國併合（四・一頁）（挿繪一）

韓國はとかく他國の壓迫をうけて、獨立の實を擧げがたく、東洋の平和はためにしば〳〵破れたり。我が國が清國及びロシヤと國交を

絶ちしも、また韓國に關する問題より起りしなり。されば我はかねてより韓國を助けて、これが富强をはかりしが、ポーツマス條約の成るや、韓國と協約を結びて、その外交はすべて我が指導によることとし、統監府を京城に置きて、伊藤博文を統監に任じ、その保護をまつたうせんとせり。

四十年韓國皇帝位を皇太子李坧に讓るに及び、我はさきの協約をひろめて、統監をしてさらにその內治をも指導せしむることとし、まづ〳〵保護の實を擧げたり。ついで我が皇太子嘉仁親王は親しく韓國皇室を訪ひたまひ、また韓國皇帝はその皇太子を我が皇室に託して、東京に留學せしめられ、兩國の間ます〳〵密接となれり。かくて韓國の宿弊は、統監政治によりて次第に改善せられたりしも、國內の民情なほ穩かならず、やゝもすれば暴動を企つるものあり。こゝに於て韓國民中には、むしろ日・韓兩國を合はさんことを望み、連署を以てこれを同國政府に建白するものさへあり。我が國もまた韓國民の幸福を進め、且、東洋の平和を永遠に保たんがために、併合の必要を認むるに至れり。されば四十三年八月韓國皇帝はいつさいの統治權を我が天皇に讓り、天皇はこれを受けて、全く韓國を我が國に併はせ大詔を下してこれを天下に告げたまふ。韓國皇帝もまたその民に勅して、我が帝國の新政に服し、幸福を受くべきことを諭したまへり。

よりてもとの韓國皇帝及びその近親を皇族の禮を以て待遇したまひ、その一族及び大官の功勞ありしものに華族の禮遇を賜へり。また韓國を改めて朝鮮と稱し、これを十三道に分ち、新に朝鮮總督を置きて、いつさいの政務を統べしむ。寺內正毅はじめて總督に任ぜられ、內政を改め產業をすゝめ、諸港を開きて貿易の利をはかりしかば、半島の開發は年と共に進み、東洋の平和は永遠に强固となれり。

この前後に當り、歐米諸國との交際は大いに進みて、イギリス・アメリカ・ドイツ・フランス・オーストリヤ・ハンガリー・イタリヤ・ロシヤの諸國との間には、たがひに大使を置くこととせり。また東洋に屬領を有して我と利害の關係深き國々とは、さらに交涉をかさね、イギリスとはさきの同盟をひろめて、攻守たがひに相助くることとし、フランス・ロシヤ・アメリカの諸國とも約を結びて、アジヤ大陸または太平洋方面に於ける相互の位地を重んじ、ながく東洋の現狀を保つべきことを期せり。こゝに於て列國との親交ます〳〵加りぬ。

第五十七　歐洲の大戰と我が帝國の地位

（七・九頁）（挿繪三）

明治の盛世をうけて大正の御代に入るや、たま〳〵歐洲に於て、ドイツ・オーストリヤ、ハンガリーはロシヤ・フランス・イギリスの諸國と戰を開き、遂に世界の大亂となれり。この時ドイツは膠州灣にて日夜戰備を修め、その艦艇しきりに東亞の海洋に出沒して、我が

國及び諸國の通商をさまたげ、すこぶる東洋の平和を危くせり。よりて我が國は日英同盟の好を重んじ、平和を保つために、ドイツに勸告するところありしも應ぜざりしかば、大正三年八月やむなく國交を絶ち、天皇宣戰の大詔を發したまへり。

こゝに於て我が軍はイギリス軍などと連絡して行動し、まづ膠州灣に迫りて青島の要塞を陷れ、またドイツ領の南洋諸島を占領し、以て東洋に於ける敵の根據地をくつがへし、さらに印度洋・地中海に進みて、勇敢に敵の暴行をおさへたり。なほ一方に、我が赤十字社は、醫員らを遣くイギリス・フランス・ロシヤの諸國に送りて、戰傷病者を救護せしめ、よく博愛の精神をあらはしたり。

かゝる間に歐洲の戰局はおひ〳〵ひろがり、イタリヤ・アメリカ合衆國なども相ついでドイツ・オーストリヤと國交を絶ちて戰に參加したれば、遂に空前の大戰となれり。然るに大正七年ドイツ屈して和を請ひしかば、列國の全權委員はパリーに集りて講和會議を開けり。我が國は西園寺公望らの委員をこれに參列せしめ、イギリス・アメリカ・フランス・イタリヤの諸國と共に、世界に於ける五大國の一として、種々の重要會議にあづかれり。かくて翌年ドイツとの間に平和條約調印せらる。これによりて、我が國は膠州灣及びドイツが山東省に於て有せしいつさいの權利を得、我が占領せる舊ドイツ領の南洋諸島を統治する委任を受くるに至りぬ。またこの條約中の國際聯盟規約により、各國と共に世界平和のために力を盡すこととなれり。

大正十年三月皇太子裕仁親王は閑院宮載仁親王をともなはせられて歐洲巡遊のため萬里の御旅程にのぼらせたまふ。それよりおよそ半歲の間、イギリス・フランス・ベルギー・オランダ・イタリヤの諸國をめぐり、各國の元首を訪ひて親交をかさねたまひ、また諸國の學藝・産業の實際より、大戰後の社會の狀態を親しく視察したまひて、一路平安に遨啓したまへり。實に皇太子の世界御巡遊はかつてなき盛事にして、至るところに國光をあらはしたまひき。時に、おそれ多くも天皇御病久しきにわたらせられしかば、この年十一月皇太子攝政の任に就きたまひ、これより天皇にかはりて內外の政務を執りたまふ。

この年またアメリカ合衆國は、軍備制限及び極東太平洋問題につきてワシントンに國際會議を開かんとて我が國及びイギリス・フランス・イタリヤなどの諸國を招けり。海軍大臣加藤友三郎ら我が使節としてこれに參列し、十一月より翌年二月にわたりて協議をかさねたる末、比率を定めて各國の海軍を制限せり。さらに我が國及びイギリス・アメリカ・フランスの四國は新に協約を結び、各自の所有する太平洋方面の島嶼につきて紛議を生ずる時は、共同してこれを解決すべきこととし、かねての日英同盟はこゝに廢棄せられぬ。

かくて世界外交の中心は、やうやく東洋の方面にうつり來りたるに、我が隣邦の秩序は一時すこぶるみだれたり。さきに支那は明治四十

五年清朝亡びて共和國となり、袁世凱大統領に選ばれたりしも、そののち國內とかく治らず。またロシヤは大正六年歐洲の大戰中革命起りて共和政治となり單獨にドイツと和せり。こゝに於てドイツの勢力シベリヤに及びたれば、我が國は遂にその地方に出兵するに至れり。

かゝる四隣の狀勢のうちに我は友邦の好を重んじて支那共和國と厚く國交を修め膠州灣地方を彼にかへし、また手をたづさへて東洋文化の開發につとめつゝあり。またロシヤの秩序整ふにしたがひて、我は次第にシベリヤ地方より撤兵し、遂に十四年一月に至りて條約を結び、彼はその領土內の鑛產・森林など天然の富源を開發すべき權利を我に與ふることなどを約せり。こゝに於て兩國の國交回復せられ、極東の平和は固くなりぬ。

第五十八　總括　國民の覺悟　その一部（一・七頁）

……

明治の維新は未曾有の一大變革なるに、むしろ短期間に行はれしは、尊王の精神國民の間にみなぎりて、將軍進みて大政を奉還し、大名もまたみな祖先以來領有したり土地・人民をたてまつりしによる。かくこの大業のきはめて圓滿に進みたること古今東西の歷史にその類例を見ざるところなり。爾來明治・大正の昭代はわづかに五十餘年の間に驚くべき進步をとげ、內は立憲の政體を確立し東西の文化

……下略……

37H94

昭和五年五月十五日印刷納本
昭和五年五月二十日發行

（定價金壹圓）

發行所　東京市麹町區丸ノ内町二丁目一番地　東亞經濟調査局

編輯及發行人兼印刷人　東京市麹町區丸ノ内町二丁目一番地　佐藤貞次郎

印刷所　東京市神田區表猿樂町二番地　株式會社開明堂東京支店